



MAY 2026



MFE= 多焦点拡張 第7号

MAY 2026

CONTENTS

- 切断するペン、その先の言葉 **4**
石川淳「マルスの歌」を読む
福岡 弘彬
- マリアローザ・ダラ・コスタを読むこととはいかなる営為なのか？ **25**
ダラ・コスタを身で読んだ10年間の物語と火曜会
姜 喜代
- 余白と居場所 **39**
日高 由貴
- 連載** 跳躍する大杉栄 **44**
猫の後ろ姿からゾンビ的状况へ：DJ 風に（8）
川村 邦光
- 連載** 石と証（六） **66**
AIと書くこと、あるいは、「想像の果て」の前後について
沈 恬恬
- 連載** 見当 **73**
当たるも八卦 当たらぬも八卦（5）
佐藤 博昭

REVIEWS

- 乾坤眼に入って新なり、獄中の秋水 **104**
馬淵浩二『幸徳秋水』を読む
川村 邦光
- 三里塚と与饒名（永丘）智太郎の事 **111**
新垣譲『地図から消えた「沖縄農場」』から
川村 邦光

MFE の対話

118

第 8 号特集テーマのお知らせと呼びかけ／

제 8 호 특집 테마를 모읍니다

編集委員会

125

편집후기／編集後記

表紙写真 尹 汝一

切断するペン、その先の言葉

石川淳「マルスの歌」を読む

福岡 弘彬

『マルスの歌』の季節に置かれては、人々の影はその在るべき位置から^ず逸れて動くのであろうか。この幻灯では、光線がぼやけ、曇り、濁り、それが場面を歪めてしまふのだ。人々を清澄にし、明確にし、強烈にし、美しくさせるために、今何が欠けてあるのか。

——石川淳「マルスの歌」

営みが巨大な機構の中に組入れられて、それが何だか人間から離れて来た様である。明日への望みは失はれ、本当の智慧が傷けられまじめな夢が消えてしまった。しかし、人々はそれで好いとは誰も思つてゐないのである [。] 何かを欠けてゐることは知つてゐる。／しかし、何が欠けてゐるかはさだかには判つてゐないのである。

——土曜日（中井正一）「花は鉄路の盛り土の上にも咲く」

社会は、世界は、ひどい方向に進んでいくが、まだこれぐらいなら大丈夫なはず。底が抜けてきてはいるが、まだ自分の拠って立つ場所が、なくなることはないはず。——憤りと不安が常態化した、少しも自分の思うとおりにいかない情勢において、苛立ちとストレスとともに毎日の酒の量は多くなり、酔っ払いながらゲームの実況動画

で現実から逃避する日々にも、もう慣れっこになっている。まだ授業でのヘイトコメントに対しては仕事だからと何とか向き合っているけれど、酒場で隣席から垂れ流されるヘイトに怒るのはいいかげん疲れてきた。聞きたくない話から耳を塞いでその場をやり過ごすことに、すっかりなじんでしまっている。

次の戦争を予感する言葉が、そこかしこ

で、ひそひそと、囁かれるようになったと思う。この100年の歴史からすれば、戦争とはズルズルとなし崩しに進み、まだ何とか大丈夫なはずと油断していたらうっかり始まっている、という局面を確実に通過するのだから、いまがそうなんじゃないだろうかと毎日ほんとうに怖い。日々酪酊しないと寝られないのは、その感覚を麻痺させようとしているところがあると思う（それだけじゃないけれど）。

石川淳が、軍歌が席卷する状況を「『マルスの歌』の季節」と書いたことに、妙に納得してしまう。この小説をともに読む会で、ある人が、「「季節」は恐ろしいよね」と呟いた。「季節」は一度始まってしまったらもう誰にも止められないことを、気候変動のただなかで、私たちは毎日痛感している。人災であったはずの戦争は、一度始まれば、「季節」のように、あるいは「運命」のように、どうにもしようがなくなる。「事変」に過ぎなかったものがいつの間にか常態化し自然化する。「季節」が恐ろしい。

その時分は、まだずっとあととはちがいますから。まだこのぐらいいいじゃないかという楽観的気分があったのですね。だからあれが発売禁止ときてね、なるほどとは思ったけれど、そうってみればなるほどこれはいけないということはわかったけれど、まだ書いているときは、このぐらいいいけるのじゃないかという気持がどこかにあったし、また『文学界』でもおそらくこのぐらいいいじゃないかというような気持もあったのじゃないかと思

う。まだ楽観的気分があったのです。あのあとほどひどくないですからね。だからこのぐらいいいけるというような気持があったでしょうね。

（「無意識の選択——石川淳氏」、文学的立場編『文学・昭和十年代を聞く』1976.10、勁草書房）

クリックやタップによって無言で唱和される「いいね！」が統計学的超自我と化すのと全く同時に、誰に許可される必要もないのに「このぐらいいい」という規範を内面化して日々押し量り付度し、その内いつの間にか「このぐらい」の範囲も日に日に狭まっていき、後退戦の中で身振りはほとんど窮屈になる、そうした「季節」の進行のただなかで、私たちはいる。その情勢から身をかかわそうと、酒気に浸され、耳を塞ぎ、目を伏せ、口を閉ざしてしまいがちな私は、「マルスの歌」を何年も読みあぐねて、喉元に言うべき何かを帯電させながら、作品の言葉を捉えきれないでいる。

けれどもそろそろちゃんと腰を据えて、読み、そこから言葉を始めなければならない。「『マルスの歌』の季節」にもんどりうち耳を塞ぎながら、記す言葉をペン先から絞りだす「わたし」は、戦争が始まっているただなかの、私たちの問題であるはずなのだ。

一、組織化する読解

日中戦争の最中、「文学界」（1938. 1）に発表された石川淳「マルスの歌」は、その反戦的な内容と、発売禁止となった事実によって、半ば伝説化されてきた。特に語り

手の「わたし」の身振り——巷を流れる軍歌に耳を塞ぎ、レコードをかけようとする人々に「已めろ。」と言い渡す——は、マルクス主義運動がほとんど鎮圧され、開戦を契機に一気に情勢がファシズムへと傾いていく当時の文脈の中で、作家・石川淳の反俗的姿勢と重ねられ、「孤高」の抵抗者のものとして読まれてきた。

本稿はまずこの読解の前提を解除することから始めたい。たしかに「わたし」は群衆心理に対して批評的視座を保つ。だが、いま・ここにおいて、その姿勢をただ一人「正気」を保ち続けた者の孤独な抵抗として読むことは、知識人／大衆の古びたスキームを追認することにしかないだろう。もしかしたら石川本人にもあったかもしれないそうした分断意識をなぞることが、だが現在においていったい何の意味があるのか⁽¹⁾？ 戦争が既に始まっているただなかで、情勢に対して悶える自らをそうした英雄を抛りどころに慰撫するのではなく、「わたし」の書いた「事実」から、私たちが作る方法を、「マルスの歌」を読む中で思考しなければならない局面に、私たちはあるはずだ。

そこで本稿では、作品発表当時に拘留されていた美学者・哲学者の中井正一を「マルスの歌」と掛け合わせることで、organizing through reading組織する読解を試みる。中井こそ、言葉によっていかに集団性を作るかという問いを、ファシズムの進行のただなかでグリップし続けた者であるからだ。共産党がほぼ壊滅し、組織的運動が困難な時代の中で書かれた「委員会の論理——一つの草稿とし

て」、世界の反ファシズム運動や人民戦線運動を伝えた雑誌「世界文化」(1936.1～3)に発表されたこの論には、そうした問いへの肉迫が見られる⁽²⁾。特に二・二六事件以降、軍部独裁政権の樹立や中国侵略を警戒する中井は、時流に抵抗するためにタブロイド紙「土曜日」を発行し⁽³⁾、同紙において「革命的な大衆」の組織を、またはその創出を企図⁽⁴⁾していた。

中井は1937年11月に治安維持法によって検挙され、その後三年におよぶ取り調べを受けることとなる。そのため、留置中に発売された、しかも発禁によって市場にあまり出回らなかった「マルスの歌」を、彼が目にすることは残念ながらなかったであろう。だが、様々な領域をまたがって言葉と集団の関係を思考し続けた中井は、本作に描かれた諸事象を考察し直し、そこに表出されバラバラなままに留まっている人々を、それぞれに不穏な彼／彼女らの身体を、つなぎ読ませてくれるだろう。そして、中井と「マルスの歌」を出会わすことは、私たちが私たちとなり、あるいは出会い直す術を、考えることになるはずなのだ。

二、ペンを握る身体

歌が聞へて来ると……だが、この感情をどう現はしたらばよいのか。今、黄昏の室内でひとり椅子に掛けてあるわたしの耳許に、狂躁の巷から窓硝子を打つて殺到して来る流行歌『マルス』のことを云つてゐるのだ。／／神ねむりたる天が下／智慧ことごとく黙した

り／いざ起て、マルス、勇ましく／
 ……………／／い
ぶり臭いその歌声の嵐は真黒な塊とな
つて家々の隅にまで煤を吹きつけ、町
中の樹木を潤らし、鶏犬をも窒息させ、
時代の傷口がそこにぱつくりと割れは
じけてゐた……しかし、 一体こんなふ
 うの文句をどれほど書きつづけて行つ
 たならば、わたしは小説が始まるところ
 まで到達することができるのか。「マル
 スの歌」一⁽⁵⁾

作品冒頭、小説を書けない小説家である「わたし」は、流行歌「マルス」が鳴り響く「狂躁の巷」に立つ自らの「この感情をどう現はしたらばよいのか」と問いながら、状況にかなった言葉を書き付けることができな己の無能さを慨嘆している。その言辞は少し危うい。いま・ここに「時代の傷口」を感知する彼は、うっかり世界の終わりを描き出しそうになっているからだ。「真黒な塊」となった「歌声の嵐」は、「家々」や「樹木」や「鶏犬」を殲滅せんとするばかりである。「時代の傷口がそこにぱつくりと割れはじけてゐた」——黙示録的情景、あるいは破壊し尽くされた戦場のような光景から、かろうじて一呼吸置いた後に「わたし」は引き返す（「……しかし」）。そして彼は「のた打ちまはりながら」ひねり出したはずのその文言を、「ああ、無慙にも素朴な詠嘆の出殻」（同）とまた嘆く。

この冒頭において、「わたし」はどうか姿勢を保とうとしているように見える。自らどうすることもできない時代の流れの中で、敗れること・滅びることの美学化や、

ナルシシズムに満ちた自意識の吐露には終止せずに、そこから何とか踏み出そうとする、という姿勢を。「地上の出来事」（同）を詠嘆しつつそこから敗北の方向へと想像力を飛翔させるロマン主義——当時の文脈で言えばたとえば「日本浪漫派」——に接近しながら、そうした方向から逃れる、という構えがとられているのである⁽⁶⁾。

小説家は「嘲笑する窓外の歌声に赫となつて」「いら立つ指先で書く傍から一枚一枚びりびりと紙を裂」くのだが、だからといってただ「地上の出来事」に留まるわけにもいかない。

抑ゝ地上の出来事に、どうしてこれほど本気になるのだ。およそ小説を書くべきペンはどんな地上的感情をも、その整理不整理をも、必ず切断してしまつてゐる筈ではないか。わたしは立ち上つて、遥かに街頭の流行歌に向ひNO!と叫んだ。（以上同）

「地上の出来事」「地上的感情」を「ペン」が「必ず切断してしまつてゐる筈ではないか」と、小説家が願うように問いかけるのは、一筋縄にそれが断ち切れるものではないことを知っているからだ。「ペン」によって想像力を天上へ飛翔させることもできず、さりとて「マルス」が鳴り響く「狂躁の巷」に立つ己の身体が、「地上の出来事」を完全に断ち切ることを許さない——天上にも、地上にも、言葉が発される経路がない、このデッドロックの中で物語はつむがれている。

小説家が一節において、繰り返しペンを

握り直すのは、そのデッドロックをこじ開けようと悶えているからだ。「マルスの歌」を読み解くためには、このペンをグリップする身体ににじり寄りねばならない。丁寧に読もう。「わたし」は「再びペンを取り直し、もうすべてを刎ねつけ、きちがひのやうになつて」小説を書こうとするが書けず、一夜明けて、町で酒を飲み、一寝入りするために映画館に入る。だがスクリーンに映し出されたニュース映画の戦地の光景、笑顔の壮丁に囲まれた現地の子供たちの「沈黙」から、「NO！」の叫びを聴き取る。

それは甚だ平和的な光景らしかった。だが、郷土の山河と他国人の歓笑の裡にあつて、この二人の子供の顔は、…… [= 計21字分の伏字、中略] ……涙とか憂鬱とか虚無感とか、絵具に写せば写せるやうな御愛嬌な表情はそこにはなかつた。彼等は切羽つまつた沈黙の中で率直にNO！ と叫んでゐた。ああ、彼等のNO！ を前にして、わたしのNO！ の微弱低調なるひびきなど何物であらう。個人の感情整理のごとき甘つたるい影を吹き払つて、そこには最後に残された……が赤肌を剥ぎ出してゐる。しかるに、わたしは、今こそ書か^{ママ}かるべき小説の一行をも書き得ないで、てれかくしに酒を飲んだり、だらしなく居睡りをしたり……わたしは恥辱にまみれ、びつしより汗をかき、こそこそと席を立ち、(尻尾があれば)尻尾を巻いて、群衆の足の間から外へ抜け出した…… (以上同⁽⁷⁾)

占領者と被占領者の間の交流という「平和的な光景」が演出されているショットに、暴力を予感する子供たちの、「沈黙」の「NO！」が読み取られる。そうしたただなかで、「わたし」の「ペン」が記すのがまさに「沈黙」(=伏字)の領域であるとき、この言葉の運動には暴力への怯えが幾重にも折り畳まれている。子供たちは壮丁たちの銃剣を眼前にしながらか、「切羽つまつた沈黙の中で」身を強ばらせている。そこには「わたし」が記すべきはずの「個人の感情整理のごとき甘つたるい影」からの「切断」があるのだが、むろんそれは生やさしいものではない。自らの生き死にが問答無用で規定されている尋問空間⁽⁸⁾に被占領者はあり、その中で子供たちは言葉を発することを封じられる。まずは「わたし」にとってその圧倒的不均衡が「恥辱」となる。

だが問題はそれだけではない。小説家は、それを直接的に記すことができない。なぜならこの状況から読み取れることを明示的に記せば、「わたし」の時局への「NO！」は「沈黙」どころでなく、あからさまな戦争批判に直結し得るからである。プロレタリア文化運動がほぼ潰滅に追いやられた時勢において、「わたし」の身体は、反戦を唱えることによっていかなる状況が訪れ、どのように具体的な暴力が降りかかるかを、確実に感知している。暴力の予感の中で「沈黙」が強えられることを、作品は伏字によって示しているのである⁽⁹⁾。空隙は埋めることのできない外傷の痕跡なのだ。だから、「恥辱にまみれ、びつしより汗をか」く「わたし」の様子は、「てれかくし

に酒を飲んだり、だらしなく居睡りをしたり」する「平和的」日常の中で、それでも「NO!」の在り方を模索する者が、身を緊縮しながら「ペン」を握っている光景として、読み替える必要があるだろう。「わたし」がスクリーンの光景を読み替えたように。

言葉が自らの身に暴力を引き寄せる占領下において、「沈黙」が強えられることを、「わたし」は己の創作の現場で、言葉の運動として、表現している。言い換えれば、「わたし」は、銃剣の前で強えられる「沈黙」を、「マルス」が鳴り響く状況における創作行為と重ね合わせ、言葉の領域に引きずり出している。だがそれは同時に、「個人の感情整理のごとき甘つたるい影」から「切断」された「彼等のNO!」を、すなわちいま書かれねばならない声なき声を、あからさまに書くことの不可能性の再認である。こうして小説家のデッドロックに、また一つ壁が立ちふさがり、天上にも地上にも逃げ場がない、さりとて状況に対して明示的に抵抗することもできない、にっちもさっちもいかない状況で、「恥辱にまみれ、びつしより汗をか」く「わたし」は、それでも「ペン」を握る。

今、銀座の裏町に在るこのアパートの一室で、日毎に高くなる街頭の流行歌「マルス」の声に耳を打たれながら、わたしはまたも黄昏の光に浸つてペンを握つてゐる。もうきちがひのやうではなく、わたしの正気をペン先に突き止めるために、まだ動かぬペンを動かさうと努力してゐるのだ。(同)

情勢のただなかで幾つも立ちふさがり壁に囲まれ、自らの「正気をペン先に突き止めるため」に葛藤し、逃走線を描出しようとする言葉⁽¹⁰⁾。それが、「マルスの歌」だ。この後、作品は帯子が自らの部屋に飛び込んで来た描写に移り、「小説の世界はまだ始まらない」が「事実のはうから書き出す」旨が語られ(同)、物語が展開していく。だが、そこで謂う「事実」とは字義通りの「事実」ではない。「マルスの歌」が、如上のデッドロックにおいて書かれているならば、物語としてつむがれる「事実」とは、ロマン的想像／リアリズム／直接的反戦のアジテートのどれでもない、そうした言葉たちから逃れようとする領域である。本稿の問いの照準はそこに向かっている。その「事実」の領域は、私たちの社会において、何を言葉として配置しようとするのか？

三、巷に軍歌が鳴り響く

席卷する軍歌「マルス」に耳を塞ぐ「わたし」。そうした彼がペンと「地上の出来事」との「切断」を願うのは理に適っている。軍歌が鳴り響く戦時の日常は、ペンと接続することで駆動しているからである。現実社会に翻り、軍歌「マルス」のモデル＝「露営の歌」⁽¹¹⁾をめぐる力学を整理することで、そのことを確認しよう。

古関裕而が作曲したことでも有名な「露営の歌」は、1937年8月リリース以来半年で60万枚を売り上げ空前のヒットを遂げた軍歌だ⁽¹²⁾。「神ねむりたる天が下／智慧ことごとく黙したり／いざ起て、マルス、勇ましく」と作品中に記される「マルス」

のフレーズは、たしかに以下の「露営の歌」の歌詞（藪内喜一郎作）を想起させる。

（一）勝つて来るぞと、勇ましく／誓つて故郷を出たからは／手柄たてずに死なれよか／進軍ラツパ聴くたびに／臉に浮かぶ旗の波。[…]

（四）思へば今日の戦闘に／朱に染まつて、につこりと、／笑つて死んだ戦友が、／天皇陛下万歳と／のこした声が忘らりよか。

（五）戦争する身はかねてから／捨てる覚悟であるものを／鳴いてくれるな草の虫、／東洋平和のためならば／なんの命が惜しからう。

（「本社懸賞募集当選歌発表」（「東京日日新聞」1937.8.12）より引用）

日中戦争進行の最中、東京日日新聞社・大阪毎日新聞社は、「本社はこのにわが皇軍の歩武堂々たる進軍を讃へ、前線といはず、銃後といはず、軍民ともに唱和すべき“進軍の歌”を広く江湖に募集する。」（「進軍の歌 懸賞募集」、「東京日日新聞」1937.7.31）と、軍歌の歌詞を懸賞募集する。その佳作が「露営の歌」であった。一週間の募集期間に応募された歌詞の総数は25,000余に達したとされることから、その熱狂ぶりが伝わるが、注意すべきは懸賞の選者である。計四名の選者の内、二名の軍人とともに名を連ねたのが、小説家・菊池寛と詩人・北原白秋だった。菊池は藪内喜一郎が記したその詞について、「進軍の歌としては一番目のものでない」が「味」があると評し、北原は「応募歌中でやはらかい異色あるもので「ここはお国を何百里」を今に甦らせ

新しい息吹きを与へたものとして殊に戦地にある勇士によつて愛唱されると信じます」と激賞している（「選者の言葉」、「東京日日新聞」1937.8.12）。ペンがどのような「地上の出来事」「地上的感情」に接続し、いかなる言葉を生産していたのか、如実に理解できるだろう。「マルス」は自然発生的に生じたのではなく、ペンによってその詞が紡がれ、ペンがまたそれを評価していた。ペンを介した軍事-文学のフローにおいて、「文化の擁護」（三）者たる文学者は積極的に動員されていたのであり、むろんこの後には、ペン部隊の動きも接続されていくだろう。

だが「露営の歌」の果たした役割は、戦意昂揚のみではない。水木穰治「不況に喘ぐ最近レコード会社の動き」（「話」1938.3）によれば、「支那事変の勃発により、一層検閲の眼が鋭くな」っていた当時、各レコード会社が苦戦を強いられる中で、「露営の歌」は「稀れに見る程ヒット」を放ち日本コロムビアに活況をもたらしたという⁽¹³⁾。それ以前からも軍国歌謡は発売されていたが、「露営の歌」の成功はレコード界全体の動向に波及し、内閣情報部懸賞曲「愛国行進曲」は計100万枚を売り上げる大ヒットとなった⁽¹⁴⁾。軍歌はレコードやラジオによって巷に流れ、市場を潤す。「露営の歌」は軍事-産業-資本主義のフローを介して人々の耳へと接続し、情動と欲望を整流する。ペンはその戦争機械のジョイント部でもあったのだ⁽¹⁵⁾。

小説「マルスの歌」がその状況を敢えて記すのは、そうした戦争機械からの「切断」

を願うからだ。

この『マルスの歌』と云ふ言葉が投げ出されるや、とたんに一座がわつと爆発した。十数人の眼が血走り、唾が飛び違ひ、声がぶつかり合ひ、銘々が同時に、もうあたり構はず勝手なことを喋り出した。／「君、これは絶対秘密だが、歩兵の靴一足に要する釘の数は何本だか知つてゐるか。」「大きく云ふと、あれは国家的損失だつたねえ。仮にカルウソオをエチオピヤで失つたと考へてみたまへ。」[…]「五百億円は五銭の何倍だかすぐ云つてみたまへ。」[…]「地図がないかね。いい地図が。作戦が立たんよ。」「文化の擁護と云ふことは……」(三)

耳や口を介して、流行歌「マルス」と接続した瞬間に、人々は熱狂し、はじまったばかりの戦いについて、空虚な言葉を、爆発的なまでに並び立てる。「マルス」は人々に戦争を語る欲望を喚起させ、その語りは利潤がはじき出される統計学的視点からなされる。そこでは軍事と資本と文化がごちゃまぜに語られ、人々は時にメディア上の言説と、時に国家の地政学的身体と自らを一体化させながら、「銘々が同時に、もうあたり構はず勝手なことを喋り出す。互いに議論を交わさないまま、けれども己の情動と欲望をファシズムのフローに則って同じ先へと流している⁽¹⁶⁾。議論が起こっているようで言葉が交わされないこの「地上」において、「個人の感情」は、中井正一が謂う「真空管の言葉」によって見事に

「整理」されてしまっているのだ。

しかし、人々は、話合ひはしなかつた。一般の新聞も今は一方的な説教と、売出的な叫びをあげるばかりで、人々の耳でも口でもない。「真空管の言葉」も亦そうである。益々そうである。／今人々は集団に於て、聾啞的である。(土曜日(中井正一)「集団は新たな言葉の姿を求めてゐる」、「土曜日」1936.10.20)

新聞もラジオも利潤生成のために情報を流し続けている、そして人々はそれをなぞり何かを語り合っているようでもある、けれどもそれらは「真空管」=空っぽで、「話合」っているようでいてまるで「話合ひ」になっていない——この意味において、「マルスの歌」は、言葉が言葉でなくなっている私たちのいま・ここを的確に射抜いた小説である。「わたし」はそうした「地上」の情勢を違和感とともにペンで書き付けながら、同時にそれを拒否する身体を賭け金にして、別の言葉の在処を探るために、さまよっている。

四、歌わない人々

「マルスの歌」を読むことは、まずは、その言葉を探る葛藤のプロセスに巻き込まれることとしてある。時にやり切れず、二合壇を呑んで酩酊し、「わたしの正気とは狂気のことであつたのか。」(四)と均衡を失ってよろけながらも、知覚した世界への違和感・苛立ちを覚える身体を／身体が書き付けた文章に。

『マルスの歌』の季節に置かれては、人々の影はその在るべき位置から亡れて動くのであろうか。この幻灯では、光線がぼやけ、曇り、濁り、それが場面を歪めてしまふのだ。人々を清澄にし、明確にし、強烈にし、美しくさせるために、今何が欠けてあるのか。ここでも先刻茶店で秋を探り当てた時のやうに、何か非常に判然としたものの前でわたしは惑ひ、焦れ、平静を失つてゐるやうであつたが、やがてその何かが遅く来て、しみじみと、根強く、隙間なくわたしの裡に満ちひろがつた時、そんなにも判り過ぎてゐるものの周りに足踏みしなければならなかつた自分が迂闊に鈍物に見え、わたしはたいへん恥かしく、ひとりで顔が赤くなつた。思想、ああ、思想……はげしく咽喉が乾いて来た。現実のわたしの咽喉のほかに、どこかで咽喉が大きく乾いてゐるやうな気がした。(同)

物語の終盤、嫌悪する日本の象徴＝「不二」に背を向けて三津の水族館を眺める「わたし」は、このようにやはり袋小路にいる。海の中を仕切りで区画し「絶えず打ち寄せる沖の潮」によって水が入れ替わり続ける造りのその水族館では、魚たちは外海を自由に泳いでいるやうで、その実閉じ込められている。すなわち「臍肉でしかはち切れてゐない健康な魚ども」や、「軍用犬」のような「イルカ」とは、そっくりそのままそれを観ている「智慧の足りない」見物たちであり、そして「わたし」である(以上同)。外海に接していながら出口のない、こ

の島国の縮図こそが水族館だ。上記でプラトン『国家』の洞窟の比喩のごとき「幻灯」が「わたし」に想起されるのはその証左である。「事実」が結末を迎えようとするこの場面においても、デッドロック——後ろに「不二」、前に水族館——の中で「人々の影」が「亡れ」、「場面」が「歪め」られる。目の前のスケッチが崩れていくような光景が広がり、身体的違和だけが残り続ける。

結論を言えば、この小説は、「地上の出来事」「地上的感情」を完全に「切断」した言葉に、辿りついていない。それは、「思想、ああ、思想……」といううわごとのやうなつぶやきとともに、「現実のわたしの咽喉のほかに、どこかで咽喉が大きく乾いてゐる」様子からも明らかだろう。この「咽喉」の渴きを満たすのが「思想」であり、言葉であるなら、はじめに願われていたその言葉は、最後までやってこない——。だが、それを希求する過程、「地上の出来事」にまみれながらもそれを求めてふらつく身体が書き連ねられていることこそが重要であり、その身体を、新たな言葉の出発点にすること、言葉の領域として社会に置き直していくことこそが重要である。行進する身体でも、歌に脊髄反射する身体でもない、苛立ち、違和感を抱える身体を⁽¹⁷⁾。

ただし、こうした身体を抱える「わたし」の在り方を、現在の情勢において私たちは、戦時の人々から「乖離」した「孤独」なものとして捉えてはならない⁽¹⁸⁾。前節で中井正一を引いたのもそのためである。この身体を複数的なものにつなぎ、状況に介入するものとして集団性を立ち上げなければ、

石川淳という作家の「孤高」を追認し、時代に一人抵抗した者として英雄視するに留まってしまおう。「集団は新たな言葉の姿を求めてゐる」のだ。

書きつけられた身体を置き去りにせず読むことが、「わたし」の営為を、集団的なものとして知覚させるはずである。上記で、「わたし」は「思想」の不在に思い至る際、「たいへん恥かしく、ひとりで顔が赤くなつた」と述べている。思えば、小説が書けないことを「まことに恥かしい」とし(一)、映画館から出る際も、「わたしは恥辱にまみれ、びつしより汗をか」いていたのであった。この「恥」とは何か？

端的に、それはおそらく、『マルスの歌』の季節」のただなかにおいて、自らが、恥ずべき者になっていることによる。そして作品の中で、この「恥辱にまみれ」ているのは、「わたし」だけではない。

いざ起て、マルス、勇ましく……／＼
わたしの乗つてゐる車室からも、それに唱和するやうな声が迸つた。見知らぬ人たちが声を揃へて歌ひ、歌はない人たちは下を向いて照れくささうな恰好をしてゐた。(四)

「マルスの歌」には、「マルス」を歌わない人々が、一瞬だけ映っている。口を噤むその人々が「照れくささう」なのは、たんに決まりが悪いからか。それとも、他に発すべき「思想」-言葉があるはずということを知覚しながらも、それを持ち合わせておらず、その場で歌わないという消極的方法しかとれない己を、恥じているからか。

思えば「わたし」も、「マルス」が流れる状況において小説が書けず「てれかくしに酒を飲」む者であったならば、答えは後者であるはずだ。彼が叙述する物語は、歌わない群衆たちとの「恥辱」を基にした連なりを、その物語の中に滑り込ませている。

五、大義の文法の「切断」

ファシズムの熱狂へと整流されたフローを「切断」しようとするその身体は、他者と接続し、新たな集団性を獲得する可能性を有している。それは、作品冒頭の映画館の場面にも確認できる。再度中井正一を介せば、本稿二節で引用したニュース映画から「沈黙」の「NO!」を読み取る場面、そこに至るまでの過程にそれは潜んでいる。

見ると、スクリーンでは①巨大な軍艦が晴れた水の上に長い砲身を突き出し、おそらく今発射したばかりなのであらう、何食はぬ態で冷く取り澄したその砲口から、ふわりと一吹き、薄い真白な煙が細く流れて、すぐ消えた。それは一瞬間、日向ぼっこをしてゐる老人の煙管から吐き出されたもののやうに、甚だのどからしい煙と映つたが、同時にそんな白ばつくれたけはひにこそ砲撃の凄まじさが的確に感じられて、わたしはぎよつと胸を衝かれた。②すると、場面が變つて、そこには水辺に楊柳のある村落のけしきで、半ば壊された百姓家の前に笑ひ顔をした壮丁の群がつどひ、真中に一人年長と見

えるのが椅子にかけて、これは特にゆたかに髯を揺がせて笑ひながら両手を前に突き出してゐたが、その逞ましい手の下に、小さな頭を押しつけられて、まさしく壮丁等とは国籍を異にするところの二人の子供が立つてゐた。それは甚だ平和的な光景らしかつた。[…]
彼等は切羽つまつた沈黙の中で率直にNO！ と叫んでゐた。(一)

映画は傍線部①軍艦のカットから②長閑な村落のカットへとモンタージュされる。このカットの連結〈①自国の軍事力→②優しい日本兵とそれを歓迎する現地の民衆〉は、〈①この戦いは→②東洋平和のためのものである〉という大義の文法に基づいたものであり、むろん利潤を生成するファシズムのフローと軌道を同じくする⁽¹⁹⁾ 運動イメージである。だが「わたし」は「甚だ平和的な光景らし」いものとされるその演出に勘づきながら、映し出された子供たちの表情に「沈黙」の「NO！」を読み取る。すなわち、カットとカットの連結部＝「^{コブラ}である」＝繫辞が映画には不在であること、戦いの意味は一義的なものではないことを鋭く感知し、プロパガンダがでっち上げようとする繫辞を、そこに生じるフローを「切断」するのだ。

中井正一は敗戦後間もないころ、「演劇及び文学の如く、「である」「でない」の説明の繫辞（コブラ）をもつてゐない」映画の可能性を唱えている。カットとカットの間に繫辞がないまま映画はつながっており、それは大衆の中に放り込まれる。その間隙を埋めようとするとき、民衆は「主体

性を撃発する」というのである。例えばニュース映画を論じる際に、中井は以下のように語る。

それが事実であると云ふ信頼感を、レンズ及フィルムの物質的^{物質的}手続の描写がもつてゐるとき、このフィルムの切断と連続によつて、歴史を縦に貫いてゐる人間の願ひ、即主体性を撃発せしめるとき、ニュースカメラマンが捉へたるところの一つ一つのカットは、実に、新しい世紀の芸術の素材となつて来るのである。／物質が捉へたる時間と時間を自由に繋ぎ合せることで、人間の根底に横つてゐる欠乏、願ひ、獣から成長した、人間の成長と、その成果より生まるゝ香気と尊厳を、撃発することは、実に新しい試みと云はざるを得ない。[…]／人間が集団大衆となることで、又物質の光学的科学機構の中に沈み込むことで、物質的影像である一コマコマを、民衆は歴史的意欲の撃発者として捉へたのである。

(以上「映画の時間——映画の主体性の問題に関連して——」、「映画芸術」1946.9)

カットの連結の意味づけが宙づりにされているからこそ、人々はそれを「自由に繋ぎ合せること」ができ、そのことによって「集団大衆」は各自の「欠乏、願ひ」を知覚し、「主体性を撃発」する。けれども、ファシズムにおいて「集団大衆」が辿った軌跡を顧みたとき、この言葉は両義的でもある。ニュース映画によって人々は、己の「欠乏、願ひ」を国家とともにし、積極的に帝

国の「歴史的意欲の撃発者」= 国民となり、戦争を遂行したのではなかったか？ そして、その身体は、「マルス」を歌うものでもあるだろう。

中井はそうした過去をもちろん知悉しているだろうし、むしろ己が翼賛体制に関与した事実もよぎっているはずである。だが、映画の可能性に賭ける。それは祈りにも近い。

人間は、自分が見失つてゐた自らの方向を、カットとカットの切断の隙虚の中に撃発し復活するのである。社会的矛盾と欠乏を媒介として、自らの本質を明るみにもたらすのである。／この社会的矛盾と欠乏に面する切断空間、この断崖、この断崖に面するところ、これが実は歴史を嗣いで来た人間の根本的歴史的パトスである。この世の中が果して善くならしめることが出来るのか、とても善くして行くことは不可能なことなのか、実践の苦悩の果に面する人類の嘆声、これが、歴史の面する「切断空間」である。[…] 善くして行けるか善くして行けないかと云ふ切実な歴史的現実へのやむにやまれざる願ひと、憤りが、歴史を支へる歴史的主体性を構成して行くのである。

（「映画の空間——映画の主体性の問題に関連して——」、「映画芸術」1946.6⁽²⁰⁾）

「カットとカットの切断の隙虚」を繋ぐのは「歴史的パトス」であり、「この世の中」を「善く」したいという「願ひ」、「善くして行くこと」が「不可能」であること

の「憤り」が、「歴史的主体性を構成して行く」はずである。ファシズムを通過した敗戦国において、この中井の議論は「余りにも遠く展望をひらいたかの様」（同上）だ。同じ轍を踏むことだって充分あり得る。

けれども、まさにファシズムのただなかにおいて、「カットとカットの切断の隙虚」を繋ぐことで「社会的矛盾と欠乏を媒介として、自らの本質を明るみにもたら」さんとしていたのが、「わたし」ではなかったか？ ニュース映画において発信される「平和的」占領という「社会的矛盾」、あるべき世界からかけ離れていることの「欠乏」、そのような耐えがたき世界、「恥」ずべき自らになってしまっていることの「恥辱にまみれ、びつしより汗をか」き、ペンを握ろうとするその身体こそ、「歴史的主体性」が「構成」された特異点だ。「わたし」と中井は戦中／戦後を越えて確かに連なっており、中井が切望する来たるべき「民衆」は、日中戦争の途次で確かに誕生していた。

そしてその連なりには、作品において、「わたし」の視界に見切れていた「マルス」を歌わない人たちも加わる可能性がある。「照れくささう」に口を噤む身体、そこに生じているかもしれない「恥」を同じくするものとして。ファシズムのフローを「切断」する身体は「わたし」だけのものではないのだ。

六、冬子の演技と「嘘言」

「地上の出来事」を遮断することはできない、だが「『マルスの歌』の季節」から逸れようとする身体に接続されたペンは、

ファシズムのフローを、大義の文法を「切断」し、繋辞の未決性を感知していた。そして、「わたし」の身体は物語の中で、複数化する可能性を持っていた。ならば、暴力を予感し、声高に反戦を唱えることもできないペンが、「事実」として描出している「民衆」こそ重要である。そこに描かれる人々、具体的には冬子・帯子・三治も、もちろん時局において、声高に戦争に抵抗することはできないし、そもそもデッドロックにおいてそのような人物を描くことは不可能である。だが、逃走線をこじ開けようと「わたし」が描く「事実」の中で、不穏なままに存する「民衆」たちの言行には謎が多く、何者であるかがよくわからない⁽²¹⁾。敢えて大げさに言えば、様々にフローを「切断」するそれらの演じる身体は、繋辞の未決性を抱え込むものである。

これら「民衆」の特異点となるのは冬子だ。彼女は四年前に結婚した三治と新劇の公演をよく観劇し、翻訳の戯曲を多読し、夫にもその趣味が移る程である。そして「一年ばかり前」、「某全集本の一冊を読ん」だことを契機として、演じることのレッスンを始める。

「ねえ、『聾の真似をするもいいが、度を過すと命にかかはる』つて、これどう云ふこと。」「え。」「『聾の真似をするもいいが……』」「いきなりそんなこと云つたつて判らないよ。そりやそれだけの意味なんだらう。」「だつて……」「だつて、さう書いてありや、それだけだらう。」「ぢや、それだけの意味つて云ふ、その意味はどう云ふこと。」「知

らないよ。僕はそんな学者ぢやない。」「……」冬子は両方の耳の孔に人差指をさしこんで、唇を結んで「むーつ」と云ひながら眼で笑つてみせた。びつくりするやうな美しい眼であつた。「さうか、冬子、聾になつたのか。おまへ、聾か。」(以上三)

戯曲の「聾の真似をするもいいが、度を過すと命にかかはる」という言葉の「意味」に執拗に拘る冬子は、それを触知しようと演技を実践する。この文言はアウグスト・ストリンドベリの戯曲「稲妻」(1907)のものであり、波線部に若干の異動はあるものの、小宮豊隆の訳「聾の真似も可いが、度を過すと命にかかはる事もあるやうだ。」をほぼなぞっている⁽²²⁾。冬子はそれを契機に、「唾になつたり盲になつたり」死んだ「真似」を繰り返した果てに、自死に至る(三)。

台詞をそっくりそのまま体现してしまったかのような冬子は、実はストリンドベリ「稲妻」の筋書きから大きく逸れている。「老境の静けさ、諦念⁽²³⁾」を表したとされる本作では、退職官吏の「主人」が、「なんにも見たいものはない」「少しは聾になりたい位」と、現実と対峙することを避け続ける。作品では「主人」が離別した妻と再会することで一波乱が起き、「聾の真似も可いが、度を過すと命にかかはる事もあるやうだ。」と一度思いはするものの、彼はついぞ現実には蓋をし続け、最終的に「老の静けさ」の中での暮らしを選ぶ⁽²⁴⁾。以下の言葉は、この戯曲を象徴しているだろう。

主人 私は身動きもできない。……受

ける事は出来る、しかし勿ね返す事は、出来ない！。／ルイゼ [=主人の親類の娘] でも危険を躲して計りみると、今度は向うから迫つて参ります、抵抗しずにゐると、打ち据ゑられます！。／主人 這入り込ませさへしなければ、近づきやうはない！。

まさに「諦念」をテーマとしたこの戯曲では、しかし「聾の真似」が「命にかかはる」ような破局は訪れない。稲妻のように一時の危機が訪れるも、現実を遮断し続けることでやがて平和が回復され、「秋」の訪れが予感されて閉幕するのである。

冬子は「『マルスの歌』の季節」において「主人」の言葉の「意味」を確かめるように「聾」の演技を、さらには「啞」「盲」の振りを実践する。戯曲を透かし見れば、現実を遮断しながら「静けさ」の中で生きたいという欲望がそこには浮かび上がる。だが、平和な「秋」は愚か、「マルス」が鳴り響く「狂躁」の「季節」が到来した情勢下でそのように生きることは土台不可能であり、それは彼女が最後に「死」に至ることからも明らかである。山口俊雄が述べるように、冬子からは「軍歌に耳を塞ぎたいという気持ち」を読み取るべきであり、またその果ての「自殺」は「軍国主義的な現実からの逃避の手段として究極的」な営為として捉えられるだろう⁽²⁵⁾。諸感覚に接続され身体になだれ込んでくるファシズムの「切断」不可能性の前で、自らの生死が管理されようとする総動員体制において、冬子は最後の局面の自律性を手放さず死を選んだ、とも考えられる。

だがここで最も重要なのは、冬子の演技とは〈私は私である〉〈現実^レは現実^レである〉という自同律の繫辞を「切断」するものであるということであり、それに伴って「確信」の繫辞を外して「嘘言」を述べていたという事実である。抵抗できない「季節」が不可避に己の運命を決定しようとするただなかで、冬子は「聾」「啞」「盲」「死」者を演じることで、自らは自ら^レである、あるいは現実^レは現実^レであるというリアリズムを「切断」した。そうした欲望をドライブさせ、「真似」に徹することで自死に至った冬子は、演技しながら（「冬子は役者のやうに盛装して、念入に化粧して、とても美しく、かはいらしく、安らかに眼をねむつてゐました」(三)）＝自同律を揺るがしながらリアリズムを突破せんとする、命を賭したアクターであったのだ。

さらに、以下の三治との応酬からは、冬子の発話が演技であったことを理解できる。

「自殺の真似してみようかしら。」「本当に死んだらどうする。」「そんなの無意味だわ。本当に死ぬなんて、全然あほらしい。[…]

「死」が「真似」ですまなくなってしまうことを牽制する三治を「安心」(同)させるかのように、冬子は「自殺」が「無意味^レである」と語っていた。だが彼女はそれを裏切り、発話と行為の連関を「切断」する。冬子は三治に対して演技をしていたのであり、端的に、その言葉は「嘘言」であったのだ。

ここでまた中井正一の言葉を掛け合わせよう。中井は「委員会の論理」(前掲)で、コミュニケーションにおける「嘘言」の重要性を述べている。

内的確信に於て肯定せるものを外的主張で否定をもつて承認を求める場合、或は内的確信に於て否定せるものを外的主張で肯定をもつて承認を求める場合、その何れにもせよそれは嘘言を構成する。しかし、厳密に云はしむれば、何れの言か嘘言ならざると云ひたい程、日常及公的生活は嘘言に充ちてゐる。(七より引用)

冬子の「嘘言」とは、「自殺」は「無意味」でないという「内的確信」を、「自殺」は「無意味」であるという「外的主張」によって「承認を求める」ものであったわけである。この「嘘言」が中井にとって重要なのは、〈AはBである(orでない)〉という「確信」を、〈AはBでない(orである)〉と「主張」することによって、人は己の判断の繫辞を外し、他人に判断を委ねることになるからだ⁽²⁶⁾。すなわち「嘘言」は自同律を崩し己を分裂させると同時に、他者への開いたコミュニケーションを可能にすることで、私たちを作る端緒となるのだ。さらに上野俊哉が述べるように、中井の「嘘言」を介した「組織化」(かたちの編成)には、「全ての集団化からいったん離脱し、何らかの本心(確信)を隠して生きのびるような論理がひそんでいる⁽²⁷⁾」。冬子は総動員体制から「離脱し、何らかの本心(確信)を隠して⁽²⁸⁾」死んでいったのである。

もちろんこの自死を手放しに称揚することはできない。だが、現実から逃れようとする冬子の命を賭した演技は、二人のオーディエンスへ呼びかけ、そこに新たな私たちを誕生させたのではないか？ そのアクトはまず帯子を、さらには三治を、舞台上に引きずり出したのではなかったか？。

七、逃れていく者たち

「繁華」な銀座を好み日頃から享楽に「跳ね廻」る帯子。彼女は借金を頼もうと冬子の家に向かい、その死を第一に知るも、「帯子、どう考えても死んで行く人と縁がないやうだ。今みたいに、遠くで死にたくない人が毎日たくさん死んでる時に、なんとなく自分勝手に死んぢやうなんて……」と述べる。個別具体的な死は、戦場の死と比較されることによって軽量化され、「なぜ冬子が死んだか、死んだほうがいいのか悪いのか、そんなこと知らない。考へない。」と瞬時に忘却された挙げ句、彼女は「マックス・ファクタアの鉛筆できゅつと眉を引き上げた」かと思えば、外から聞こえる「マルス」に「ばんざい！」を叫ぶ(以上二)。ここで快楽を瞬間毎に組み替え、姉の死→戦場の死→「マックス・ファクタア」→「ばんざい！」を連結し滑走してしまうモダンガール・帯子はそっくりそのまま、グロテスクでファナティックな軍事-産業-資本の再領土化運動そのものようだ。

したがって、葬儀で姉を「ああ、かはいさうなねえさん。」と労りながら、参列者を一喝する以下の言葉も、信が置けるものではない。

「ここで、あなた方は何を云ふことがあるんです。勝手に愉しく『マルスの歌』の話をしてゐらつしやい。それがどんなものだか考へてもみもしないで。そんなに好きな歌なら、本気になつて歌つてごらんなさい。さあ、みんな『マルスの歌』を合唱してごらんなさい……」(以上三)

他ならぬ帯子こそ、姉の死を知覚しながら「マルス」に「ばんざい！」を送っていたのだから、その変わり身の早さには目眩がしそうである。場面によってスピーディーに人格を変える彼女は、天性のアクターと言えるかもしれない⁽²⁹⁾。

ただし、元々姉には「全然死ぬ理由がない」(二)と断じていた帯子が、三治から一連の顛末を聞いた後に上記の言葉を発したのは、存外大事なはずだ。帯子はそこで現実を遮断しようとしていた冬子の「聾」などの演技を耳にしたのであり、すなわち演技の果てに姉が自死したことを知覚している。だから、「マルス」の話で盛り上がる参列者に対する憤りも、この時点の彼女の本心かもしれないし、ひょっとしたら「自殺」に現実からの逃避を察知して、冬子を「かはいさう」と本心から述べたのかもしれない。

いや、むしろ重要なのは、帯子の言葉が本心か本心でないかが決定不可能であるということだ。帯子の言葉は「嘘言」かもしれないのだ。ただでさえ瞬時に己を組み替えるアクターであった彼女が、冬子の演技を、その台詞を、人伝いであれ耳にしたのならなおさらだ。冬子の死に「僕の愛が足

りなかつたんです。」と述べる三治に帯子が語りかけた言葉は、彼女が「嘘言」の領域の重要性を認識していることを表しているだろう。「いけない、三治さん、それ云つちや。そんなこと云つちやいけない。そんな言葉、外に出すと壊れちやふ」(以上三)。「確信」は隠すべきであり、繋辞を外すべきであると、演じる死者・冬子とのコミュニケーションを介して帯子はレッスンを受け、今度は三治にそれをレッスンしているのだ。では、もし、「嘘言」を述べる演技がファシズムのフローから逃れる方法であることまで、死者のアクトから教えを得ていたとするなら——？

そして三治である。三治こそ冬子の演技を最前列で目にし、ともに日々レッスンに励んでいた人物だ。新劇を冬子と欠かさず観に行き、翻訳戯曲を読むようになり、時には自ら「奇蹟を行ふ人の役割を演」じ(同)、彼は着々と演劇の基礎体力を積んできたはずなのだが、ただ少し筋が悪かったようだ。「聾の真似をするもいいが……」という台詞になぜ冬子が拘るかも理解していなかったし、冬子の「物真似を面白がつてゐた」(同)だけでその演技の本質を理解しようとはしていなかった。別様に言えば、三治はあくまでオーディエンスに留まっていた。「趣味」を「写真」とする新聞社勤めの彼(同)であるから、それは当然かもしれない。

だが、命を賭した演技を目にし、かつ優れたアクターである帯子から〈「確信」は隠すべし〉とレッスンを受けた三治が、召集を直前にして伊豆の長岡へ旅立つ。この旅は一体何なのだろう？ 三治を心配する

親戚は、「ええまさか……と思ふんですけど、ひよつと〔入営に〕間に合はなかつたら、それこそたいへんな騒ぎです。」と述べるが、ここで予感されていることは何か？ まさかひよつとしたら彼らが何かをやらかしてしまうことを恐れているのではないか？ 二人の様子を見に行く「わたし」が述べるように、ペンによって記されたこの旅は、どこまでも「会体の知れぬ事実」としてある（以上四）。

冬子の死に悲嘆に暮れていたはずの三治は、「わたし」が長岡で出会うと、「この二三日で、うんと遊んでおかうと思つてる」とすっかり変化している。この変わり身の早さは、まるで帯子のような。彼は述べる。「心配することなんかちつともないのになあ。」「あしたの晩までには帰らなくちや」（以上四）。だが発話と行為が本当に連なっているのか、その保証はどこにもない。

そんな彼が旅先にいつも携帯するカメラを持っていないのは、オーディエンスであることを止めてアクターとなったからであろう⁽³⁰⁾。そして「あれもこれもと慾でいっぱい」と享樂に耽ろうとする三治のアクトは、「オビイが傍から拍車をかけてくれるんだ」とあるとおり（以上四）、共演者・帯子がドライブさせている。

[[…]] ちや、元気よく行つて来たまへ。そして、どんな遠くへ行つても必ず帰つて来たまへ。」「ありがたう。」車はすぐ動き出した。（同）

二人が行き着く先はどこか？ 冬子の「死」の演技を二人で「真似」する危険性も、もちろん考えられる。だが私たちはここで、

三治が最後に述べた「ありがたう」、帰るとも帰らないとも断言されないまま宙づりにされたこの言葉を、破滅には向かわないもの——保田與重郎の「イロニー」とは異なるもの——として読み、かつ帯子が二節で「死んで行く人と縁がない」と述べていた言葉だけは「嘘言」でないと信じ、水族館——外海に開かれているようで閉じられた行き詰まり——を「興味ない」と回避してより一層ブーストする二人の乗った「ポンテイヤック」（同）が、ファシズムのフローから逃れ加速していく光景を夢想しよう⁽³¹⁾。

「わたし」はもしかしたら冬子・帯子・三治たちの潜勢力にはっきりと気付いていないかもしれない。そもそもデッドロックの中で、気付いていても明確に書けはしない。だが、ペンを握る身体は、「マルス」に耳を塞ぎ、デッドロックに悶え、「地上の出来事」「地上的感情」= 軍事-産業-資本主義のフローからの「切断」を願っていた。だからこそ、意識的であれ無意識的であれ、逃走の最小回路を共振させるアクターたちが、情勢から離脱しようとする複数の欲望の群が、戦争のただなかにおける潜かな存在様式が「事実」として描き出されたのだろう。

「わたし」と、「マルス」を歌わない者たちと、「嘘言」を述べながらフローを突破せんと演じる者たち。彼ら・彼女らは様々な繋辞を「切断」し、未決性を湛えている。方向を異にしつつファシズムを「切断」しようとする逃走線を、私たちはいま・この戦争においてつなぎ読み、新たな私たちを作る必要がある。

注

- (1) すなわち本稿は、作家・石川淳の無意識を射程に入れ、「マルスの歌」に表された「事実」を読もうとするものである。それこそが、「ペンと共に考へる」ことを理念とした（「短編小説の構成」、近藤一郎編『現代文章講座 第一巻』1940.3、三笠書房）石川淳作品の運動性——〈作家の自意識／そのコントロールから逸れていこうとするペンとそれを握る身体〉のスパーク——を、正面から読解する方法である。
- (2) 富山一郎「確保する、あるいは火曜会という試み」(『始まりの知 ファノンの臨床』2018.7、法政大学出版社)を参照。
- (3) 久野収「文化新聞『土曜日』の復刻によせて」(『復刻 土曜日』1974.7、三一書房)。
- (4) 長濱一眞「『革命の前日』」(『近代のはずみ、ひずみ 深田康算と中井正一』2020.2、航思社)。
- (5) 引用は初出（「文学界」1938.1）により、以下本作品からの引用は節番号のみ付す。なお本稿では、小説のことを言及する時は「マルスの歌」と記し、作品内の流行歌を指す際は「マルス」と表記する。
- (6) 保田與重郎をはじめとする「日本浪漫派」は滅びや敗残を美学化していた。また、その内の一人である横田文子『白日の書』（「婦人文藝」1936.2,4,5,6）では、社会に「絶望」する主人公が巷間を彷徨う果てに、ノアの洪水が到来する。そこではまさに世界の終わりが描かれている。
- なお、長濱一眞『近代のはずみ、ひずみ』（注（4）に同じ）は、中井正一が保田與重郎と近接しながらも、保田のような敗北の美学から免れるその理路を析出している。本稿が「マルスの歌」と中井を掛け合わせようとする際、大きく同書から示唆を得た。
- (7) 引用文の二重傍線部は単行本『黄金伝説』（1946.11、中央公論社）に収録された際に削除されている。戦後、占領軍の検閲では伏字の使用が禁止されていたことの影響であろう。
- (8) 富山一郎『始まりの知』（注（2）に同じ）を参照。
- (9) 伏字は一般的に編集サイドが付すものであるが、「わたし」が直接的に書いた言葉という作品設定に徹すれば、「ペン」によって記されたものとして読まれる。情勢において小説が書けない小説家＝「わたし」は、たとえ運動に関わっていなかったとしても、書きたいことを伏せざるを得ない次のような状況を知っていたはずだ。「だん／＼書き進んで行つて高吉は止めてしまった。印刷されたものについての検閲はもうどうでもよかつた。たゞ死んだり殺されたりすることが恐しかつた。」（中野重治「小説の書けぬ小説家」、「改造」1936.1）。あわせて金ヨンロン「小説の書けぬ時間 中野重治「小説の書けぬ小説家」（一九三六）を中心に」（『小説と〈歴史的時間〉——井伏鱒二・中野重治・小林多喜二・太宰治』2018.2、世織書房）も参照。
- (10) 廣瀬純「ドゥルーズ、革命的になること 不可能性の壁を屹立させ、逃走線を描出せよ」(『絶望論 革命的になることについて』2013.4、月曜社)を参照。
- (11) 山口俊雄「『マルスの歌』論」(『石川淳作品研究——「佳人」から「焼跡のイエス」まで』2005.7、双文社出版)を参照。
- (12) 津金澤聰廣「メディア・イベントとしての軍歌・軍国歌謡」(『戦争と軍隊 近代日本文化論 10』1999.8、岩波書店)などを参照。
- (13) 空前のヒットとなった「露営の歌」が日本コロムビアにいかにも利益をもたらしたかについては、M・M・M「愛国行進曲と悲喜劇」(「文芸春秋」1938.2)、江島角太郎「事変とレコード戦 レコード界異変」(「実業之日本」1938.3)などでも語られている。
- (14) 辻田真佐憲「軍歌の復活 「軍歌大国」への道」(『日本の軍歌 国民的音楽の歴史』2014.7、幻冬舎)を参照。1937年9月25日に内閣情報部は「国民が永遠に愛唱し得べき国民歌」を作ることを発表し、歌詞と楽譜を募集した。歌詞は11月3日に、曲は12月20日に当選者が発表されている。詞の選考委員には河井醉茗、佐佐木信綱、北原白秋、島崎藤村も加わった。XYZ「事変レコード売行き評判記」(「実業之日本」1938.12)によれば、「愛国行進曲」は大小レコード社から20にも及ぶバージョンが発売され、1937年の「暮から正月へかけて全国のレコード小売業者は、時ならぬ儲けにホク／＼ものであ」ったという。ポール・ヴィリリオを引くまでもなく、ここからは軍事・産業・資本主義のフローの即時性が理解できるだろう。
- (15) 「露営の歌」の選者である菊池寛は、「マルスの歌」を掲載した「文学界」の発行元・文芸春秋社主催でもあり、同誌発禁にあたって石川淳および編集者河上徹太郎に課された罰金を肩代わりしたとされ

る（河上徹太郎「蓮根論争」、『石川淳全集 第一巻』月報1、1961.1、筑摩書房）。時局に対して両義的な姿勢をとっているようにも見える菊池の動きであるが、これは戦争機械におけるフローの調整弁としてのものにすぎない。文芸春秋社が日中戦争開戦とともに戦争報道に力を注いで利潤を得ていたことは、鈴木貞美「『文芸春秋』と日中戦争」（『『文芸春秋』の戦争 戦前期リベラリズムの帰趨』2016.4、筑摩書房）を参照。

- (16) この場の一人が口にする「文化の擁護と云ふことは……」という台詞は、こうしたフローがいかに急流かを表すものである。作品発表のたった二年前、ヨーロッパにおける人民戦線形成の動きとともに1935年6月に開催された第一回文化擁護国際作家会議は日本でも大きく話題となり、「文化の擁護」をめぐる反ファシズムのための統一戦線が問題化されていた。アンドレ・ジッドやベルトルト・ブレヒト、マクシム・ゴーリキーらが参加した同会議の報告としては小松清編『文化の擁護』（1935.11、第一書房）が出版されており、また中井正一同人の雑誌「世界文化」でも1935年9～10月の二号に渡って会議の様子が詳しく紹介されている。

ところがこの言葉はすぐさま日本帝国主義に篡奪される。日独伊防共協定成立時には「東亜の安定を乱す其共産党及抗日人民戦線の暗躍」に対する「防共の戦線」強化が外務省によって「世界の平和及文化の擁護の為」とされ（「かくて防共戦線強化 外務省中外に声明発表」、「読売新聞」1937.11.7）、日中戦争開戦にあたっては文部大臣・木戸幸一によって「我が皇軍の戦ひは、東洋文化の擁護を志し」たものと宣揚された（「国民精神総動員に就いて」、「新民」1937.12）。その裏側で1937年12月15日に起きた人民戦線事件、「マルスの歌」発表と時をほぼ同じくするこの日本国内の弾圧まで、作品の言葉は表現しようとするものである（作品掲載「文学界」1938年1月号は1937年12月10日印刷、既に同日の時点で「読売新聞」に同誌広告が掲載されている）。

- (17) 「土曜日」創刊号（1936.7.4）巻頭言「花は鉄道の盛り土の上にも咲く」で中井正一は、本稿冒頭で示したように、「巨大な機構の中に組入れられ」「歪められた営み」を生きる人々が、「何かゝ欠けてゐることは知」りながら「何が欠けてゐるかはさだか

には判つてゐない」情勢を述べている。けれども中井はそこで「わたし」のように「思想」を渴望するのではなく、19世紀産業革命期、すなわち自然を「灰色の鉄道の線路」が横切ろうとする時勢においてテニソンが「芸術は自然の如く、その花をもつて、鉄道の盛土を覆ひ得る」としたことを想起する。

この鉄路の上に咲く花は、千均の力を必要としたのではない。日々の絶間なき必要を守つたのである。我々の生きて此処に今居ることをしつかり手離さないこと、その批判を放棄しないことに於て、始めて、凡ての灰色の路線を、花をもつて埋めることが出来るのである。

そこから中井は「人々が自分達の中に何が失はれてゐるかを想出す午後」としての時空＝「土曜日」を確保することを唱えるのだが、ここで大事なのは失われた「何か」を特定することではないし、欠如を埋めることでもない。だから「マルスの歌」を読むにあたり私たちは、「わたし」の「思想」や自意識ばかり重視することや、ファシズムにおける「思想」の不可能性を確認することに留まってはならない。「我々の生きて此処に今居ることをしつかり手離さないこと、その批判を放棄しないこと」、その回路を保持しようとするさまよう身体と、それに接続されたペンが描いた諸事象こそを、「わたし」の自意識のリミットから解除して読み、そこから集団性を立ち上げようとする「土曜日」こそが必要なのだ。

- (18) 「大衆動向との乖離」（杉浦晋「石川淳「マルスの歌」試論」、「稿本近代文学」1989.11）、「≪乖離≫に耐えて行われたこの精神の孤独な営為」（山口俊雄「「マルスの歌」論」、注（11）に同じ）など。
- (19) 日中戦争開戦後、ニュース映画は大衆の興味を喚起し、映画館の入場者数は増大した。高岡裕之「戦争と大衆文化」（『岩波講座 日本歴史 第18巻 近現代4』2015.5、岩波書店）を参照。
- (20) ここで取り上げた二つの映画論は、『美学入門』（1951.7、河出書房）では第一部終わりの二章（「六映画の時間」「七 映画の空間」）として配列されている。
- (21) 名取勘助「小説月評」（『新潮』1938.2）は「マルスの歌」について「相当ひねりにひねつた、まともならぬ作品」「読みとりやうによつて凄く解釈の出来るもの」とする。冬子・帯子・三治の言行も「凄く解釈の出来るもの」となっており、それは各人物

- が繫辞=「である」を「切断」することによっている。中井正一は映画と比して文学には「説明の繫辞」があると述べていたが、この意味で本作は彼の見解に修正を迫るものとなっている。なお、石川淳作品における繫辞の未決性について、「焼跡を読み替える方法——石川淳「焼跡のイエス」とユートピア——」（『昭和文学研究』2016.9）でも考察したことがある。
- (22) 「某全集本の一冊」とは、『ストリントベルク全集 燕曲集』（小宮豊隆・大庭米治郎訳、1926.9、岩波書店）もしくは『近代劇全集 第三卷北欧篇』（小宮豊隆・茅野蕭々訳、1928.7、第一書房、本稿での「稲妻」本文引用は同書による）と思われる。双方とも小宮訳の「稲妻」が掲載され、該当部分の台詞は「聲の真似も可いが、度を過すと命にかかはる事もあるやうだ。」であり、前者『ストリントベルク全集』には傍線部の読点がない。「マルスの歌」発表以前に同戯曲の翻訳が収録されている全集本には楠山正雄訳『ストリンドベルク戯曲全集5 祝祭曲と小劇場曲』（1924.6、新潮社）もあるが、当該箇所は「正直なところ、わたしの偽つんぼも、あまりやりすぎて厄介なことになりさうだ。」と訳されている。そのため冬子が読んだ本は小宮訳収録の上記二冊の内どちらかであろう。なお、森鷗外訳『稲妻』（1915.10、通一舎）では当該箇所は「聲の修行をするも好いが、余り遣り過ぎると、危険な事になるのですて。」と訳されている。
- (23) 長島要一「鷗外訳ストリンドベリ劇 (3) ——『稲妻』と『ペリカン』——」（『鷗外』1990.7）。
- (24) 「主人」は離別した妻・ゲルダや娘と暮らしていたアパートで、思い出の中に生きていた。そこにゲルダがやって来て、離婚に至った理由が議論され、突然彼は過去との対峙を強いられる。だがその最中、ゲルダの再婚相手・フィッセルが若い女と駆け落ちし、娘を連れ去ってしまう。ゲルダは「主人」に助けを求めるが、あくまで「静な心持であたい」彼は「なんにも聴きたくない！」と耳を塞ぎ続けた。ゲルダが娘を救い出して田舎に帰った知らせを聞いた「主人」は、思い出を封印し「老の静けさ」を求めて引っ越すことを決め、作品の途中で起こっていた稲妻も無事に止んで舞台は晴れ上がる。
- (25) 山口俊雄「「マルスの歌」論」（注（11）に同じ）。
- (26) 後藤嘉宏「中井正一「委員会の論理」（1936）における嘘言の媒介について」（『情報メディア研究』

2018.3）を参照。

- (27) 上野俊哉「翻訳者、脱党者、漂流者——ディアスポラのなかの中井正一」（『ディアスポラの思考』1999.4、筑摩書房）。上野はこのことについて、中井を念頭に置きながら、「「転向」（あるいは偽装転向）を「嘘言」というコミュニケーションの戦略から解釈する可能性も開かれる」と述べている。
- (28) 「マルスの歌」では、無名の人物がこれを言い当てている。

「一般的に、或る状態に置かれた時、個人の意志とか感情とかが物の云へなくなる場合がある。その状態に置かれた各人がこれはいかんと思つたにしても、どうにもならんことがある。流行歌が巷を風靡してゐる時なども、ちよつとさう云ふ状態を現出するね。流行の中で、みんなが繋ぎ合さつてゐるからな。例へば目下大流行の、あの『マルスの歌』にしても……」（三）

歌の話題が出たことがトリガーとなり、本稿三節で見た「一座がわつと爆発」的に空虚な言葉を並べ立てる場面となるのだが、そこで交わされる言葉ならざる言葉とは違い、この言辞はクリティカルだ。「わたし」と連なりを作る可能性を有している人物が、ここにも一人居る。

- (29) 考えや感情が刹那刹那に転変するという人物役割を帯子という女性が担っている点は、当時のミソジニックなモダンガール・イメージが踏襲されているよう。
- (30) 浅子逸男「小説のなかの小説、小説のなかの芝居——石川淳「マルスの歌」によせて——」（『国文学論究』1989.10）は伊豆で三治は「写す側の立場を放棄した」としているが、本稿は見る側の立場の放棄と読む。そしてこの放棄は、冬子の「見ること」→アクターへの跳躍を反復したものであるだろう。中井正一「「見ること」の意味」（『国民美術』1937.4）は、舞台を見つめる人々は「芝居気分」の中で己の職業も貧富も忘れ、常とは異なる人間になると述べる。

「見ること」のはづみをもつて、自分自身がいつの間か他のものと成つてゐることをたしかめる。「見ること」のはづみをもつて、自分自身を脱け出し、自分自身を対象化すること、「見ること」をはづみとして、自分自身を自分自身に矛盾せしめ、自分自身をスプリングボードとして

時の中に跳ねかへり、突きすゝむ。

観劇を趣味としていた冬子は「見ること」から「はづみ」、自動律を突き破るアクターへと生成変化を遂げた。彼女に遅れて三治もいま、「見ること」から「はづ」もうとしている。

そして中井は、「見ること」を、芝居だけでなくすべての芸術に設定する。「画の世界にとって画布」「演劇の世界にとって舞台の第四の壁」と同様に、「文学の世界にとって紙」が「一つのはづみであり、跳躍の板である」とする彼の言葉は、やはり「マルスの歌」を読む際に参照されなければならないものだ。

(31) ただし、この想像が「地上」から断ち切れた突飛なものというわけでは、断じてない。菊池邦作『徴兵忌避の研究』（1977.6、立風書房、291～292頁）によれば、徴兵者の逃亡・失踪は第二次大戦末期まで続き、1936年には逃亡者は計20,000人超え（当年に初めて生じた逃亡者は1,600人余り）であったという。同年6月30日「朝日新聞」夕刊には、「“非常時”に背く者 家出壮丁激増に嚴重捜査令」が掲載され、「兵役関係の家出人が激増」しており「本年已に五百二十人」と報道されている。また、日中戦争開戦直後の1937年7月11日「朝日新聞」夕刊掲載「徴兵検査を目前に家出」では、東京住まいのとある青年が、徴兵検査を控えたまま遺書を残して熱海へ向かったため、捜索願が出されたと報じられている。ただし、「原因は病弱を悲観したものらしい」とあるため、この家出が徴兵忌避のためであるか詳細は不明。また、1937年11月25日「読売新聞」夕刊の「日本一の不忠 召集うけて情死行した上等兵を検事叱る」には、ある衛生上等兵が召集に応じず、人妻と駆け落ちして服毒心中を図ったため、禁錮一年が求刑されたとある。この件については同月30日同紙に「“求刑は軽すぎる” 情死行の不忠もの上等兵に懲しめに一年半の判決」と続報された。

【付記】原則として漢字は新字に改め、傍点、ルビは適宜省略した。引用文中の傍線、／(改行)、[…](省略)、[](注記)は稿者による。引用文中には、現在の社会的・倫理的規範から鑑みて不適當と考えられる表現もあるが、歴史的な資料性を考慮し、表現を改めることはしなかった。

なお、本稿は第35期火曜会における議論（於同志社大学、2021.6.16）、第39回占領開拓期文化研究会における発表（於同志社大学、2025.9.20）に基づいている。それぞれの場でご意見をいただいたみなさまに感謝申し上げます。

(ふくおか ひろあき 関西学院大学教員)

マリアローザ・ダラ・コスタを読むこととはいかなる営為なのか？

ダラ・コスタを身で読んだ10年間の物語と火曜会¹

姜 喜代

1 はじめに

1970年代のイタリアに、家事労働に対する賃金を国に求めて闘うというユニークな運動があった。筆者はこの運動の中心リーダーであったマリアローザ・ダラ・コスタ (Mariarosa Dalla Costa) と、彼女が中心的リーダーを務めていた家事労働賃金要求 (Salario al Lavoro Domestico) 委員会というグループの思想と運動について、彼女たちの文章や発行していた新聞『家庭労働者』(1975-1978)を少しずつ翻訳しながら研究を続けている。このテーマに出会ったのは、筆者が同志社大学大学院の博士後期課程に入学した直後の2016年6月に行われた火曜会²という議論の場においてであった。

その日の火曜会では、同会のメーリングリストを使って事前に送っていた筆者の修士論文の内容を元にした博士後期課程での研究計画を文章化したものを元に議論が行われたのだが、その途中で、ある二人の参加者の間で「(姜の研究は) まるでダラ・コスタみたいやね」というやり取りがあった。その後、気になってすぐに日本で出版されていた彼女の論考集『家事労働に賃金を』

(ダラ・コスタ、1986)を取り寄せた。その内容は、資本主義体制下で労働力の生産と再生産を無償で担わされてきた女性たちの労働こそが資本主義を支える根幹であり、それを拒否することで資本に抗う闘争の主体になれるという逆転の発想であり、力強く解放に満ちた議論であった。またちょうど、家庭の中で再生産労働の負担が増してきていた筆者の状況も再生産労働を真摯に見つめる機会となり、ダラ・コスタの思想と運動を博士論文の研究テーマとすることを決めた。

筆者がダラ・コスタに出会ったこの火曜会という場は、文章を書き、他人の書いた文章を読み、それらを元に感想や質問を述べ合い、その中で豊かな議論と関係性が紡がれる、言葉を大切にできる場であり、いわゆる「研究会」ではない。会期毎に各週の担当を決め、その人は自分が書いた文章を前の週末に他のメンバーに共有しておき、それを読んだ参加者が文章の感想を述べあい、時間の許す限り豊かな議論が紡がれていく空間だ。担当者の中には、すでに完成済みの、または完成しかけの自身の「論

文」を提出する者もいるが、ほとんどのメンバーは、まだ着想段階の試みや、抱え始めた自身の問い、問題意識、または拭いきれない違和感をどうにかして文章に紡ぎだし、それをメンバーに共有し、共に考え議論することで集団の知を生み出そうとする場である³。筆者は2015年に初めて同会に参加してから約10年の間に、15回以上にわたってマリアローザ・ダラ・コスタと家事労働賃金要求委員会の文章や新聞を元に書いた自身の文章を発表し続けてきた。また、自身の発表時のみならず、時間の許す限り会への参加を心がけてきた。当初は「自分とは分野や専門が異なる内容だから」参加しても意味がないと思って欠席したり、議論についていけずに参加意義を見出せなかったりしたこともあったが、一人一人の参加者がその場に居続けることで火曜会という場が成立しており、火曜会を構成するかけらの一片が他でもない自分の存在であることに気が付いてからはこの場を参加者と共に守り、育てることに情熱を持って取り組んでいる。

また、たとえ専門や分野は異なっても、どんな研究であっても、その人がその研究を行うに至った背景や問題意識、情熱や展望を知ることは自分の研究の地平を広げていく上で不可欠の行為でもある。こうしたこの会への参加を重ねるうちに、徐々に筆者は火曜会という場に対する信頼感が深まっていき、筆者が思ってもみなかった自身の深層に存在する思いや問題意識を書いて火曜会のメンバーたちに共有するようになった。つまり筆者は、マリアローザ・ダラ・

コスタを火曜会のメンバーたちと一緒に読み、議論する行為を通して、長らく言語化できずにいた家事労働者としての筆者の抱える孤独や負担、違和感や問題意識、筆者が身を置く環境について少しずつ言語化できるようになったのである。ダラ・コスタたちは、家の中でタダ働きをし、誰にも評価してもらえず自尊心も低い女性たちに、自分たちの労働こそが資本主義を支える根底の労働であることとそれを拒否することで資本に大打撃を与えられることをキャンペーンや新聞『家庭労働者』を通して伝え、家という閉鎖空間で孤独を抱えながら反復的な労働を行い、気が狂いそうになりながらなんとか毎日頑張っている家庭労働者を鼓舞している。

火曜会での最初の数回の発表で筆者は、目から鱗が落ちるようなダラ・コスタの斬新な家事労働論⁴や闘いに駆り立てるような力強くユーモラスな表現に満ちた文章⁵に注目していた。なぜそうした文章が生まれたのかという問いを火曜会で共有し、その所以を探るところから研究を始めたのだが、筆者自身のダラ・コスタの読みと参加者の読みが積み重なっていき、参加者からの感想や問いかけが筆者に新たな問いを投げかける行為が降り積もっていき、ダラ・コスタたちの運動に注目する研究を進めるようになった。またその一方で、ダラ・コスタを読むという営みが筆者自身にとって何を意味するのか？という問いについての思索も深めていった。筆者にとって2015年からの約10年間は、高齢の両親の生活をサポートするという類の家事労働負担が

増してきた時期と重なっている。仕事と研究を行いながら、両親のサポートを孤立無縁で行う日々の中、ダラ・コスタと運動体の文章と新聞を原文で読み進めることで、筆者の思考と行動に大きな変化をもたらされていった。いわば、筆者にとってダラ・コスタは研究対象というよりも、自分たちはこれからどうしていけばいいのか、また自分たちの労働の辛さや悩み、喜びについて考える糧として読んできたのである⁶。

本稿では、ダラ・コスタの文章と家事労働賃金要求委員会の新聞を火曜会という集団と共に読み、書き、語る中で生まれた筆者の10年間の歩みを振り返る中で、ダラ・コスタを読むことの営為とは何であるのかを浮かび上がらせてみたいと思う。

2 MFE 第6号を読んで

今回 MFE への投稿に際し、火曜会から生まれたこのウェブ雑誌のバックナンバーを読みながら文章を書き進めている。昨年(2025年)の3月末に博士課程を満期退学するタイミングで博士論文を初めて提出したのだが、最終日の締め切りギリギリの時間に提出したため、たった一枚の書類が足りずに受理不可となった。そして2回目の提出は同じ年の8月末に行ったが、この時も最後まで少しでも完成度を上げたくて、悪あがきをして最終日に出すことになってしまったが、プリンターの調子が悪くなったことや学内のコピー機に新しい千円札をこぼまれてしまい、必要な枚数の印刷ができず時間切れとなってしまった。

その後10月に父が亡くなり、11月から

京都で母と二人暮らしを始めることになったため、物件探しや引っ越し、仕事や初めて京都で暮らすことになった82歳の母に繰り返し道を何十回と教えたり、一緒に遊んだり、以前から母が、「一人になったら料理は一切せず、夜は居酒屋でまぐろの刺身とビールが飲みたい」という願いも叶えてあげながら、ようやく落ち着いて机に向かう時間ができたのは12月も半ばのことだった。一度時間が空いてしまうと、読んで書くというリズムを取り戻すにはある程度の予熱の時間がかかることは経験済みでよくわかっていたが、締め切りが迫ってきて気持ちに焦りが出てきてしまい、父が亡くなる直前の昨年10月に火曜会で発表したペーパーを元に MFE に投稿する文章を書こうと思ったが、なかなか筆が進まなかった。

疲れもなかなか取れず、本を読む気力もなかなか出なかったが、何とか前に進みたくて本誌第6号をプリントアウトしてパラパラとめくり始めた。すると、「読むことが思索や対話を生み、もうひとつの(あるいはいくつもの)書くことへとつながる。こうした行為の連なりから、新しい場が立ち現れてくるのではないのでしょうか?」⁷という文章に出会い、「そうだ。書き出すことが難しいのなら、まずは読むことから始めてみよう」と思えて、第6号(特集「ひとの話の聞いて書くことについて」)を読みはじめたところ、不思議と「書けるかもしれない。書いてみたい!という気持ちに徐々に生まれて、見知らぬ読者と繋がってみたいという気持ちがむくむくと湧き上がってき

たのである。

「編集後記」では、本がたくさん読めそうなイメージがある（西）さんが、「なぜだか『本が読めなくなる』感覚⁸」について書かれた文章と出会い、古川さんの、以前聞いたひとの話を活字化する作業について「なんだ、こういうやり方でいいのか、それならば自分ももっとやっておけばよかったなあ⁹」と振り返る文章に出会えたのもとてもよかった。私の目にはたくさん書けて読むことができそうな人でも、時には読めなかったり書けなかったりすることもあるんだなあと思えて少しホッとした。

また、同じテーマにこだわって長い間研究を続け、文章を発表し続けている方の文章に改めて出会えたのも今の自分には本当にありがたかった。例えば、沖縄の子どもが書いた作文からずっとものを考え続けている木谷さんや、戦後の占領期に米兵に身体を売っていた女性たちのことにこだわり続けて小説まで書いてしまった茶園さんがそうである。

そして、川村さんの文章（「大杉栄の監獄大学(7)」）からは、大杉栄が獄中でも寸暇を惜しんで語学の研鑽と読書に励んでいたことを知った。それもエスペラント語だけでなく、イタリア語まで学習して次のような著者の書物を読んだとの記述に目が釘付けになった。チュルケゾフ、クロポトキン、マラテスタ…はて、この中でイタリア人はだれだろう？マラテスタという名前がイタリアっぽいなと思い、ネットで調べてみると、やはりマラテスタはナポリ生まれのアナキストであることが分かった。しば

らく検索を続けたところ、戸田三三冬という日本のマラテスタ研究者の書いた論文¹⁰を見つけた。彼によるとマラテスタ (Errico Malatesta 1853-1932) は「19世紀から20世紀にかけて生き、強権としての国家と対立する社会、社会を構成する個人と集団、その自由と自治と連帯を求め、権力なき社会の建設を目指して闘いつつ、あくまでも「愛」を大切にした「革命家」であったという。だが、マラテスタは出版業やジャーナリスト、知識人として生きた大部分の革命家とは異なり、電気機械技術者として「手仕事をして生き」、運動や新聞発行のために会計帳簿を克明につけていたそうだ。こうした思想と現実生活の一致が仲間から大きく信任を受けていた理由だという。

彼はマルクスと路線対立してインタナショナルを追放されたバクーニンに連なる反戦・反軍国主義思想の持ち主であり、イタリア全土で激しく起こったイタリアによるリビア侵略と第一次世界大戦への参戦反対のための大衆蜂起にも加わっている。

戸田の文章に惹きつけられたのは、彼がこうしたイタリアの「他国に例を見ない反戦への大衆の意思表示」が第一次世界大戦後のファシズムの勃興を経て、反ファシズム運動からレジスタンス運動に続く一大潮流として噴出したと論じている部分であった。私が研究をしているダラ・コスタの書いたものにはマルクスは何度も登場するが、マラテスタやアナキズムについては一切出てこない。しかし、第二次大戦中ナチス・ドイツ軍が占領していた北部イタリア出身のダラ・コスタは、自身のバイオグ

ラフィーに「パドヴァ大学を卒業後、同大学のレジスタンス研究所でレジスタンスに関わるあらゆる資料を整理する仕事をしてきた¹¹」と記している。彼女はそこでのちに『帝国』を著すアントニオ・ネグリに出会い、彼が中心的指導者であった労働者主義¹²のグループ、ポテーレ・オペライオ¹³ (Potere Operaio、以下 PO) に加入するのだが、その目的は社会正義を実現するためだったと述べている¹⁴。その後、彼女は女性への「尊厳」が大きく欠けていた PO を脱退し、女性の問題を解決するための行動に仲間とともに打って出る。

ダラ・コスタは大学時代から教員時代を経て、現在もパドヴァという街に住み続け、そこで自身が関わった運動の資料を地域の図書館に寄贈してアーカイヴを作るなど、一貫して地域を大事にし、そこを拠点にものと考え、運動を起こしてきたが、ネグリのことを「どこにでもあるが、どこにもない」帝国に前途があると考え、地域には無関心の人だと批判し¹⁵、家事労働と再生産労働への考え方の違いも顕著であったネグりを批判し続けた。今年の1月に提出した博士論文ではイタリアの反独レジスタンス運動がダラ・コスタに与えた影響について詳しく書けてはいないが、イタリアでは今もマラテスタというアナキストの思想やその現代性に高い関心が持たれており、平和と環境、自治というダラ・コスタの思想にも当てはまる共通のキーワードを持つことから、ダラ・コスタが参加した労働者主義運動とその後の運動について考える時にマラテスタとアナキズムから迫ってみた

いと思う。というのも、この問題というのは、自分の自律や自治への問題として考えることと無関係ではないからだ。今は問いとして抱えておきたい。

ちょうど今、ジョン・ピザレリの「James」がスマホから流れてきた。この曲はコロナ禍の2021年に作られたアルバム『BETTER DAYS AHEAD』に収録されている。川村さんのマネをして曲紹介をしてみた(笑) このアルバムの演奏はピザレリがしているが、曲はパット・メセニーによるものである。耳に心地よい。昨年、辛かった時によく聞いたアルバムの一つである。



出典: apple music

3 昨年一年間の我が家の物語

昨年のある冬の日の昼前に、自転車で買い出しに出かけたのだが、冬らしい冷たい風が心地よく吹く鴨川辺を走りながら、1年前のこの日のことを思い出し、たった一年で状況が大きく変わる年もあるんだなあという感慨にしばしひたった。一昨年まで10年くらいの間、暮れに実家に帰るのは姉妹の中で私一人であり、買い出しから料理までをほぼ一人で担っていた(母の担当は茶碗洗いと洗濯である)。私はペーパードライ

バーなので、天下茶屋や難波、鶴橋、猪飼野などを電車を乗り継いで回り、いろんな食材を買い集めるためにふうふう言いながらカートを引っ張って買い物をしていた。

昨年10月に亡くなった父は、長年の暴飲暴食が祟って60代半ばで人工透析患者となり、週3回の透析治療を受けてきた。透析をすると体内が石化してくるため、関節の動きが滑らかではなくなり、服の脱ぎ着やキャップの開け閉めなどがだんだんとしにくくなる。リハビリに行きたくないと家族は再三頼んだが、父は頑として拒否してデイサービスには行ってくれず、頻繁な日常生活上の介助で積もる一方の母のストレスと疲れ、痩せた身体がいつも心配であった。この辺りの話は2019年5月8日の火曜会で発表した文章「なぜおかずを作り過ぎるのか？」に詳しく書いている。うちの父は他人や親戚の保証人に何度もなって母に内職や保険の外交員の仕事をさせ、母や私たち姉妹に外での鬱憤晴らしをするためか、あらぬ理由をつけては暴力をよく振るっていた。最後に「口ごたえして生意気だ」と言われて理不尽な殴られ方をしたのは高校三年生の時だったと記憶している。

うちの父は生きようとする思いが人一倍強かった。でもそのためには家族の献身と犠牲も当然だと言わんばかりに私たちに頼りまくった。透析患者は水分やカリウムを摂取し過ぎると透析ができなくなる。そのため便秘になる人が多く、腸が壊死して亡くなる人も多い。父は新聞広告でとある胃腸外科医の書いた健康本を見つけ、その中

に書いてあった「コーヒー浣腸」を知り、毎朝食後にコーヒーと専用の器具を使って時間をかけて必死になって排便をしていた。母と私は毎日、飲む用のコーヒーとは別に、浣腸用のコーヒーを早めに作って冷まして浴室に置いておかねばならなかった。(浴室で専用器具内にコーヒーを入れてからトイレに向かう)

また、父はバランスよく食事を摂ることへの執着も人並外れていた。一昨年からはトイレの上方の壁に打ってある釘にコーヒーを入れた専用器具をかけることができなくなり、家族に代わりにかけてもらったり、排便中に手で持たせたり、粗相をすることも増えていった。介護等級も上がり、父の日常の介助に疲れ切った母が父に声を荒げる場面も多くなったので、夏頃からはケアマネージャーからデイサービスの利用と施設への入所を勧められてきた。京都に住む私と、当時一時期実家に住んでくれていた姉が頻繁にデイサービスでのリハビリやショートステイを父に勧め、一日体験を数件のデイサービスでなんとか受けてもらったのだが、彼が気に入るところはなく、私がイタリアでのフィールドワークから戻ってすぐ、9月に姉は怒って家を出て行ってしまった。

一昨年の12月30日も、何ヶ所も回って必死で買い集めた食材を使って正月料理の準備に懸命に取りくんでいた。内心、去年の年末は、翌年3月に博士論文の締め切りを控えていたため京都にこもって論文を書きたかったのだが、他の姉妹が帰省してこなかったため、両親から電話で帰ってきて

正月用の料理を作って欲しいと頼まれて
 渋々帰ったのだった。30日の昼に食事を作
 り、両親に先に食べてもらい、私は台所で
 調理を続けていた。そんな時に父が「正月
 にお前がいる間に、お父さんは〇〇と〇〇
 と〇〇も食べたいな。作ってくれや」と言っ
 てきた瞬間私は爆発して発狂した。一体ど
 れだけの料理を作ればこの人は満足するの
 だろうか？思いつくだけの悪口を父に浴び
 せ、泣き崩れて京都に戻った。31日と1月
 1日は部屋で放心状態で過ごし、死ぬこと
 も何度も頭をよぎった。何か不吉な予感が
 したという一人の姉から正月2日の夜に電
 話があり、私は「もううちの親のこと、こ
 れ以上無理や。もう死にたいねん」と訴え
 た。翌日その姉が京都にきて今まで本当に
 悪かったと謝ってくれ、これからは自分が
 他の姉妹と協力して父と母のことをどうに
 かするから、とにかく生きていて欲しい、
 カウンセリングにも通って欲しいと言われて
 気持ちが少し楽になった。

1月と2月は精神科で安定剤を処方して
 もらい、女性専門のカウンセリングでじっ
 くりと話を聞いてもらった。1回目はただ
 ただ私の話を聞いてもらい、2回目にはカ
 ウンセラーの先生が当時私の陥っていた状
 況を分かりやすく説明してくれた。私が「過
 剰責任行動」といって一人で親のケアを担
 おうとしたこと。そして「もうこれ以上で
 きない！」と言って実家と親の手伝いから
 逃げた私の行動があったから姉たちがよう
 やく私の状況を理解できたことに「よく
 やった」と喝采を送ってくれ、私が大切に
 思う母のことも、「お母さんを手伝わない

といけないからという理由で帰るのではな
 く、何かお母さんと二人で楽しいことをす
 るために会いたいと思えるまでは帰らなく
 てよい」と言ってくれた。

実は私は2回目のカウンセリングで不安
 に震えていた。きっと大筋では私の取った
 行動に味方をしてくれたとしても、ほんの
 少くくは私に非があるのだと言われる
 に違いないと思いついていたからだ。だが
 このS先生は違った。私のことを少しも
 責めないどころか、私の行動は当然のこと
 であり、もっと早くに「無理です」と言っ
 てよかったのだとおっしゃった。私は正直
 に先生に打ち明けてみた。「今日はカウ
 セリングの最後に『大変だったね。頑張っ
 たね。でも、少しはあなたにも非があるの
 よ』ってきつと言われると思っていただけ
 す。私は本当に悪くないのですか？」と聞
 くと先生は飄々とした表情で、「あなたは
 全然悪くないです」と言った。その瞬間に
 涙が大量に溢れてきてしばらく私は泣き続
 けた。カウンセリングルームは南向きで温
 かい日がさんさんと降り注ぎ、ソファと加
 湿器が置いてある落ち着いた空間だった。
 先生はティッシュを渡してくれ、好きなだ
 け泣かせてくれた。そしてその日を境に私
 の心と身体の状態はぐんとよくなり、博論
 執筆を再開することができた。それからは
 唯一連絡を取っていた一人の姉からの電話
 も遮断し、できるだけ家族のことを考えな
 いようにして、8月末までの間に論文執筆
 にたくさんの時間をかけることができた。

そして9月15日に、突然別の姉から父
 が入院したことを聞いた。昨年1月に階段

を踏み外して寝たきりとなり、その月の終わりに実家近くの施設（後から父は、「今思えばあの施設が最高だった」と述懐した）に入所した父だったが、入所初日から姉たちに、「もう最悪、全部最悪。別のところを調べてくれ」と言い続け、5月に移った二件目の施設で足の傷口を放置されてそこからバイ菌が広がり、左足指か膝下を切断するかもしれない状況になっているという。もう長くはないと思うから亡くなる前に一度会っておいた方がいいのではないかと言われた。母のことはいつも気になっていたが、正直父への怒りは収まっておらず、死んだとしても葬式にも行かないつもりだったが、近所の親しい創価学会の先輩にこう言われて一緒に会いに行くことになった。「仏教では子どもに暴力を振るった父親は地獄の苦しみに遭うって説かれているよ。お父さんは施設を変わったり、傷口を放置されたりして十分苦しんだと思うよ。もうこの辺で許してあげなあかん！」と。

それから数日後に実家近くの病院まで先輩について行ってもらい、父の病室に入ると、父は私の名前を呼び、「きてくれたんか。お前に会えるなんて夢みたいや。元気やったんか。ありがとう。ありがとう」と言って喜んでくれた。持参した小さめにカットした美味しい梨を容器から取り出して口に入れてあげると、病院食が足りていないようで、「腹が減っている。肉が食べたい」と言うではないか。食欲はありそうで安心した。その病院には一階にコンビニがあったので「何か探してくるわ」と私はすぐに走った。美味しそうなハンバーグがあった

が、店内では温められないとのことで、苦肉の策で「焼肉ピビンバおにぎり」を見つけて買ってみる。気に入らないと言われないうか内心不安だったが、「十分や。おいしい。おいしい」とパクパク食べてくれる。フロスをかけて歯を磨いてあげてから、またお見舞いに来ることを父に約束し、先輩と実家に向かった。

9ヶ月半ぶりに会った母は痩せこけていた。食卓の上には半分開いたパックごはんが置かれてあり、自分でコメも炊いていないことはすぐにわかった。胸が潰れそうになり、それからはまた京都と実家を往復して母の食事と父の見舞いをする生活が始まった。父の好きそうなおかずや果物を剥いて持っていき、たくさん話をすることもできた。でも10月半ばに見舞いに行った時にまた父の悪い癖が出て、「ホッペ（胡椒/牛の肺）のチヂミ（ジョン）が食べたい」と言うのだ。まだ外は暑かったし、私が10代の頃までは実家からそう遠くないところにホッペを売る店があったが、今は鶴橋や猪飼野まで行かなければ手に入らない。「またそんな無理なことゆうて！」と私が怒ると父は「ごめんごめん」と謝ったが、グツといやな気持ち押し寄せて、父の見舞いに行くのをやめてしまった。

それから一週間後に父は透析ができなくなり、そのまた一週間後に亡くなった。透析ができなくなる直前には、足に入れた抗生剤が効いて、指を一本も落とすことなく回復して、もうすぐ退院できるということだったが、抗生剤が強すぎて父は胃を悪くして最後は食べることができなくなってし

まった。退院後は姉たちの手配で、食事が美味しいことで定評のある生野区内の在日韓国人が経営する施設に転院することになっており、父の荷物もすでに転院先に入っていたのに。透析をするためには父に栄養ある食事を摂ってもらい、タンパク質の数値と血圧を上げないといけないと主治医に言われて、姉と一緒に父の好物の干し鰯のスープや梨、ソフールを持っていったが、「いらん。食べられへん」と言って嘔吐を繰り返す父の背中をさすることしかできなかつた。こんなことになるならあの時無理をしてでもホッペを買いに行つてジョンを作って食べさせてあげたらよかつたと心底悔やんだ。

透析ができなくなり主治医から「お父様はあと数日でお亡くなりになります」と言われて個室に移るまで、父はHCU(高度治療室)に入っていた。私たち家族は父の以前からの意向を尊重し延命措置を希望しなかつたので、看護師さんからは「正直、もうして差し上げられることがあまりないんです。ご家族から何か希望があればできるだけのことはさせていただくのでなんでも気軽におっしゃってください」と優しく言つてくださった。私は父の足が冷たかつたので、看護師の先生におしほりを温めてもらつたり、家から薄手の毛布を持って行つたりした。ある時、消灯時間が来て面会時間が終わった時、当直の看護師の先生に「父は寒がりなのでおしほりが冷えたら変えていただけると助かります」とお願いすると、「お父さんは我慢強い方ですね。私たちにほとんど何も要求されないのですよ」と言われた。私はやっぱりそうだった

かと思い、父は韓国人で日本人に遠慮しながら生きてきたので、長年お世話になった透析病院でも、ほとんどお願いをしたことがなく、透析中にクーラーの風がまともに当たつて寒くてもじっと我慢していた話をした。

するとこのT看護師は、泣きじゃくる私を見かねたのか、「少し外で話しませんか？」と治療室の外に連れ出してくださり、温かくハグしてくださつたのだ。私は思わずTさんに、前年末に父のわがままに耐えかねて発狂して実家を飛び出して、この9か月間、姉たちに親のことを任せて一度も実家に帰らなかつたことを話すと、Tさんは「わかつてくれる人にしか言えないから」、「他のお姉ちゃんたちにお父さんと過ごす時間をつくつてあげられたんじゃない？」と言つて私を励ましてくださった。毎日死と隣り合わせの激務の中、夜中に一患者の家族を温かく励ませるT看護師に大きく救われた。

数日後、自宅での無宗教の家族葬を終えた後、一人の姉に「お父さん、ホッペ食べたがつたのに食べさせてあげられへんかつたことが悔やまれるねんなあ」と話すと、「あ、あたし、10月に生野の施設にお父さんの荷物を車で運んだ時に、鶴橋でホッペ買ってジョン(素材に下味をつけてから粉と卵をつけて少量のごま油で焼いたもの)にしてお父さんに食べさせてあげたから大丈夫やで！」と教えてくれた姉に心から感謝した。姉は帰り際に、「これからはもう一人で背負わんといてな。何かあつたらすぐ飛んでくるから」と言つてくれた。

4 むすびに

ここまで、火曜会という場でダラ・コスタに出会い、ダラ・コスタと家事労働賃金要求委員会の文章と新聞を集団で「読む、書く、議論する」という経験が筆者にもたらした変化について言及してきた。

ダラ・コスタの研究を始めた当初は、在日韓国人家庭で育った自分の家の中の家事労働と家族の話を書くことになるとは夢にも思わなかった。「個人的なことは政治的である」というウーマンリブの時代の有名なスローガンがあるが、ダラ・コスタを読みながら自分の家の中のことを考え、人に語ることが運動になるのではないかと思うようになったのは間違いなく火曜会の産物である。その経験がなければ、こんな恥ずかしいことは死んでも書けなかったにちがいない。筆者が本稿で家族の恥をさらしたと思う人もいるかも知れない。だがそうとは言えない。筆者は火曜会を主宰する畠山が「文字を書く可能性あるいは危険性」について書いた以下の文章に触発と勇気をもたらした。

私自身は、悲惨さを個人的経験に閉じてしまうぐらいなら、そこから理論的警句を発する方が意味があると考えており、こうした文体において世界と繋がりたいと考えている¹⁶。

確かに、書くことは危険と可能性に満ちた行為である。だが筆者は少しの危険を犯してでも、世界というか、まだ見ぬ読者と書くことでつながる可能性の方を信じたい。この「書くことで世界とつながる」と

いう思想は、ダラ・コスタと家事労働賃金要求運動が体現したことでもあった。1970年代はイタリア全土を始め、イギリス、アメリカ、カナダ等の欧米諸国で家事労働賃金要求運動が盛んに行われた。また、イタリア各地と各国の運動体はネットワークを作り、自分たちの運動体が作ったチラシやパンフレットを互いに郵送して保管していた。ダラ・コスタは2006年にメキシコで発表した論考¹⁷を通じて1970年代に自身がリードした家事労働賃金要求運動が離婚や中絶の自由を勝ち取る闘いと共闘していたことを振り返っているが、その冒頭には1943年生まれのダラ・コスタの母親世代の女性の「ないない尽くし」の生が端的に描かれている。

無力さというのは大変大きな問題であり、我々は母親たちの人生においてそれを目撃してきた。いかなる選択をも妨げる金の不足、それは夫や父親の暴力から逃れることさえ妨げる金の不足という無力さである。セクシュアリティに関する知識の不足という無力さ、それは結婚を失敗させる。だが同時にそれはどう対応すればよいのかわからず、最終的に女性のセクシュアリティについて無知な男性の性的な行動がある。コミュニケーションがないという無力さ、なぜなら他の女性とプライベートすぎる事について話すのはタブーだったからである。我々の母たちのための結婚ではなく、彼女たちが誰であり、何を望むのかということを行うことなしに、とても若いときに父親

の家から夫の家へと移動することを強いられるという人生の選択に関わるステイグマに由来する無力さ、女としての自分を知らずに結婚から9ヶ月で母親になってしまうという無力さ（結婚するまで処女でいることは社会的義務であった）、家の内外で暴力に遭うという無力さ、しかし家族がスキャンダルにさらされないよう、そして他の男たち、特に裁判官や警察官から非難されないよう黙っていなくてはならなかった。仕事でセクハラに遭っても職を失う勇気はなかったという無力さ¹⁸。

だが、この引用文に登場する女性たちは、ダラ・コスタたちが運動に従事していた1970年代以降にも存在する。実は筆者の母親はダラ・コスタと同年なのだが、この「ないない尽くし」の生のいくつかはうちの母にも当てはまる。筆者は子どもの頃から夜寝る前に「お母さんが死んだらどうしよう？」という不安を抱えてよく泣いていた記憶がある。父に暴力を振るわれても、また、相談もなしに勝手に友人や親戚の連帯保証人になられても、別れることもできず嵐のような日々をじっと耐え抜いた母に感謝しつつも、父と渡りあえる強さを持たない母をバカにしていた。特に、経済権を持たない母の無償の家事労働に感謝しつつも経済権を握っている父の方に恐れながらも擦り寄っていたのである。その反省がダラ・コスタと家事労働賃金要求委員会の思想と運動の研究に至った筆者の本当の理由である。母は父が透析患者になるまで経済権を握っていなかったが、次のダラ・コス

タの引用文のように、すでにもう十分に働いていたのである。

われわれはすでに充分働いたのである。手や機械で何十億トンもの木綿を裁ち、何十億枚もの皿を洗い、何十億もの床をこすり、何十億語もタイプを打ち、何十億ものラジオを配線し、何十億枚ものおしめを洗ったのである¹⁹。

筆者はこの約10年の間、父の日常生活の介助の疲れとストレスから痩せ細る一方の母を助けたい一心で両親の手伝いを、あるときは同居して、そしてまたあるときは京都から通って行くものの、姉たちに感謝されず、なぜ自分だけが？と絶望し、なんども死んでしまいたいと思った。結婚や出産、育児等を含む家事労働からは逃げられても、親のケアという再生産労働からは逃げられず、自分の自律的な生き方に制限がかかることが多い女性と再生産労働の関係について書いたダラ・コスタの文章²⁰にずっと励まされてきた。最近始まった母との同居生活も、迫り来る母の老いと衰えと向き合う日々になるろう。不安もある。でも、お腹の中で過ごさせてもらい、産んでもらい、愛情と細心の注意を払って育ててもらった母には大恩がある。父のことは最後に施設に入れてしまったが、母のことはできるだけ大事にしたいと思っている。母の第三の人生を充実したものにするのもきっとダラ・コスタ研究の一環であると考えている。

さて、約10年に及ぶダラ・コスタ研究が筆者にもたらした最大の影響はなんといっても研究の面白さを知ったことである。筆

者はこれまで20年以上に渡り、韓国語の会議通訳者として韓国と日本の様々な分野の人々のコミュニケーションをサポートする仕事を生業としてきた。そこでの経験や充足感は何れも得難いものではあったが、どこまでも「他人の言葉」を訳すのが仕事であり、そこには筆者の言葉は存在しなかった。通訳の仕事に創造性が全くないかと言えそうではないが、自分の言葉で論を紡ぎ出し、それが人の手に渡り、読んでもらい、その文章を通じてその人の思考や行動が変わったら、と想像したら、それはとても素敵なことであるし創造的な生き方である。また、通訳の仕事はほとんど受け身である。仕事が入ってくるのを待つという態勢である。だが研究は違う。常に自分から新しい英知や創造性を求めて能動的、自律的に動いていく。ここが決定的に異なるところだと考える。筆者を変えたダラ・コスタの言葉を引用して本稿を閉じることとする。

天才的な女はほんとうに少なかったように思われる。事実そういう女は存在し得なかったのだ。なぜなら、社会過程から切り離されていたのでどのような問題にその才能を発揮し得たか、わからないのであるから。しかし、今では才能を生かせる問題が一つある。それは闘争それ自体のことだ²¹。

これからも京都で火曜会という場を大切に、人の書いた文章を丁寧に読み、議論し、書くという循環作業を続ける闘争を火曜会のみなさんと続けていきたい。

注

- 1 本文の「はじめに」と脚注2を参照されたい。
- 2 同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科で教員を務める富山一郎が主宰している。火曜会という名称は、富山が前任校で同会を発足させ、それが火曜日に行われていたことに由来するが、現在は水曜日に行われている。同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の正規の授業枠（演習I、II）、「現代アジア特殊研究」としても行われている。会期は半年毎にカウントされ、各会期は全15回の構成である。2025年10月からの現会期は第44期に当たる
- 3 富山はMFE第6号「知と集団をめぐる省察『多焦点拡張』という試み」の中で、彼の前任校に在籍していた堀川弘美という学生が2009年に書いた論文「『草の根通信』という場所 - 松下竜一における運動としての書き言葉 -」の中で投げかけた以下の問題提起をきっかけとして知と集団のあり方についての論を展開している。「問題意識の芽のようなものが生まれつつある時にそれを共有する人や場所、議論できる場所がない時、その違和感や問題意識の感覚は感覚のままに、言葉にされないままにその人の内側に放置されることになる。（中略）それらを口にできる場所自体少ない上に、口にできたとしても、その問題意識の根にあるものを明快な言葉で定義付けてしまうことで、一気に具体的行動へと直結させていく運動が待ち構えていたりする。少し立ち止まり、周囲を見渡し、考える場所が必要な時がある」
- 4 「（家事労働は）決して家の中だけで行われてはおらず、（中略）病院の大部屋を訪ねたり、健康保険をもらうために列を作って待ったり、子供を学校へ送り迎えしたりといったことも、そこには含まれている」（マリアローザ・ダラ・コスタ（1986）伊田久美子、伊藤公雄訳『家事労働に賃金をーフェミニズムの新

- たな展望-』インパクト出版会、20頁。)
- 5 「女の「価値」としての母性というようなのは、これは、ただもう打倒するだけだ。これこそ、再生産労働によって歪められたセクシャリティーであり、このためにあらゆる女たちは、子供たちの母親としてでなく、夫や父母の母親の役割さえ担わされているのだから」(同書、21頁。)
 - 6 マルクス経済学の研究者であるアメリカの Harry Cleaver は、ダラ・コスタの英語版選集 *Women and the Subversion of the Community: A Mariarosa Dalla Costa Reader*(2019, PM Press) に「Preface(序文)」を寄せている。そこで彼は、同書の「Introduction」を書いた Camille Babagallo が、博士論文執筆のために行ったダラ・コスタの思想と政治運動の研究が彼女の日常の諸々の問題に対処するための政治的展望を与え、彼女の人生を変えた事に触発されながら、ダラ・コスタの文章を始めとするいくつかのフェミニズム的ショックを受けたことが彼の人生にもたらした変化について詳述しており興味深い。例えば、父と同じ大学を卒業した彼の母親が結婚後にあっさりと主婦役割を受け入れ、夫の両親と同居して介護を行ったことに彼自身が何の違和感も感じていなかったことや、その後自身が、女性の法的権利獲得の闘いが激しく起こっていた1960年代のフランスに留学した際に、のちに妻となる女性から彼が持っていた伝統的な性別役割分業観を批判され、「ボーヴォワールの『第二の性』の第1巻と2巻を読むか、私と二度と話をしないかどちらかを選びなさい」と迫られ、まだ慣れないフランス語の数百ページにも及ぶ原書を必死で読んだ話等が紹介されている。また Cleaver は、ダラ・コスタとこの後本文に登場する『帝国』、『マルクスを超えるマルクス』の著者でダラ・コスタと1960年代に労働者主義運動の運動体のポテーレ・オペライオで共闘したアントニオ・ネグリの両方と親交があり、二人の書いたマルクスをめぐる論考を読み比べているが、これについては別稿で詳しく書きたいと思う。
 - 7 『MFE』第6号、167頁。
 - 8 前掲、『編集後記』
 - 9 前掲、古川岳志「ひとの話を聞いただけで終わってしまった話」、9頁。
 - 10 戸田三三冬(2004)「マラテスタ研究をめぐる資料状況素描」、『文教大学国際学部紀要』第15巻1号
 - 11 「Nota biografica e Introduzione di Mariarosa Dalla Costa」 p.4
https://www.bibliotechecivichepadova.it/sites/default/files/archivio/inventario_aggiornato_al_01-06-2025.pdf
 - 12 マリオ・トロンティ、ラニエロ・パンツェーリ等によって開拓されたイタリア労働運動の新潮流。制度的労働運動に反対しながら労働階級の自律性を強調した。(조정환(2003)『아우또노미아 - 다종의 자율을 향한 네그리의 항해 -』, 아우또노미아 총서 1. 도서출판 갈무리. (チョ・ジョンファン(2003)『アウトノミア - マルチチュードの自律に向けてのネグリの航海』、アウトノミア叢書 1. 図書出版カルムリ。) 475頁。
 - 13 ポテーレ・オペライオは1967年にピサで結成された革命的左翼集団。ネグリとダラ・コスタは労働者と知識人から成るヴェネツィアのマルゲーラ港のグループで活動していた。(麻生命彦(1983)「クロニクル 七〇年代イタリア革命的左翼 - アウトノミアを中心に -」、『インパクション 25』、1983年9月、インパクト出版会、15-16頁。)
 - 14 마리아로사 달라 코스따(2020)「정원으로 나가는 문」、이영주·김현지 옮김『페미니즘의 투쟁』, 도서출판 갈무리.
(マリアローザ・ダラ・コスタ(2020)「庭に出るためのドア」、イ・ヨンジュ・キム・ヒョンジ訳、『フェミニズムの闘争』、図書出版カルムリ。)
 - 15 同書、「地域を語る7つの理由」、317頁。
 - 16 富山一郎(2002)、「あとがき」『暴力の予感 - 伊波普

猷における危機の問題』、岩波書店

- 17 Mariarosa DALLA COSTA (2006), 'Di chi è il corpo di questa donna?' Convegno La autonomia posible, Universidad Autonoma de la Ciudad de México, 24-25-26 ottobre 2006 (= マリアローザ・ダラ・コスタ (2023) 姜喜代訳、「この女性の身体は誰のもの?」、大阪公立大学『人権問題研究』第20号) (https://www.omu.ac.jp/porp/rchr/assets/03_%25E5%25A7%259C%25E5%2585%2588%25E7%2594%259Fpre-print.pdf)
- 18 同論考、95頁。
- 19 マリアローザ・ダラ・コスタ (1980) グループ7221 訳、加地永都子解説「女性のパワーと社会の変革」、『資本主義・家族・個人生活』亜紀書房、201頁。
- 20 Mariarosa DALLA COSTA(2006b), 'Autonomia della donna e retribuzione del lavoro di cura nelle nuove emergenze' Convegno La autonomia posible, Universidad Autonoma de la Ciudad de México, 24-25-26 ottobre 2006 (= マリアローザ・ダラ・コスタ (2021) 姜喜代訳、「女の自律性と新たな非常事態におけるケア労働の報酬」、大阪公立大学『人権問題研究』第18号) (https://dlistv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta_pub/G0000438repository_24351016-18-35)
- 21 ダラ・コスタ (1980)、202頁。

(かん ひで 火曜会メンバー)

余白と居場所

日高 由貴

2025年12月に刊行された、なまず美紀さんの Kindle 写真集『コロナ禍のニューヨーク 写真集 2020-2021: A City Paused, Yet Alive¹』を観た。

アマゾンの紹介には以下のような文章がある。

コロナ禍のニューヨークを写し取った写真集。

2020年3月、あの日から街は静まりかえった。

行き場を失った日常。

音の消えた街並み。

人影のない観光地。

それでも、力強く、そして優しく生きる人々。

そんなニューヨークの表情と息づかいを、250点以上の写真に収めた。

歴史的な時間を記憶するために。

そして未来へ渡すために。

“恐怖と不安”の中で見せてくれた“強さと希望”に、感謝の気持ちを込めて。

写真集には、パニック買いにより、空っぽになった Trader Joe's(スーパーマーケット)の冷凍食品の棚、ゴーストタウンのよ

うにがらんとしたNYの5番街、“ソーシャル・ディスタンス”を守りつつ、食品を買うために間隔をあけて並ぶ人々の長蛇の列、すこし状況が緩和されたときの街の風景、マスクをして街を歩く人々の様子が、写真と、短いキャプションとともに収められている。

写真は不思議だ。撮られたのは6年近く前なのに、たしかに“現在”として目の前に存在している。まるで、自分自身が、いまその光景を目にしているように。

そして、もともと音のないはずの写真の風景が、たしかに無音であることが、肌感覚で伝わってくるのだ。裏を返せば、音のある風景を切り取った写真は、写真自体に音はないが、音を発しているのだともいえる。

もっとも印象に残ったのは、厳しい状況の中での短い言葉たちだった。

閉店を知らせる、無念さの滲む言葉や、病院の入口に貼られた“Heros work here(ヒーローたちが働いています)”というエッセンシャルワーカーへの感謝の言葉²。

道路にチョークアートで書かれた“Stay Strong(くじけずに乗り越えよう)”や、テイクアウトのコーヒーカップに描かれた“Stay safe. We ♡ you. (元気でいてください。

あなたを愛しています)”の手書きの文字たち³。

コロナ禍にかかわらず、たまたま入ったファーストフード店やチェーン店の壁に描かれたアート、見知らぬお店のシャッターにスプレーで描かれた絵や道路にチョークで描かれた絵。そこに書かれたメッセージに心をなぐさめられることがある。それは、時に、名前を持つ個人の作品ではなく、あるときは、AIによって量産された商品に過ぎないのかもしれない。しかし、顔の見えない誰かが発したメッセージであるが故に、よりあたたかさをもたえて心に届くメッセージともなりうる。そんなとき、アートや言葉の力を再び信じる力が湧いてくる。

一方で、2020年4月28日に、“America Strong”の一環としてライトアップされたエンパイアステートビルの写真を見ると、複雑な気持ちに襲われた⁴。

突如として立ち上がる“America”という主体。困難にくじけず、乗り越えよう、というとき、誰とともに、なのか。何と闘っているのか。

アメリカを批判したいのではない。ただ、いまここで苦しんでいる個人から、目の前に急に現れた「わたしたち—アメリカ」というものへの飛躍に心がついていかないのだ。これはアメリカが「日本」であっても同じだと思う。

ちょうど最近、オンライン雑誌MFEの創刊準備号⁵（2020年12月刊行）を読み返す

機会があり、その中の言葉たちも、写真集の風景に重なった。いまとなつては、コロナという言葉は、どこか古ぼけた遺物のようで、口に出すと「まだそんな昔のことを言っているの」という表情をされることもある。しかし、あのときに現れたさまざまな亀裂を簡単に忘れることはできない。

わたしが現在勤務しているのは、保育士、幼稚園教諭を養成する短期大学である。コロナの蔓延した当時、国家資格の取得に必要な実習⁶を実施することにも困難が伴ったことを思い出す。予定していた園でのクラスター発生、あるいは学生の罹患による、中止、延期、実習先の変更。園児たちと一緒に食事をすることも禁じられ、マスクをしたままの実習は、表情が見えづらく、子どもたちとのコミュニケーションも難しい、と現場の先生方からお話をうかがうこともあった⁷。

小さな子どもがいる教員は、保育所や幼稚園の休園に伴い、勤務にも影響が出た。SNSでは、保育所の休園により出勤できないという、同世代の友人たちの不満や不安の混じった書き込みを見かけることもあったが、ただでさえ感染のリスクの多い保育所で、現場の先生方がどれほど神経を削って働いておられるかを目のあたりにすることが多かった立場としては、そのような書き込みに、どこから何を言えばいいのかわからないような痛みを感じた。わたし自身もコロナ禍が始まった2020年、夜は演奏の仕事をしなが、昼間は某ホテルで派遣社員として働いていた。つい数日前まで、「これからもよろしくお願いします」と部

署を管轄する社員に言われていたのだが、近くのライブハウスでクラスターが出た翌日、急遽翌月のシフトは4時間になり、月収4800円になると伝えられた。また、演奏の仕事も、無期限休止になるものが多く、どうやって生活していけばわからない状況が続いた。市のコロナ緊急小口資金制度に助けられ、一か月生活していける目途が立っただけでもどれほどありがたいと感じたかわからない。

たまたまそのタイミングでいただいたピアノのオンライン講師の仕事と、子ども向けの英会話のオンラインレッスンをこなして、どうにか生活を繋いだ。

綱渡りのような生活をしていたので、子どものために仕事を休むということが、とりわけ非正規職員にとってどれほど深刻な意味を持つものかを想像することはできた。非正規職員にとって、「私事」のために「仕事を休む」ということは、収入が減るだけでなく、次回の契約を更新されないかもしれない、というリスクを負うことを意味している。もっとも、これは休まなくても同じで、常に「お前の代わりはいくらでもいる」と無言で恫喝されているように感じていた。それは、固有名詞をはぎ取られ、無名の一労働力に換算されているに等しい経験であった。

そんな中、オンライン雑誌の創刊準備号に「自分の居場所を探して～6月13日の集會に寄せて⁸⁾」という文章を投稿した。その頃、ライブ演奏ができなくなったので、自室の電子ピアノで演奏動画を録画し、発信していたことを思い出す⁹⁾。ライブのよ

うに、聴いてくれる人たちのダイレクトな反応がないのは寂しいことでもあったが、幾度も録り直すことで、自分自身の演奏を聴覚的にも視覚的にも客観的に見つめるきっかけにもなった。また、子育てをしている友人たち、遠方に住んでる友人たちなど、ライブ会場に足を運ぶことができない人たちに音楽を届けることが可能になり、「よかったよ」などとメッセージをもらうこともあり、オンラインの可能性を感じることもしばしばあった。というより、何か表現し、発信していなければ、自分が何者でもなくなっていくような恐怖と焦燥を感じていたのだった。

そんなことを思い出しながら、マキシング・グリーンの『想像力をときはなつ—アートと教育が世界を変える』を読んでいると、「生活の余白 (the margins)¹⁰⁾」という言葉に出会った。

「生活の余白」とは、批評家のドノヒューの言葉であり、「アートとはほとんどの人々にとって生活の余白 (the margins) にあるもの」であり、「余白」とは「日常生活では居場所がなく、そのほとんどが抑圧されているように見える感情や直感のためにある場所」だという。

ドノヒューは、アートを実用的な用途のない単なる娯楽だとする考えに対して、わたしたちの人生を一枚の頁として考えるなら、必需品、衣食住、日々の関心事や仕事、物事の継続に関するテキストは、ほとんどが慣習や日常、習慣や義務によって決められていて、このテキストのなかにいる限り、私たちはただ日常的な自分自身と一

致するほかないのだと述べている。そして、アートとは、このテキストの余白なのだ¹¹。

「日常的な自分自身」とは、さしあたり、〇〇人であったり、職業名や、フルタイム、パートタイムなどといった働き方であったり、戸籍上の誰かとの関係名であったり、若者、中年、シニアといったもので名づけられる自分自身であるだろう。一方で、アートがそれらのテキストの余白であるとするなら、それらの名づけからこぼれおちる「自分」がそこでは生まれ、息をしているということだ。

グリーンは、ドノヒューの主張を引用しながら、「自分たち自身の空間をつくり、つながりのなかで自分たち自身のことを経験し、それら空間を移動していくために創始を引き受けていく」という考えを提示しているが¹²、それは、このオンライン雑誌という空間における営みを指しているように思える。

グリーンの文章を読んだとき、コロナ禍において、音楽のライブや演劇が「不要不急」のものだと断じられ、活動が反社会的な行動のように報じられ、楽器を持ったミュージシャンたちが電車の中で白い眼で見られたり、あからさまに避けられたりした経験が呼び起こされた。

「緊急事態」に陥った時、どのようにして余白が塗りつぶされ、テキストで埋め尽くされようとしたかを、風化する記憶の中で忘れてはならないと思うのだ。それは、緊急事態になったから突如としてあらわれたのではなく、もともと水面下にひそんでいたものの見方が、明るみに出たのだとい

えるのではないだろうか。

コロナ禍で、演奏の動画を発信すること、色鉛筆や水彩絵の具で絵を描くこと、おそらく、大学における「業績」にはカウントされないであろう媒体に文章を書くことは、いずれも貨幣に換算されるものではなく、「無駄」や「不要不急」と言われるものだったのかもしれないが、すくなくとも、当時のわたしにとって、生きるために、息をするために、必要な「余白」であった。

ただ思うままに絵を描いたり、手を動かしてものを創ったり、歌を歌ったりすることが、人生の頁におけるテキストではなく余白だとすれば、思うままに文章を書くこともまた、本来は余白を生み出す行為だろう。

この雑誌がこれからどのように変容していくのかわからないが、たくさんのゆたかな余白を生み出していくような空間であると信じている。

注

1 ○日本語版 (Kindle Unlimited 対象。または 500 円)
<https://amzn.asia/d/4eYJJzY>

○英語版 (Kindle Unlimited 対象。もしくは JPY788)
<https://a.co/d/5Y6QqzG>

2 日本語版, location70 of 263.

3 日本語版, location100-116 of 263.

4 日本語版, location102 of 263.

5 『MFE 多焦点拡張』創刊準備号, 2020.12.

<https://drive.google.com/file/d/14jmpKw6BYLjm4CHdGctrvPpFF7CnG7WR/view>

6 保育士資格、幼稚園教諭2種の資格を取得するためには、2年間で5回の実習に行く必要がある。

7 コロナ禍における授業について、ICTと関連付けて考察した書いた文章として以下のものがある。

日高由貴. 領域言葉「表現」におけるICT利用に関する考察—Covid-19の影響下における朗読動画

制作の過程から— 大阪城南女子短期大学研究紀
要 56 号. 2022.3. 71-88. file:///C:/Users/Admin/
Downloads/%E7%B4%80%E8%A6%8156%E5%B7%
BB_04_%E6%97%A5%E9%AB%98%20(1).pdf

8 MFE 多焦点拡張. 創刊準備号, 2020.12. 74-85.
[https://drive.google.com/file/d/14jmpKw6BYLjm4
CHdGctrvPpFF7CnG7WR/view](https://drive.google.com/file/d/14jmpKw6BYLjm4CHdGctrvPpFF7CnG7WR/view)

9 “What a Wonderful World (この素晴らしき世界)”
[https://youtu.be/j8Cdgo_UETY?si=3xzsoefBIyeD_
idF](https://youtu.be/j8Cdgo_UETY?si=3xzsoefBIyeD_idF)

1967 年にリリースされたトランペット奏者・
歌手であるルイ・アームストロング (Louis
Armstrong/1901-1971) の楽曲。作詞・作曲：Bob
Thiele, George David Weiss. 多くの歌手にカバー
され、CMや映画などにも使われている。

「赤ちゃんが泣いているのが聴こえる。あの子どもた
ちは大きくなり、僕の知らないことを学んでいくだ
ろう。なんて素晴らしい世界なんだと思う」という
内容の歌詞。

10 マキシシ・グリーン「第11章 テキストと余白」
Maxine Greene, *Releasing the Imagination :
Essays on Education, the Arts, and Social
Change*. John Wiley & Sons, Inc.,1995. マキシシ・
グリーン著, 上野正道監訳, 桐田敬介・近藤真子・
園部友里恵訳『想像力をときはなつ—アートと教育
が社会を変える』勁草書房. 2025. 255-288.

11 ここでグリーンが引用しているのは、Donoghue,
D. *The Arts Without Mystery*. Boston ; Little
Brown.1983.

12 マキシシ・グリーン. 2025. 「第11章 テキストと
余白」255-256.

(ひだか ゆき アーティスト・歴史研究者・
大阪総合保育大学短期大学部講師)

跳躍する大杉栄

猫の後ろ姿からゾンビ的状况へ：DJ 風に（8）

川村 邦光

前回のつづきです。大杉栄の活躍を辿っていきたいと思います。大杉は獄中で生涯の多くを過ごしています。それが無駄だったか、徒労だったかどうかは、本人に聞いても解らないでしょう。とはいえ、それを意義付けるのが当事者、また後世の人でしょう。強制された場に安楽はないでしょうが、それを即座に好奇と連携の場に変えてしまうのも、大杉の才覚のさせる技なのでしょう。密室が知と実践の空間へと広がっていきます。安倍元首相を暗殺した山上徹也さんは、検察側の求刑で無期懲役でした。3年間を超えて留置され、読書・勉学に明け暮れているようです。

佐保川の堤では、桜並木のすっかり葉を落とした冬枯れの中、もみじがようやく紅葉し、散りかけていました。柿の木には実がたくさんなっていますが、熊は出てきていません。そういえば、11月末、堤で鹿が3頭、黙々と草を食っていました。私が通りかかっても、素知らぬ顔でした。春日山からか、奈良公園から、こんな遠くまで降りてきたのだろうか。

今宵は、セリーヌ・ディオーン (Celine Dion) の *ALL THE WAY...A Decade Of Song* (Sony Music Entertainment,1999) です。ゾッキ CD のワゴンの中から適当に選んだ

物です。この人、映画『タイタニック』の 'My Heart Will Go On' を歌った人です。知りませんでした。朗々と歌い上げる歌が続いています。

赤旗事件

1908年の6月、大杉栄は半年も経たないで、赤旗事件のために千葉監獄です。直接行動派と議会政策派との合同で、山口孤剣の出獄歓迎会を催した際、大杉や山川、寒村らの直接行動派が「革命歌」を高らかに歌いながら、「無政府」「無政府共産」「革命」と記した赤旗を押し立てて、会場内から街頭へとデモし、警官隊と衝突した事件です。

「革命歌」は1907年に森近運平（大逆事件で死刑）の『大阪平民新聞』が革命歌を募集し、栃木県高島村の築比地^{つひじ}仲助が当選した歌詞です。翌年、『日本平民新聞』15号（1908年1月1日付）に掲載され、このために発禁になりました。とはいえ、啞蟬坊と弟子の佐藤悟が「嗚呼玉杯に花うけて」の意気昂揚させるメロディで巷間に歌い広め、社会主義関連の集会や演説会、デモで幅広く歌われていきました。

あゝ革命は近づけり。あゝ革命は近づけり。起てよ、白屋^{はくおく}檻^{くわ}の子、醒めよ

市井の貧窮児。／見よ、我が自由の楽園を、蹂躪したるは何者ぞ。(中略)／あゝ起て、君よ、革命は、我等の前に近きぬ。農夫は〇〇(鋤)とつて起て、樵夫は〇〇(斧)をとつて起て。／鋤夫は〇〇(つるはし/ダイナマイト)とつて起て、工女は〇〇(梭)をとつて起て、森も林も武装せよ。石(爆弾)よ何故飛ばざるか。／我等の背血下つ(り)ては、やがて染めたる(なす)赤色旗、高く掲げて惨虐に、反逆(抗)すべく絶呼せよ。／あゝ革命は近づけり、あゝ革命は近づけり。起てよ、白屋檻褻の子、醒めよ市井の貧窮児。(『日本平民新聞』15号、括弧内に西尾・矢沢編、前掲書から補足)

赤旗事件で、大杉は治安警察法違反・官吏抗拒罪、控訴せず、重禁錮2年6ヵ月、罰金25円の判決。西園寺内閣がこれを契機に倒れ、社会主義者への弾圧が強められていきます。

千葉監獄へ

「僕等是一種の悪伝染病患者のようなもの」で、「病毒を猛烈にする恐れ」があり、他の囚人と一緒にできず、「最新式の建築と設備とを以て模範監獄の称のある、日本では唯一の独房制度の千葉監獄」に移されます。護送される汽車の窓から、「小春日和の秋の陽を受けて赤煉瓦の高い塀をまわりに燦然として輝く輪奂の美が見えた」と嘆声を挙げていたような感じでした。輪奂とは建物が壮大で美しい事だそうです。千葉監獄は1907年に竣工、鹿児島、長崎、奈良、

金沢の監獄とともに、明治五大監獄と呼ばれました。

千葉監獄の写真は、誤字の極めて多い拙著『荒畑寒村』(ミネルヴァ書房、2022年、p.75)に載せておきました。奈良監獄の写真はMFE 4号(2023年、p.109)に、どちらもかなりよく似ています。大杉は傍にいた寒村に、雑役の囚人の受け売りで「鯛がうんと食べるそうだぜ」と言うと、「それやいいな。早く行って食いたいな」と堺などと嬉しそうに微笑んでいます。しかし、鯛は出てこないで、夕飯も朝飯も菜っ葉の味噌汁、昼飯は沢庵二切れと胡麻塩です。

千葉監獄に着くと、「たてものは新築したばかりでてかてか光っている。室は四畳半敷位の、南向きの、明るい小綺麗な室だ。何よりも先ず窓が広くて大きい。東京のちょっとした病院の室よりも余程気持がいい」が、監獄の役人たちが「利口でないのに驚かされた」、電車事件でいくらもらったのかと、「政党か何かの壮士扱い」にされた事には皆が苦笑し、「ふだんは神経質に爪ばかり噛っているように見えたのが、入獄以来その快活な半面をしきりに発揮し出した荒畑が、「アハハア」と大きな声を出して笑った」と、千葉監獄の一日目を記しています。

監獄学校

今回は皆が禁錮ではなく、懲役であったため、仕事をさせられます。東京監獄では「ごく楽で綺麗な経木あみ」だったが、ここでは堅い南京麻を揉んで柔らかくして、下駄の鼻緒の芯をなう、手が荒れる、赤剥

けになる、かなり骨が折れる、昼間は10時間、夜鍋を2、3時間、「始めの一日でうんざりしてしまった」と、不満たらたらで前途遼遠の大杉です。だが、慣れるにしたがって、大杉が一番早く上手で、堺が遅くて下手だった、と寒村が思い返しています。大杉は看守長の「命令」に「反抗心がむらむらと起こってきた」後、自分を内省しています。

僕は元来ごく弱い人間だ。もし強そうに見えることがあれば、それは僕の見え坊から出る強がりからだ。自分の弱味を見せつけられる程見え坊を傷つけられる事はない。傷つけられたとなると黙っちゃられない。実力があろうとあるまいと、とにかくあるように他人にも自分にも見せたい。強がりしたい。時とするところの見え坊が僕自身の全部であるかのような気もする。

「見え坊」、プライド、自尊心、威勢を張って空威張りする、マルキストにしてもアナキストにしても、こんな人は少なくはないが、「弱い人間だ」と自覚している人、さらにはそれを自分の事として書ける人は稀でしょう。

大杉は「一年なり二年なりの長い刑期を何とかして僕等自身に最も有益に送らなければならぬ」という事で、二週間ばかり頭を悩まして、「読書と思索の方法」を決めています。「元来僕は一犯一語という原則を立てていた。それは一犯毎に一外国語をやるという意味だ」と、獄中で外国語を一語習得するのを目標に立てています。進

取の気性、旺盛な大杉です。最初の未決の時はエスペラント、巣鴨でイタリア語、二度目の巣鴨でドイツ語。千葉ではドイツ語の続き、刑期が長いので、ロシア語、出るまでにはスペイン語もちょっとかじってみようと抱負を語ります。「監獄学校」の「午前中は語学の時間ときめる」と記したが、実際に実行していたのです。

また、「以前から社会学を自分の専門にしたい希望があつた」ために計画を立てます。今までの社会学ではつまらない、「まず社会を組織する人間の根本的性質を知るために、生物学の大体に通じたい。次に、人間が人間として社会生活を営んできた経路を知るために人類学、ことに比較人類学に進みたい。そして後に、この二つの科学の上に築かれた社会学に到達して見たい」と。刑期の二年半では、読むべき本が多く、読書の時間が足りず、「もう半年増やして貰えないものかなあ」などと本気で考えている、大杉です。

獄内の作業労働を手抜きし、看守の隙をうかがい、寸暇を惜しんで、「滅茶苦茶に本を読んだ」、仕事には慣れてきて、「できるだけ仕事の時間を盗んで、勉強することだ」と、向学心に燃え、気合いが入っています。「かくして僕は、かつて貪るようにして掻き集めた主義の知識をほとんど全く投げ捨てて、自分の頭の最初からの改造を企てた」。潔いと言おうか、転回の素早い大杉です。

そして、「学究心が盛んになると共に、僕は僕の食欲の昂進、というよりもむしろ食っ気のあまりにさもしい意地ぎたなさに

驚かされた」と学究心の旺盛にともない、食欲の昂進をもたらし、好き嫌いがなくなっています。監獄のかつて閉口していた南京米四分・麦六分の「四分六の飯」を一粒も残さずに食べ、食べる夢を見るようになっていきます。ともかく本を読んでいる時でも、何か考えている時でも、ぼんやりしている時でも、何かにつけて食べ物が連想され、夢にまで見ます。

堺は山海珍味といったご馳走の夢をよく見て、箸を取って、いざ食べようとする、食べられなくなると語っています。それに反して、大杉の場合は、汁粉屋の前を通ると、いろいろな色の駄菓子やあんころ餅などが店先に並んでいて、堪らなくなって飛び込み、片っ端から平らげていく、「満腹どころか満のどにまで」詰め込んで、うんうんと苦しがるという「すこぶる下等な夢」です。目を覚ますと、腹具合が変だ、急いで便所に行くと「一瀉千里の勢いで跳ね飛ばす」、下痢をすると当座は大変だったでしょうが、思い起こして楽しそうに書いています。学究心と食欲が相乗して高まる一方で、「色欲」は「聖人君子」のように、「不能者になったのか」と心配するほど減退し、「ほとんど絶望した」と、冗談めかして記しています。

千葉監獄での獄中書簡

堀保子宛（1908年9月25日）に「この監獄はさすが千葉町民の誇りとするだけあって、実に立派な建築だ。僕らのいる室はちょうど四畳半敷ぐらいの分房で、なかなか小ざっぱりしたものだ。巢鴨に較べて窓の大

きくてそして下にあるのと、扉の鉄板でないところがはなはだありがたい。七人のものはあるいは相隣りし、あるいは相向いあっている」、運動場では七人で列になって、「堺がまさに半白ならんとするその大頭をふり立てて、先頭になって、一二、一二と歩調をとって行くさまは、そりゃずいぶん見ものだ」と、千葉監獄の様子を記しています。

千葉監獄で3ヵ月半ほど経ち、保子宛（12月19日）、「もうこの生活にもまったく慣れてしまった。実を白状すれば、来た初めには多少の懸念のないのでもなかった」、食べ物、労働、規則、長い刑期に耐えられるのか、頬はげっそり痩せてしまった、だが月日を経て、こうした憂いは薄らいでいき、今では「ほとんどゼロに帰してしまったのみならず、さらに余計な余裕さえ出来てくるようになった」、刑期が短いと満期のことばかり考えてしまい、日の経つのが遅く感じてしまうが、刑期が長いと、あれこれ計画を立て、「どうしてももう半年か一年か余計にいなければとても満足な調べのできぬ勘定になる。さあこうなると落ちついたものだ。光陰も本当に矢のごとく過ぎ去ってしまう」と何やら余裕綽々の大杉です。

新婦人主義（フェミニズム）を

さらに続けて、「この二カ年間に生物学と人類学と社会学との大体を研究して、さらにその相互の関係を調べてみたい」、「組織を立てて書物を選択して借してくれ」、毎月卑近二冊として、五〇冊は読めよう、第一回分として、至急三、四冊借りて送っ

てくれ、と若宮卯之助に伝えるようせかしています。また、日本および中国の文学書を漁りたい、日本では「徳川時代の俗文学」、本箱のなかの「青い表紙の小さな汚らしい本」のうち、Avare（吝嗇爺）を送ってくれ、アーヴィングの『スケッチブック』（独訳）を読み終えた、「語学を二つ三つも覚えて帰らなければ、とてもこの腹いせができない。（中略）あえてエンゲルスを気取るわけでもないが、年三十に到るまでには必ず十カ国をもって吃って見たい希望だ」と、獄中ながら意気軒昂です。

保子宛（1909年2月1日）、『家庭雑誌』復刊に関して、『新婦人』への解題を勧め、「新婦人主義（フェミニズム）を標榜」することを提起しています。他の婦人雑誌と競合できないし、読者は昔からの馴染みのほかに、同志に求めざるをえないと現状を捉えています。若宮から本を借りるのができないのに失望し、山田嘉吉に頼み、堺宅から『地球の生滅』（英文）2冊、『植物の精神』を借りる事、エスペラント文学を忘れないようにと伝えています。

冷水摩擦で暖を取る

堀保子宛（1909年2月16日）、監獄の冬を伝えています。「かなりの恐怖をもって待ち構えていた」が、風邪一つひかず案外に難なく通過、市ヶ谷や巣鴨よりも「よほど暖かい」、真南向きに窓があるので、正午前の二、三時間余り「日向ぼっこの快をとることができる」。娑婆では火で寒さを凌ぐが、ここでは「水で暖を取っている」、朝夕冷たい水で2度、身体がポカポカする

まで冷水摩擦をし、30分柔軟体操をする、「その気持ちのよさは、とうてい足下輩の想像し得るところでない」、この冷水摩擦、陸軍幼年学校で覚えたのだろうか、自慢気です。寒いのも10日か20日、「やがて「ああ、窓外は春なり」の時が来る」と春を待ち望んでいます。

面会の際に頼んだドイツ語の本、Michaelis, R., *Ein Blick in die Zukunft* (1890)、Boetius, *Die Tröstungen der Philosophie* (1893)、ケナン著のシビリオン3冊（シベリア紀行）、同『ルシツシェ・ゲフェングニッセ』、同『ツェルトレーベン・イン・シビリオン』の3冊を合本に、これがなかったらハイネの作を全部、ゲーテとシラーの作を全部、三才社に注文、黄色い表紙の雑誌『ル・ムーヴマン・ソシアリスト』10数冊、コルネーユ全集1冊、モリエール全集3冊（合本にして）、「原書仏語辞書」、ドイツ文学史・英文学史、「支那文学史」、エス語会話・悲嘆の谷・室内旅行・ハムレットなどのエスペラント文のものも送ってくれ、トルストイ、イプセン、『太平記』は着いたと知らせています。頼まれた保子は大変だったろうとたやすく想像されます。

ああ、窓外は春なり

次の保子宛の手紙（同年4月26日）では、風に吹かれて桜の花弁一枚だけが舞い込んできた、「何ら生の面影を見ない囚われ人にとっては、それが何だか慰めのようなまたはからかいのような一種妙な混り気を感じとなった。「ああ、窓外は春なり」のあの口絵を見て僕らのこの頃の生活を察して

くれ」と伝えていきます。

「ああ、窓外は春なり」はロシアの画家ニコライ・ヤロシェンコの絵、これは雑誌『日本及日本人』（1907年4月号）の口絵を切り取って、額装していたものでした。寒村も同じ獄中でこの絵を思い起こしています。ロシアに渡った際に、トレチャコフ美術館で原画（「世はいま春なり」と表記）を眼にして、しばらく立ち去ることができなかつたと『寒村自伝』に述懐しています。囚人が椅子を踏み台にして、監獄の窓から麗らかな春の光を溢れさせている、外を眺めている光景を描いています。獄中体験のある大杉や寒村などの左翼にとって、聖画（イコン）のようなものだったのでしょう。

『早稲田文学』は小説ばかりだという理由で不許、『帝国文学』『新天地』を入れてくれ、島村抱月の『近代文芸之研究』が出たら買ってくれ、早稲田文学社『文芸百科全書』は高いだろうが何とか手に入らないか、三宅雪嶺の『宇宙』高いので買う必要はないが、誰か持っていたなら借りてくれ、注文の多い大杉です。保子は『家庭雑誌』復刊のため広告取りなどで極めて忙しくしています。

話す言葉は奪われた

堀保子宛（同年6月17日）、ちょうど1年、速いと言えば早い、遅いと言えば遅い、「妙なものだ」、「窓ガラスに映る痩せこけた土色の異形の姿を見ては、自分ながら多少驚かれもする」が、身体に異状はない、「一食一合七勺の飯を残さず平らげて、もう一杯欲しいなあとと思っているくらいだ」、少

しは衰弱したろうが、「まず依然たる頑健児」という感慨です。その一方で、月日の経過とともに「吃りの激しくなるのに閉口」、「ほとんど半啞」、「話す言葉は奪われたが、一方ではまた読む言葉を得た」、ドイツ語は辞書なしでも読める、イタリア語は「一向骨も折れない」、ロシア語は困難だろうが、来年の今頃までにはきつものにしてみせる、と苦境にありながらも得意気です。

秋水と管野すが（幽月）の関係を知らされ、「春風吹き荒むという気味だったのだね。おうらやましいわけだ」、善悪の議論は色々あろうが、非難するな、「汝らのうち罪なき者これを打て、僕などはどうてい何人に向かっても石を投ずるの権利はない」と、我が身を振り返って殊勝な大杉です。すがは寒村ととうに別れていたが、すがが獄中の寒村から秋水の元へと走ったとして、秋水とすがは同志たちから難じられ見捨てられて孤立していき、『自由思想』1、2号が発禁、高額の罰金を科せられ窮状にありました。

例によって、ウォード『社会学』（『純粹社会学』）、ヘッケルの人類史、ルソー『エミール』（仏文）、エス文集を差し入れ、大西・高山（樗牛）の著書を借りてくれなどと催促しています。

あゝ君は美だ、理想だ！

堀保子宛（同年8月7日）、「ことしは急に激しい暑さになったので、社会では病人死人甚だ多いよし。ことに弱いからだの足下および病を抱く諸友人の身の上、心痛に堪

えない」と保子の身を案じています。115年後の夏、実に暑かった、蚊が極めて少なかった、焦熱地獄というところだろうか、9月下旬になり、涼しげに爽やかな風が吹き渡っています。閑居の私は冷房のために鼻水を垂らしていた事もありました（これは昨年2024年の事、25年も暑かったせいか、カメムシをほとんど見かけなかった）。

8月、「例の月だ。足下と僕とが初めて霊肉の交わりを遂げた思い出多い月だ。（中略）数えれば早や三年」、最初の夏は巢鴨、2度目は市ヶ谷、3度目は千葉、いつも離れ離れで、「この悲惨な生活は、直ちに足下の容貌に現れて、年のほかに色あせ顔しわみ行くのを見る」、それは不孝な事なのかと、ポーランドの詩人クラシンスキイの「婦人に寄す」（1, 2連、略）を挙げて、保子をなだめすかしています。

世のあらゆる悲哀を嘗めて、／息の喘ぎ、病苦、あふるゝ涙／その聖なる神性によりて後光を放ち、／蒼白のおもて永遠に輝く。

かくして君が大理石の額の上に、／悲哀の生涯の、／力の冠が織り出された時、／その時！ あゝ君は美だ、理想だ！

『家庭雑誌』は発禁、社会主義者への弾圧は苛烈になり、「仕事の品のよしあし」を選ばず「何をしたって分不相応ということがあるものか」と保子を諭しているように、窮乏生活を余儀なくされていきます。

異変の予感

堀保子宛（同年10月9日）、大杉や堺などに手紙の来るのが遅く、「少し変だ」「社会に何か異変があったに違いない」、「愚堂の事件」から拘引者が多く出ているのではないかと疑心暗鬼になっています。内山愚堂が赤旗事件の批判・救援を訴える『入獄祈念 無政府共産』の秘密出版やダイナマイト所持で逮捕されていました。だが、保子が面会に来て、「顔を見て初めて胸を撫で下ろした」、保子が泣き言も言わないで「細いながらも自分の腕を働かせて行く」、「僕は本当に感心している」と褒めそやしています。

秋水とすがに対する、寒村について、「あの寒村のことだから煩悶をしなければいいがと心配していたが、案外平静なようなので」安心します。寒村を慰めていた看守に、「フリー・ラブ・セオリイなぞを説いて、こうなるのが当たり前でしょうよと言ってカラカラと笑っていた。しかし例の爪は見てもゾッとするほどひどく噛みへらされてしまった」と伝えています。寒村はいじけて内向すると、爪を噛む癖があったのです。保子には「あまり立ち入らんようにするがいい」と忠告しています。

さらにいつものように、書物の差し入れを依頼します。『エス語散文集』『エス語文集』『フンド・デル・ミゼロ』（3冊合本）、金井延『社会経済学』、福田徳三『経済学研究』、早稲田文学社『文芸百科全書』（近刊のはず）、理化科学叢書の『言語学』『生理学』（英文）、平民科学叢書の『科学と革命』（英文）、ワイニフンド・スティブン『フ

ランス小説家』、ラブリオラ『唯物史観』（仏文）、ル・ボン『群衆心理学』（仏文）、ゾンバルト『労働問題』（独文）、『菜食主義』（独文：加藤時次郎所有、「長々の実行で実は少々心細くなったから、せめてはその理論だけでも聞いて満足したい」）、トルストイ作民話（露文：英文と合本して）。

家長意識の芽生え

大杉伸宛（同年11月24日）、父・東の死を知らされた翌日、次男の伸が面会に来た後の手紙です。父の死、「哀しみの感」よりも「驚きの感」、涙に暮れるよりも「ただ茫然自失という体」と冒頭に記しています。様々な整理・処理は知人の弁護士と保子と一緒にする事。「僕は元来まったく家を棄てた」、それは「長男たる責任をまったく抛ったのではない」、父がすべてを差配しているため、「用のない家庭の累からまったく僕の身を解放して、そして他に大いに有用な義務を尽くそうと思ったからだ」、家を出てからは弟妹を顧みず、父に「僕の廢嫡を願っておいた」が、「時には自ら泣きながらもなおあえてこの行為を続けていた」と自己弁護めいたことを綴っています。

そして、父の死後、そうしてはいられない、責任を果たさねばならない、だが「もとより僕の思想は棄てることはできぬ。僕は依然としてやはり社会主義者だ。むしろ獄中の生活は僕の思想をますます激しくする傾きがある。（中略）僕は大勢の兄弟を後ろに控えたからだだ」、「頼みとする僕は牢屋にいる」とジレンマに駆られています。

大杉は父・継母には孝を尽くさなかったが、悌に篤くとはいっても、保子に任せて、弟妹（勇・進・秋・あやめ）の面倒はよくみています。

保子宛（同年12月23日）、弟妹たちは幼くして母と別れ、継母のもとでは不自由にしていよう、正月にはさっぱりした衣装をさせ、餅でもたくさん食べさせ、孤児になった寂しさを感じさせないように、「陽気に面白く遊ばしてくれ」、「足下はどうしても苦勞をして一生を過ごさねばならぬ運命の人らしい」、人生には苦もあれば楽もある、苦の中に楽もあるなどと書いて、すっかり保子に任せ切りです。

本の差し入れ依頼、『経済学序論』（仏文）『宗教と哲学』（同）、イリー『経済学概論』、モルガン『古代社会』、L・ルイス『個人の進歩と社会の進歩』、『ロシア史』。

高等雑誌を出したい

保子宛（1910年1月25日）、出獄後の「重荷」への対処策を思い巡らしつつ書いています。まずは出版。「商売」としてよりも、「社会教育の一事業としてごく堅く真面目にやりたい」。「生活の道」のために、出版と直接関係のある本屋。かつて計画のあった「支那の先生方達の世話をするのが」最も確實・安全・容易であり、十分な信用・同情があり、これに語学の教授を加えれば「実利」もあろう、雑誌を出せるなら、「科学と文芸とを兼ねた高等雑誌にしたい」、「僕らが、実際の思想よりも数歩引き下がれば」世の中の要求に応えるものになろう、アナトール・フランスがもてはやされているように、「文

学も多少僕らの時代に近づいてきた」と記しています。1912年、編集兼発行人を大杉、印刷人を寒村、広告営業を保子として、『近代思想』を創刊しています。

何かドイツ語の本、『機械的心理学』、『帝国文学』『現代評論』の合本の差し入れ依頼。それからフランスへ本を注文したいが、50円ばかり都合できないか、と過剰な「重荷」を担わされて逼迫している保子に、すべてを任せて甘えかかっています。

飢えた蠅

保子宛（同年2月24日）、南向きの窓から注ぐ陽射しのもとで「日向ぼっこをしながら仕事をしていると、何だか黒いものが天井から落ちてくる。見ると蠅だ。老の身をようように天井の梁裏に支えていたが、ついに手足が利かなくなって、この始末になったのだ。落ちて来たまま仰向きになって、羽ばたきもできずに、ただわずかに手足を慄わしている。指先でそっとつまんで日向の暖かいところへ出してくると、一、二分してようやく歩き出すようになるが、ついに飛ぶことはできない。よろばいながら壁を昇っては落ち、昇っては落ちしている。／これは十二月から一月にかけて毎日のように見る悲劇だ」、蠅の観察と実験といったところでしょうか。大逆事件、もしくは大杉の宿命を暗示していると言えないわけでもありません。

このたった10ヵ月ほど後、秋水は獄中から前妻の師岡千代子宛（同年12月11日付）に「三十年^{てきじん}別^{ともしび}尽す読書の燈／今日は空しく病骨^{りょう}の稜^{けんこつ}を余す／石壁天高くして健鶻を

窺^{かいま}み／鉄窓風冷やかにし飢蠅^{きよう}を憫む／幽居^{あたら} 恰^{あたか}も山中の寺に似たり／跣坐自ら物外の僧なるかを疑う／偏に喜ぶ人情の随処に見^{あら}わるを／吾に於て獄吏も亦親朋^{しんゆう}なり」という詩を送っています。悟り澄ましたか、あるいは諦念の境地に達したか、「飢蠅」を憐れんでいるようだが、飢え死にした／しそんな蠅に我が身を仮託していると言っているでしょう。

越冬する蠅、よろける蠅、飢えた蠅、囚人、すなわちゾンビ的存在です。大杉は在獄の経過にともない「吃りの激しくなる」、カ行とタ行が特に駄目なようで、「話す言葉は奪われたが、一方ではまた読む言葉を得た」と片意地を張っていますが、発話では生死の境にあったのです。ゾンビの呻きは生死に亀裂を入れ、生き物の現状・存在様態に異議申し立てしている声なのでしょう。よろける蠅、飢えた蠅の羽音もそうでしょう。

大杉は越冬できましたが、秋水はできませんでした。大杉は出獄後には弟妹を養うために「二、三年はまったく家政のために犠牲になろう」と言いながら、「自由語学塾」設立、雑誌・翻訳の出版を構想して、ゾンビ的存在として生き抜き、感染者を増やそうとしています。

借入の依頼、ディーツゲンの哲学、バーナード・ショー『イプセン主義神髓』、シンクレア（米国の社会主義作家）『ジャングル』、ジャック・ロンドン『諸階級の闘い』、バーナード・ショーのドラマ、堺家から。ビュヒネル『物質と精力』、ドーソンの近代思想史、ゴーリキー短篇集（相馬御風訳）、

幸徳家から。近代政治史、ゴーリキー『平原』、上司家から。

保子宛（同年4月13日）、大杉の弟妹6人の世話をねぎらい、猫のナツメが「いたずらされる仲間ができて困っていやしないか」と尋ねています。去年の10月から頼んでいるドイツ語の本を大至急送ってくれとせかしています。フンボルト『アンジヒテン・デル・ナトゥル』、ヤコブセン『ゼックス・ノベルレン』、『ヴィッセンシャフトリヘ・ビブリオテク』、ベルタ・フォン・ズットネル『デイ・ワッヘン・ニイデル』。

至急送ってくれ、『プロプリエタ（経済学）』（伊文）、『フォンデュリア』（同）、『ロジカ（倫理学）』（同）、ルクリュ『プリミチフ（原人の話）』（英文）、E・ヘール『ドラマチスト（文学論）』（同）、『スカンジネビアン（北欧文学）』（同）、『フレンチ・ノベリスト（仏国文学）』（同）、ウォード『純粹社会学』（同）、ラポポルト『歴史哲学』（仏文）、ノヴィコー『人種論』『文明の精神的要因』（同）、ギディングス『社会学原理』（同）。ここまで書いて、体重計測に呼び出され、13貫400目、約50.2キロ、去年から体重が増え続け、身体は丈夫だと伝えています。

秋水逮捕の報

保子宛（同年6月16日）、秋水たちの事件を知り、秋水から借りた30円を返す事、秋水の母親を家で、つまり保子が世話してくれる事を頼んでいます。堺の妻、為子は古本を買い売りして糊口を凌いでいるが、本郷の本屋と協定して工夫できないかと提案しています。大杉は面会の際、保子から

秋水らの逮捕を知ったのでしょうか。「四十三年の初夏のある日、浴場への途中で大杉が「おい、幸徳がやられた」とささやいた。ささやくと言っても、耳に口を寄せてささやくのではなく、反対に顔はそっぽを向いたまま、独り言のように言うわけだ」（『山川均自伝』岩波書店、1961年）と獄中の山川は記しています。

そして、例のごとく、本の依頼です。物集高見『日本文明史略』、長岡半太郎『ラヂウムと電気物質観』、鳥居龍蔵『人類学』、平塚忠之助『物理学輓近の発展』、シジュウイック『倫理学説批判』、高桑駒吉『印度五千年史』、『物理学汎論』、以上『帝国文学』の広告を見よと指示しています。それから、奥村信太郎『通俗文学汎論』、金井『社会経済学』、福田徳三『国民経済原論』、イリス『経済学提要』、マーシャル『経済原論』、コンラッド『国民経済学』、草野俊助述『生物学』、『樗牛全集』、綱川梁川の文集、ツルゲーネフ『獵人日記』（露文）、ゲーテ文集（独文）

東京監獄へ、おい、秋水！

保子宛（同年9月16日）、7月から体調不良、下痢に食欲不振、秋水のように腸結核になるのではないかと不安しきりです。山川均たちが出獄した日、野分か、桐の葉を落とし、「秋になったのだ」という感慨。病監前のコスモスが生い茂り、「さびしい秋の唯一の飾りで、かつやがて僕らを送り出す喜びの花になるだろうと、ひたすらにその咲き^{にお}香うのを待っていた」と心がはやっているようです。

すると、市ヶ谷の東京監獄に移され、「八畳敷の部屋に一人住い」、仕事は経木編みです。『獄中記』では「恐ろしく嚴重な警戒の下に東京監獄に送られ」、検事局で大逆事件との関係を尋問されたと記され、不安に駆られています。この東京監獄では、大逆事件の目深に編笠を被ったほとんどの被告を見えています。ある日、秋水が通るのを見かけます。「おい、秋水！ 秋水！」と声をかけますが、大声を出すわけにもいかず、秋水は気づきませんでした。「幸徳は少々つんぼなので、知らん顔をして行ってしまった」、「何んという馬鹿な遠慮をしたものだろうと今では後悔している」と心残りを吐露しています。

至急送れと、ダーウィン『ビーグル号航海記』（英文）、クロポトキンのロシア文学、ダイアー『産業進化論』など。書物の依頼はここで終わります。獄中書簡に出ている書籍リストは、梅森直之『初期社会主義の地形学：大杉栄とその時代』（有志舎、2016年）に挙げられています。これは大杉の吃音に着目している本です。

牢ばいりはやめられないな

保子宛（同年10月14日）、獄中からの最後の手紙。身体は回復し、週に1度くらいの「下痢なら、ちょうどここで毎週一度大掃除をやるような気持がして、かえって小気味がいい。出るまでにはぜひ治したいと思ってしきりに運動して養生している」、本を読んで過ごしていると、「日にちの経つのが驚くほど早い」、もう少し経てば出られるのだが、「何だか今ここにこうして

いるのが自分の本来の生活でもあるかのような気持すらする」と獄中の名残惜しさを伝えています。

そして、「僕もすっかり角を折ってしまった。こんどこそは大いにおとなしくなろう。もう喧しいむずかしいことはいっさいよしにして、罪とがもない文芸でも弄んで暮すのでしょうか。（中略）しかしせつかくこうしておとなしくなろうと思っても、お上で依然として執念深くつきまとうようなことがあっては、何もかもオジャンだ」としおらしい事を述べています。少しは大逆事件の影響もあったのですが、秋水たちが死刑にされるとは思ってもいません。

11月29日、出獄、保子や堺などが出迎えています。この日は「盛んに獄中の事なぞのお饒舌をしたが、翌日からはまるで啞のようになった。殆んど口がきけない」、獄中での「無言の行」のせいか、「もとからの吃が急にひどくなって、吃りともいえない程ひどい吃りになった」、その後、まる1ヵ月くらい筆談で過ごしたと記しています。

その一方で、「何を食っても極りなくうまい」、特に「あの白い飯」、「茶碗を取り上げると、その白い色が後光のように眼をさす、口に入れる。歯がちょうど羽根布団の上へでも横になった時のように、気持よく柔らかいものの中にうまると同時に、強烈な甘い汁が舌のさきへほとばしるように注ぐ。この白い飯だけで沢山だ、ほかにはもう何んにも要らない。／「あれを思い出しちゃ、とても牢ばいりはやめられないな。」／前科者同士がよく出獄当時の思い

出話しをしながらこうっては笑う。実際日本飯の本当の味なぞは、前科者でもなければとうてい味わえない」と、監獄飯礼讃を喜々として述べています。

秋水、すがらと面会、処刑、火葬の隊列

12月8日、大杉は秋水に面会しています。堺利彦宛（1910年12月11日）に、「大杉君に申上げる。先日は着てくれて嬉しかった。弟に会ったような気がした。君が吃りで十分の話ができないのが残念だ。手紙をくれ玉え。公判で傍聴席を見渡したが知った顔は極めて少ない。ハハーと思った。左らば」と伝えています。秋水の公判開始は12月10日、傍聴禁止でした。失語症のような大杉も秋水も残念だったでしょう。

翌年1月21日、大杉は保子や堺、吉川守圀とともに、秋水らの最後の面会をしました。管野すがは保子と「最後の握手」をして、「私の堰き止めていた涙の堤は、切れてしまった」と『死出の道草』（『明治文学全集』96巻）に記しています。すがはかつて保子のしていた中国人留学生の世話を手伝っていました。秋水らの処刑は24日、すがは25日でした。25日に秋水らの坐棺に納められた遺体引き取りに行き、隊列を組んで落合火葬場に向かい、その途次では警官隊と衝突します。

糟糠の妻、保子

糟糠の妻だった保子は『中央公論』1917年3月号に「大杉と別れるまで」を載せ、「此の困苦の中から大杉へは間断なく外国から

取寄せた書物の差入れをしたり、又及ばずながら同志の家族のお世話などをして余所ながら大杉の志を扶けて居りました」（瀬戸内寂聴『諧調は偽りなり：伊藤野枝と大杉栄 上』岩波現代文庫、2017年）と記しています。

保子は高額な洋書の費用をどのようにして工面したのか。大杉がエスペラントを教えていた「支那革命党」の中国人たちが革命党の寄宿舍を作り、その監督という名目で仕事を与えています。そこに管野すがが転がり込んで同居しました。日本・中国の圧迫が厳しくなり、革命党員は寄宿舍を閉じて帰国すると、保子は路頭に迷うことになります。

借金をしながら、『家庭雑誌』を盛田有秋などの世話で発行しますが、発禁が続いて長期停止を命じられました。その後、ある雑誌の広告取りを手伝って、かろうじて糊口を凌いだというあり様だったのです〔同前〕。獄中の「意気軒昂な大杉」を貧苦のなかで支えていたが、大杉はこうした恩義を当然視して、やがて忘れてしまいます

27日、寒村はすがの遺骸に別れを告げた後、大杉宅を訪れ、一泊していきます。寒村は絞首刑の痕が残っていると言われ、遺体を「見る勇気がなかった」と『寒村自伝』に記していますが、警保局の内偵報告書には「死顔を見て、悲憤の情を漏らし、自ら棺の蓋を打付け」とあり、どちらだったのでしょうか。見ない事で、悲嘆に暮れるしおらしい自分に同情が集まるとでも考えたのでしょうか。ともあれ、大杉と寒村は閉塞した状況を打開するため、翌年に創刊される『近代思想』の計画を話し合ったのでしょう。

堺と藤田四郎が発起人になって、2月に沈滞しきっていた運動を盛り返そうと、同志を集めて社会主義各派の合同茶話会を催し、大杉も保子も参加しています。2回目の茶話会で、堺が秋水の遺墨として持参したと思われる、平民社時代の秋水や堺ら4名の寄せ書きに、大杉は「春三月縊り残され花に舞う」と書き加えています（黒岩比佐子『パンとペン』講談社、2010年）。秋水を弔うとともに、生き残った僥倖を輪舞する桜の花びらに我が身を託して、踊り狂おうとする、秘かな決意めいたものを籠めているのではないのでしょうか。

獄中スケッチ

大杉は「獄中記」に続いて、「続獄中記」（『新小説』1919年4月号）で、獄中をスケッチしています。2年半に及ぶ獄中体験の総括とも言えます。初めに「変態性欲」と呼んで、獄中の男同士の「色恋」を取り上げています。寄宿舍、大杉自身も「甚だお恥ずかしい」がその仲間だった陸軍幼年学校での「猛烈な」変態性欲、それは珍しいことではないとし、大杉が監獄の風呂桶で迫られたことも記しています。社会主義者の間、特に集合写真には、男同士の友愛や団結といったホモソーシャルリティが浮き彫りになっているように感じます。

色情は起こらず、煙草はすっかり忘れてしまったが、「牢屋の仙人も時々凡夫に帰る」と与太話をしています。裁判所に呼び出され、馬車に乗った際、眼を凝らして街頭を眺めます。「見るもの総て美しい。というよりは珍しい。総てがけばけばしく

生々として見える。殊に女は、女でさえあれば、どれもこれも、皆な弁天様のように美しく見える。（中略）面会に来た女の顔も美しい。もう幾年も連れ添って見あきるほど見た顔なのに、黙ってその顔を眺めているだけでもいい気持だ。眼のふちの小皺や、まだらになった白粉のあとまでが艶めかしい趣を添える」と保子の事も記しています。

監獄で出来あがった人間

再び巢鴨監獄に入った時、馬車で「鬼ヶ島の城門」をくぐると、檜か青桐の立つ広い庭の景色が眼に入った、かつて帰省の途中で汽車の窓から山並みを眺めて湧き出たインスピレーションを思い出していた、親しみと懐かしさ、「一種の崇高の念」の加わったインスピレーションだ、「これが本当の故郷の感じなのだ」と「直覚した」、看守らから「やあ、また来たな」と迎えられる、古い幼友達の「暖かい挨拶に聞える」、「監獄を自分の故郷や家と同じに思うのは、甚だ怪しからぬ事でもあり、また甚だ情けない事でもあるが、どうも実際にそう感じたのだから仕方がない」としみじみと述懐しています。

千葉監獄では、故郷や幼少年時代の事がしきりに思い出され、「自分の幼少年の一切の腕白が、あらゆる権威に対する叛逆、本当の生の本能的生長のしるしであったことを、書き現わして見たい」と、大杉は創作の腹案に耽り、トルストイの『幼年時代』『少年時代』『青年時代』、ドイツ語訳のコロレンコの『悪い仲間』を読んでいます。これが後に『自叙伝』としてまとめられます。

「僕は自分が監獄で出来あがった人間だという事を明らかに自覚している。自負している」、この最初のきっかけは電車事件での投獄です。それが運命を決めたばかりではなく、教養や知識、思想性格はすべて入獄中に養いあげられ、鍛えあげられた、22の春から27の暮れまでの獄中生活、「それがどうして、僕の人間に、脊髄にまでも食い入らないでいよう」と獄中体験を総括し、次のように述べています。

故郷の感じを始めて監獄で本当に知ったように、僕の知情意はこの獄中生活の間に始めて本当に発達した。いろいろな人情の味、というような事も始めて分った。自分とは違う人間に対する、理解とか同情とかいうような事も始めて分った。客観はいよいよ益々深く、主観もまたいよいよ益々強まった。そして一切の出来事をただ観照的に見て、それに対する自己を実行の上に現わす事の出来ない囚人生活によって、この無為^{イナクテブ}を突き破ろうとする意志の勢力を養った。

「続獄中記」を書いたのは1919年、11年1月末には秋水らが処刑されていますが、大杉は「死処」について思い巡らし、「死という問題についての僕の哲学を造りあげた」と記しています。「世間の何処に出ても、唯一者としての僕を、遠慮なく発揮する事ができるようになった事を感じた。そして僕は、僕の牢獄生活に対して、神の与えた試練、み恵み、というような一種の宗教的な敬虔の感念を抱いた」と、生き残ってい

る自分に対して恩寵めいたもの感じたとする感慨を述べています。私なんか、業晒しかどうかは解りませんが、生き延びているという感じですよ。

蜻蛉の事

千葉監獄でのある日、蜻蛉が一匹窓から入ってきました。木の葉や花びらが一枚でも飛んでくるとどれほど「囚人の心」に潤いを与えたかしれません。大杉は蜻蛉を捕まえ、飼うつもりで、厚い洋書の中に挟んでおいて、蜻蛉を結わえる帯の糸を抜き始めたところ、蜻蛉はしきりに揉み手をするようにもがいている、だいぶ糸を抜いたと思う頃、「ふと、電気にでも打たれたかのようにぞっと身慄いがしてきた」。大杉は蜻蛉の羽を持って、窓から逃がしてやったのです。

どうして蜻蛉を逃がしてやったのか、しばらくして「俺は捕えられているんだ」という考えが「閃きのように」頭をよぎりました。少年の頃、犬や猫、蛇などの小動物にはひどく残忍だったのだが、蜻蛉を飼ってみようと思ったことすら、ショックだった、その時「僕のからだの中に、ある新しい血が滔々として溢れ流れるのを感じた」。このことを思い出すたびに「その時のセンチメンタリズムを笑う」、だが「センチメンタリズムこそは本当の人間の心ではあるまいか」「この本当の人間の心を、囚われ人であったばかりに、自分のからだの中に本当に見ることができたのではあるまいか」とまとめています。

「監獄人」「囚われ人」として、獄中とい

う「広い世間的生活の縮図」の中で体験できた「本当に血の滴るような内面生活」の瞬間的な一場面だったのでしょう。「一種の宗教的な敬虔の感念」と捉えています。大杉の一種の回心、生もしくは生命の深奥に触れたという感じではないでしょうか。「センチメンタリズム」とも言い換えています。訳語として、感傷主義とはまったく異なっているでしょう。生命の横溢というところではないでしょうか。ベルグソンの言うエラン・ヴィタル、生命の躍動なのでしょう。

病気になりたい

大杉は囚人で羨ましかったのが「野獣」と「子羊のような病人」だったと振り返っています。病人は普通の家のような大きな窓やガラス戸の付いた風通しのいい、暖かそうで小綺麗な病監に住み、四季を通して草花のある庭を白い着物姿で「呑気そうに」うろついています。大杉は足の親指の爪をはがして、巢鴨の病監に入っています。

病棟は精神病患者と肺病患者と「普通の患者」、3棟に分かれていました。大杉の入った普通病棟はいいかげんな病院の二、三等よりもずっといい、三畳の畳敷きの室、室一杯の窓から日光を浴びて、外の草花を眺めながら、寝て暮らせばいい。看護人は「早稲田大学生の某芸者殺し君」です。

秋水は病監で看守を買収して、毎朝『万朝報』を読み、毎晩1、2合晩酌をしていたそうです。大杉は下戸だが、看護人に頼めば、薬室から葡萄酒やブランデーを持ってきてくれました。医者も役人も、看守も

「皆な仏様」で、自分が監守されている事も、囚人だという事もほとんど忘れていたと懐かしんでいます。病気になりたいと思いつつも、「どんな死にかたをしていいが、獄死だけはいやだ」と語っています。

野獣の事

羨ましかった囚人「野獣」は、看守にサーベルで斬り付けられ、額や両頬に大きな傷があります。甲府監獄で看守たちと大喧嘩して東京監獄に送られ、運動場で房内の10数人と脱走を企て、薪を手にして看守に迫り、門の方に走って出たのだが、逃げてもすぐ捕まるだろうと引き返し、監房へ戻った。その後、監房内の囚人と看守の間で攻防が続き、「野獣」が「紛擾」の談判に行った際、看守に斬り付けられ、官吏抗拒罪の刑期が決まって千葉監獄に移されたという話です。

千葉監獄では神妙にしていたが、何かに怒ったのか、また手のつけられない暴れ者になり、いくら暴れたって、泥棒じゃ誰も相手にしてくれない、「旦那の方じゃ、暴れれば暴れる程、名誉になるんでしょ」「監獄に来て、まるで御大名でいれるんですからな」という事で、大杉は「弟子入り」を頼まれています。「野獣」は弟子入りに来なかったが、大杉は「野獣」と題した詩を書いています。

また向ふ側の監房で荒れ狂ふ音がする、
／怒鳴り声をする、／歌を歌ふ、
／壁板を叩いて騒ぎ立てる。／それでも役人は知らん顔をしてほうつて置

く。(中略) だが僕は、／この気ちがひ、この野獣が、／羨ましくて仕方がない。／さうだ！ 僕はもつと馬鹿になる修行を積まなければならない。

放恣と反抗

「労働運動と個人主義：労働者の個人的社会的想像力」(1915年)で、千葉監獄を思い起こしています。以下の引用は「民衆芸術の技巧」(1917年)でも再録されています。

五年以前の二年半ばかりの獄中生活の間に、僕は少しくロシア文学に親しみを覚えて、トルストイ(もしくはドストエフスキー) ツルゲーネフ、およびゴーリキーの各々の対平民的態度について、僕にとって甚だ興味深かった、比較観察をしたことがある。そして殊に僕はトルストイやドストエフスキーが平民の温順と忍辱とに、ゴーリキーが平民の放恣と反抗とに、各々の人生の真理を認めたことに、最も興味深い対照を感じた。僕は、トルストイやドストエフスキーとともに、甚だ温順の徳を尊敬するのであるが、奴隷的境遇にあるものの忍辱は、かえつて甚だしき不徳であると考えた。そして、むしろゴーリキーの主人公の放恣と反抗とに強い同感を覚えた。(中略)／とにかく僕は、獄中におけるこれらの文学書の影響と、およびその以前から続けていたサンディカリズムの研究とによって、労働者の有する強烈なる生活本能と、反抗本能と、およびそれらの本能が行為となって現われた結果の、偉大

なる個人的および社会的創造力に打たれたのだ。

トルストイとドストエフスキーが平民の温順と忍辱、ゴーリキーは平民の放恣と反抗、大杉はゴーリキーに強く共感しています。それは大杉の労働者観であったばかりではなく、自画像でもあったはずです。当時の労働者には大杉の言うような「放恣と反抗」また「強烈なる生活本能」や「反抗本能」「個人的および社会的創造力」があったのだろうが、先の「野獣」のような、マルキストが貶めたルンペンプロレタリアートのほうにあったのではないかと思ってしまう。

巡査殴打事件

だいぶ長くなってしまいましたので、日本での最後の入獄を述べていきましょう。話は1910年代末に飛びますが、その間の事を羅列しておきましょう。12年に保子、寒村と『近代思想』創刊。13年にサンディカリズム研究会を始め、14年に『近代思想』を廃刊し、月刊『平民新聞』発刊、伊藤野枝との出会い。15年、研究会を平民講演会へ、『近代思想』復刊。16年、発禁続く『近代思想』廃刊、野枝と交際、保子と別居、神近市子に刺される日蔭茶屋事件、保子と離婚。17年、野枝との関係で孤立。18年、野枝と『文明批評』創刊、労働運動研究会発足、『労働新聞』を和田久太郎、久保卯之助と創刊、大阪で米騒動に遭遇、『労働新聞』廃刊。19年、労働運動研究会と北風会合同。

19年5月、尾行巡査の監視法に腹立って抗議し、巡査を殴った事件があり、不問されていたのが傷害事件として蒸し返され、7月に東京監獄未決監に収監、20日間ほど拘置、罰金50円の判決で保釈。画家の林倭衛の「出獄の日のO氏」はこの2日後に描かれています。

東京監獄未決監から初めての伊藤野枝宛(1919年8月1日)、南京虫や蚊、蚤に悩まされて「来た三晩ばかりは一睡もしなかった」、「蚊帳の中に蚊が一匹はいつでも泣っ面をして騒ぐ男がだ、手くびに二十数カ所、胸に十数カ所、首のまわりに二十幾カ所という最初の攻撃の晩の南京虫の手創^{てきず}を負ったうえに、無数の敵を「無抵抗主義的に心よく迎えているんだ」、「監獄の御馳走なら、どんなものでも何の不平もなしに、うまくと言うよりはむしろ心地よく食べる」、最初は大便が二日か三日に一度しか出ないが、一日に一度と規則正しくなると、「すっかり監獄生活にアダプトしてしまうのだ」と何やら嬉しそうに伝えています。

監獄の寒さ

10月、『労働運動』創刊。12月、懲役3カ月の判決で東京監獄、中野の豊多摩監獄へ、4度目の下獄。野枝宛(1920年1月11日)、「寒気凜冽、そろそろと監獄気分になってきた」、終日震えながらも、朝晩の冷水摩擦と屈伸法で、風邪ひとつひかない、仕事はマッチの箱貼りなどと近況を知らせています。監守長から下獄した翌日に野枝が女子を産んだと聞かされ、子供の名は思い浮かばないので、野枝に一任すると伝えています。

野枝がこの子の名を、かつて翻訳した『婦人解放の悲劇』の著者で、アメリカのアナキストのエマ・ゴールドマンの名から、エマ(後、幸子と改名)と名付けます。

野枝は栄宛(20年1月31日)で、「私は苦しくて本当に何と云っていいのかわかりませんでした。痛んで来るごとに、私は眼をつぶっては頭の中一ぱいにあなたの顔を見つめて、じっと自分の胸を抱いては苦しみを忍んでいました。すると二度ばかり不意にひどい痛みが来ました。本当に目がくらむようでした。すると、三度目に子供は出たのです。後の経過は大変いいのですからご安心下さい」と伝えています。

野枝宛(1920年2月29日)、大雪が降り続いていましたが、急に晴れた、「豚のご馳走で昼飯をすまし、「頭から背中まで一ぱいに陽を浴びながら」手紙を書いています。「監獄の寒さ」は皮膚がヒリヒリするくらいではなく、「肉の中までも、骨髄の中までもえぐられるような痛みなのだ。じっと坐っていて、手足の皮と肉との間がシンシン痛む。膝からモモにかけての肉がヒリヒリ痛む。顔の皮膚がひんむかれるようにピリピリする。頸から肩にかけて肉と骨が突き刺さる」と身体の心底から悪寒に襲われています。

そこで、屈伸法で「しっかりと腕ぐみをして(中略)全身の力をこめて腹をふくらます」、軽い下痢が続いたが直ったが、この屈伸法は霜焼けにはきかない、とやや苦情を述べています。それでも、運動場の菜の花だけに「監獄でシンパシイを感じた」、「飯時を待つより外に、何の欲っ気もなく

なった」、暑さ寒さも彼岸までと言うが、彼岸の中日の翌日「放免の日だ」と待ち遠しそうに知らせています。

フェアブル『昆虫記』の耽読

フェアブル『昆虫記(一)(昆虫の本能と習性の研究)』(叢文閣、1922年)の「訳者の序」に、翻訳の経緯を記しています。獄中の冬の寒い間、旅行記でも読んでみようかと思って、丸善に行って探すと、クロポトキンの先輩・友人の地理学者で、無政府主義者エリゼ・ルクリュの『新万国地理』第七巻『東部亜細亜』、ダーウエンの『一博物学者の世界周遊記』、ウォーレスの『島の生物 動植物の世界的分布』などがあり、「こんな本で世界中を遊び廻るのも面白かろうと思っているうちに」、偶然、フェアブルの『昆虫の生活』に出遭った。そんな本を20冊ほど抱えて、中野の豊多摩監獄へ入った直後、フェアブルの『昆虫記』英訳書が五冊差し入れされ、「とても面白くて、世界漫遊どころでは」なく、読み耽ったと記しています。

出獄後、この『昆虫記』(全10巻)を翻訳し始めます。22年8月に第1巻が出版されましたが、ほぼ1年後、虐殺により、未完に終わってしまいます。奈良県立図書館には、1924年(大正13)発行の第6版があります。奥付の裏には大杉の『無政府主義者の見たロシア革命—付録 革命の研究(クロポトキン)』の広告が出ています。野枝宛(1922年11月10日)に「『昆虫記』も大へん景気がいいそうだ。再販の用意に誤植の直しをしてくれと言っていた」と福岡の今宿

に帰郷している野枝に知らせています。

在日朝鮮人・中国人の動向

日清戦争後の朝鮮や1907年の第三次日韓協約締結、韓国併合以降の義兵運動、反植民地闘争には、関心を懐いて連帯してこうとする動きはあまりなかったようです。だが、東京朝日新聞社にいた石川啄木が「日本無政府主義者陰謀事件経過及び付帯現象」(『啄木全集』第四巻、筑摩書房、1967年)に、1910年8月29日、「韓国併合詔書の煥発と同時に、神戸に於て岡林寅松、小林丑治外二名検挙せられ、韓人と通じて事を挙げんとしたる社会主義者なりと伝えへらる」と記しています。啄木は新聞社で情報をえたのしょう。

大杉栄が活躍する1914、15年頃、になると、朝鮮や中国の社会主義者・無政府主義者との交流・連繋が見られるようになります。やはりロシア革命・コミンテルン(第三インター)の影響によるのでしょうか。内務省警保局の「特別要視察人状勢一斑」では、「巻五」の1914年から「朝鮮、台湾、樺太又は関東州在留者の部」の章が設けられ、これらの地域に滞在する、特別要視察人の名前や人数が載せられています。

「巻六」に、「未だ著しき事実を認むるに至らず。今日迄に於ては只僅に大阪在住横田宗次郎一派と在日鮮人鄭泰信(巻八に、泰信は別名で、泰玉と判明したとある)一派との接触したるの事実あるのみ」と報告されています。横田は1914年に福岡から大阪に転居し、大杉栄や荒畑寒村と通じて、長谷川市松とともに大阪砲兵工廠の職工に対し

て「主義を注入せんと企画し」、「煙俱樂部」を組織して、機関誌『煙』を発行していました。鄭は東京の「在日鮮人」羅景錫から長谷川に宛てた紹介状を持って移住し、横田と交際して、「朝鮮人親睦会」を組織した、と報告されています。

大杉・堺の在日鮮人・中国人との連帯

「巻八」には、大杉が李達の雑誌『東亜時論』に「主義鼓吹の記事」を起稿した事、また東京在住の「排日思想」を持つ金孝錫は関釜連絡船で下関に着き、東京へ行ったが、「同国人」に連絡船の一等と二等の船室を見て、「社会主義の心を起さゝるを得なかつた」、「今日或る一部の人は財産の平等を計れるも時期未だ早し、今は只社会主義鼓吹の時代なり」と話した、と報告。

「巻九」には、多く報告されています。李達の雑誌『革新時報』1918年10月発行は「朝鮮に対する政治を非難し、排日思想を鼓吹する記事を掲げ」発売禁止、高島大円「強者と弱者」を寄稿、「鮮人を日本に同化せしむるの策に付論述せる記事」。同誌12月発行に、堺利彦「世界の大勢と民族の覚醒」を寄稿、「戦乱当時及媾和時期に於ける小民族の覚醒を云為せる記事」。

李達は宮武外骨の主催した「民本主義宣伝政談演説会」に出席し、宮武に賛同する演説。宮武は日本民本党を組織し、『民本主義』を発行して、「朝鮮人を誘致せんと試み」、朝鮮基督教青年会館を訪問し、学生に「民本党は朝鮮に自治権を与ふるに、極力援助せんとするものなり」と語るが、学生たちは「独立運動の外は鮮地に於ける

運動の氣勢を阻害する」と耳を貸さなかつた。宮武は李達に演説会開催を知らせると、李達が訪れ、宮武の持論を受け入れて、演説した。李達その他「鮮人」二名が19年8月の大杉栄の傷害被告事件裁判を傍聴した事も報じています。

北原龍雄は18年12月に大阪に行き、玄佐健(17歳)を連れて帰り、堺の売文社の受付などの雑務をさせています。玄は翌年、朝鮮に帰還。朝鮮基督教青年会館では、朝鮮学友会編集部主催の「各学校連合雄弁会」を開催。早稲田大学の韓泰源は「不平なる社会と社会主義」、明治大学の李春均は「我等の生活に対して奮闘せよ」、また同会館で高等商業学校同窓会主催の「各学校留学生連合雄弁会」で、慶応大学の「要視察朝鮮人」金範寿は「共産主義」と題して演説しています。

1919年、朝鮮では三・一運動(万歳事件)が起こり、崔南善の起草した独立宣言書が出されました。東京では、留学生の全朝鮮青年独立団が留学生大会で、「二・八宣言文」を出し、「大韓独立万歳」を叫んだが、これは「巻九」には報告されていません。

東京在住の「排日鮮人」「要視察朝鮮人」韓光洙(一名、世復)は18年、名古屋で朝鮮人参を販売していたが、「自分は無政府主義を奉し、主義に為に活動するものにして、身体は自由は束縛さるゝも、主義は何人にも束縛せらるゝものにあらず」と語っていました。

19年4月、韓は名古屋で松井広文の『大公論』(1914年創刊)に副社長・記者として入社し、「亡民独語」と題した「不穩過

激の記事」を掲載し、新聞紙法違反として処罰されました。「苟くも新天下、新国家、新社会を建設せんと志す天下の青年諸君は、我と共に先づ／＼旧天下、旧〇〇〔国家〕、旧社会を破壊せようではないか云々。ハンガリーの〇〇〇〇、朝鮮〇〇〔革命〕運動、印度擾乱を軽視する勿れ。世界は〇〇〇〇せんとしつゝあるので〇〇〔はな〕いか、〇〔否〕な一度は〇〇〔滅亡〕せねば真の人類の恒久的平和、人生の全体的幸福は来るものでない」と記し、「朝鮮は威嚇的に征服せられたるものにして、吾等朝鮮民族に自由を与ふるか、然らずんば死を与へよと述べ、且今や朝鮮は武断政治の威圧に依り、非人道なる待遇を受け、「革命権」と「死」あるのみなりとの意味を記せり」と報じられています。松井は19年11月に名古屋の万松寺で大杉一派と労働者大会を開催しようと計画し、大杉栄や和田久太郎、横田宗次郎、韓など10数名が大公論社で会合したが、警察によって中止させられています。韓や松井は大杉と連絡したアナルコ・サンディカリストだったようです。

19年3月下旬、堺利彦が「現今、朝鮮国民の暴動及支那媾和委員等の言動に対しても得て、怪しむに足らず。若し吾国か他国に掠奪せられたりとせば如何、国民は之を黙視すること能はさると同様なればなり」と、ある人に語ったと記録されています。ここではあまり論じる余裕はないのが、洋の東西を問わず、国際的な連帯を射程に入れたイデオロギーを構想し実践しようと模索していたのは、おそらく大杉栄であったのでしょう。

闘い続けよ

セリーヌ・ディオンの最後の歌 'I'm Your Angel' (R.Kelly とデュエット) です。

And when it's time to face the storm / I'll be there by your side /
This place will keep us safe and warm / And I know we will survive /
And when it seems as if your end is drawing near / (end is drawing near) /
Don't you dare give up the fight /
Just put your trust beyond the sky

大杉は闘い続けてきました。当然、終わりが近づいている事を知りません。いわば災害ユートピア／ディストピアの真只中に殺されます。その前にパリに跳んで、越境者として、ひと冒険しています。

フランス行

大杉のフランス行は関東大震災前、1923年8月に執筆し終えた『日本脱出記』（アルス、1923年）に記されています。1922年2月、大杉はアナキストの国際大会に出るためにフランスへと航路で渡ります。大会の延期などで鬱々として、5月1日、サン・ドニの労働会館で催されたメーデー集会で演説して逮捕されました。フランス共産党とアナキスト同盟の共催です。大杉は日本のメーデーの話をしました。

「日本の労働者はメエ・デエの何んたるかはよく知つてゐる」「公園や広場や街頭での示威運動だ」「日本のメエ・デエはお祭り日ではない。〔三十四字伏字〕」「〔八字伏

字] 飛ぶ。[七字伏字] 光る。」などと多少誇張して語ったと言います。その後、「外へ出ろ、外へ出ろ」という叫び声を聞きながら、デモは禁止されていたが、外に出たところ、私服警官に拘束されます。近くの警察署に引っぱられ、3,400人の労働者が奪い返しに来て、「インターナショナル」を歌い、抗議の叫び挙げ、警官と乱闘になっています。

のどかなラ・サンテ刑務所暮らし

大杉はラ・サンテ刑務所の未決監へ送られます。8畳間くらいの広い独房、窓は大きく明るい、高い塀には白い花を咲かせたマロニエの梢が見える、ベッドも毛布もいい。看守が煙草を含む日用品と食品を記した紙をテーブルの上の壁に貼り、それには1週間の毎晩の献立表も出ています。大杉は早速看守を呼んで注文しています。普通のレストランのボーイのような青年が来て、メニューの小さな紙切れを見せ、昼飯を注文しろと言う、10品ばかりから4品選んで、「白葡萄酒のごく上等な奴をと贅沢」し、「すっかりいい気持になってしまった」。白葡萄酒をちびりちびり飲み、4品を平らげ、デザートチョコレートを飲み、寝台で葉巻を燻らせていると、家の事、娘の魔子を思い出しています。この時が下戸の大杉の酒の飲み初めです。

「魔子よ、魔子／パパは今／世界に名高い／パリの牢やラ・サンテに。(中略) おみやげどっさり、うんどこしょ／お菓子におべべにキスにキス／踊って待てよ／待てよ、魔子、魔子」、これを大きな声で歌っ

ていると、「悲しい事はなかったのだが、そうして歌っていると涙がぼろぼろと出てきた。声が慄えて、とめどもなく出てきた」とセンチメンタルな心地になっています。

所持金がなくなると「牢やの御馳走」、朝は味のない子供の頭くらいの大きな黒パン、アルミの丼に塩味の薄い色の湯に人参の切れっ端やキャベツの腐ったような筋が二つ三つ沈んでいるスープ、午後3時か4時、同じ丼に豆の煮た物、次の日はじゃが芋の煮た物、その次の日は堅くて食えない牛肉の入った米のお粥といった物、好物の豆や芋以外はろくに食べなかったが、腹が減って仕方なく、完食するようになり、それでも腹が減って水道水をがぶ飲みしていた、とやけ気味に述べています。

獄中では読む本もなく、寝床で寝ています。日本の監獄と違って、看守はめったに覗きに来ない、朝晩の点検もない、「看守されているんだというような気持はちっともしない。本当に一人きりの、何の邪魔するものもない、静かな生活だ」、だが寝てばかりいられない、時々起きて室の中をぶらぶらする、その時「僕の呑気な空想を助けたものは」壁の落書きだったという次第で、落書きを羅列しています。大杉自身も「Anarchiste japonais (日本無政府主義者)」が5月1日に逮捕されたと落書きしています。

公判では禁錮3週間の判決、未決拘留の期間で満期となり、翌日、釈放。そして、即刻国外追放の命令。マルセイユに行かされ、野枝や子供に土産をどっさり買い、日本郵船の箱根丸で帰還。林倭衛宛(1923年

6月19日)、「マルセイユを出るとすぐ買った白葡萄酒の一瓶が、まだ半分と少ししか減らない。ポートサイドで買いこんだ煙草もこの四、五日はちっとも減らない」と伝えています。林は大杉の虐殺後、「仏蘭西監獄及法廷の大杉栄」を『改造』(1924年6月号)載せています。

7月、神戸に入港し、野枝や魔子などが出迎え、須磨の旅館に泊まります。翌日、大杉は東京駅に着くと、800人を越える群衆に凱旋將軍さながらに歓呼の声で迎えられます。だが、2ヵ月も経たずに、野枝、甥の宗一と共に虐殺されてしまいます。大杉は獄中で大いに奮起して、読書し学問をし、出獄後には大いに書きまくりました。そして、無惨にこの途上で殺されました。大杉は無念だったでしょう。まだ怨みを抱えて、この世をさまよっているかもしれません。大杉の霊を呼び出せるなら、残念無念を残さず吐露させて、弔いたいと思いましたが、それは無理です。だが、多くの言葉を残しています。

自由発意と自由合意との稽古

なによりもまず、いつでもまたどこにでも、みんなが勝手に踊る稽古をしなくちゃならない。むずかしくいえば、自由発意と自由合意との稽古だ。／この発意と合意との自由のないところになんの自由がある。なんの正義がある。／僕らは、新しい音頭取りの音頭につれて踊るために、演説会に集まるのじゃない。発意と合意との稽古のため

に集まるんだ。それ以外の目的があるにしても、多勢集まった機会を利用して新しい生活の稽古をするんだ。稽古だけじゃない。そうしていたるところに自由発意と自由合意とを発揮して、それで始めて現実のうえに新しい生活が一步一步築かれて行くんだ。／新しい生活は、遠いあるいは近い将来の新しい社会制度の中に、始めてその第一歩を踏出すのではない。新しい生活の一步一步の中に、将来の新しい社会制度が芽生えて行くんだ。(「新秩序の創造」1920年)

最近、「幽霊アーカイブ」(phantom archive)という言葉に出会いました。「伝統的な美術史のメソッドとは対照的に、この〔闘争の〕文化形態や可能性の蓄積は、私が「幽霊アーカイブ」と呼ぶもの、つまり過去の介入、実験、成果(成功したものもあるが、大半は失敗に終わったもの)を断片的に保管する貯蔵庫となっている」(グレゴリー・ショレット『アクティビズムのアート／アートのアクティビズム』秋葉美知子訳、フィルムアート社、2025年)という事です。生きている死者の貯蔵庫といったところから、「ゾンビ・アーカイブ」と呼んでもよさそうです。大杉の芸術的文化・政治闘争の集積は、こうしたアーカイブの一翼を担っていよう。

(つづく)

(かわむら くにみつ 文筆業)

石と証 (六)

AI と書くこと、あるいは、「想像の果て」の前後について

沈 恬恬

1

ところが、「俱に運命の出来事の意義を書き直す」と、そう宣言したはずの私の指先は、しかし AI という万能の補助線を前にして、皮肉にもその力を失っていった。思い起こせば、少なくとも 2023 年 11 月、「価値と事象の社会科学」の論集への執筆オファーを頂いたときは、すべてがまだ理論整然として見えていた。あの頃の自分はこう高を括っていた。

まず、これは学振の研究テーマに関するひとつの「業績」として残す好機であるし、「測ること」の方法論としても「最先端」である AI の話題を取り上げれば間違いないだろう。次に、「AI に対する課税」の議論は既に蓄積があるため、「AI による課税」といった言葉遊びを展開し、締め切りまでにあと少し何かを足せば、論文は形になるだろう。それに、直に海外調査にも行けるので、「あと少し何か」の素材も EU 論や中国論でごまかせる一いや、見た目よくまとめられる、と。

もちろん、その後の流れも順調であった。2024 年 2 月末から 3 月初旬にかけて、フランスへ渡り、租税・財政・先端医療関係の研究者と交流を持てた。そこでは、AI その

ものというより、「データ」の問題こそがフランスや欧米の研究における重要な論点（租税分野において）であることが分かった。また運よく、ほぼ同時期に、東亜研究の雑誌の研究会にも誘われ、そこで「AI による課税」に関する中国のガバナンス論の部分を予習報告する機会も得た。

しかし、まさにこのような研究交流を楽しんでいた頃、生成 AI の進化もまた凄まじい速度で進んでいた。2024 年春ごろ、当時一番親しくしていた経済・財政学の研究グループのゼミで、「どの生成 AI が『バカではない』か」という議論があった。経済学、とりわけ計量経済が重要視される近年の風潮において、計算式の出力や論文で使えるデータの分析・グラフ化といった作業を、いかに短時間で完成させるかが論文の「産出量」に直結している。また、ほぼ全員が中国人留学生によって構成されたゼミであったため、日本語のチェックや英語文献の日本語訳といった作業においても、ネイティブの日本人学生の TA よりも、「効率的な手」が必要とされていた。教員はゼミ生に対し、生成 AI モデルごとに異なる効用を丁寧に解説し、それらを使いこなせるようになれば博士課程の論文のノルマの克服などは楽勝である、という夢を与えて

いた。問題は、無料プランか有料プランかによって、AIの「賢さ」が変わるということだ。そこは、経済力のある教員はそもそも最上位ランクのものを使用しているため、「『Pro』による指導」の一環として学生の論文のチェックはできる、という理屈になっていた。

そのグループの惜しめない情報共有の熱量につられて、私もそこで厳選されたふたつの生成AI (Claude と Perplexity) の有料プランを導入した。確かに、脳内から分泌されるドーパミンの量は半端なものではなかった。すでに収集した資料の翻訳と整理が瞬時に終わるだけでなく、図書館系列のDBにない最新の論文やニュース記事が、次々と発掘できたのだ。他方、学振の研究テーマのフィールドが中国であることとも関連し、毎日のように、AI搭載の検索エンジンである WeChat アプリを通じて中国語の資料を探していた。当然、その「押し」も心地よく受け入れていた。さらに、落合陽一のYouTube番組や生成AIとの対話術のノウハウ本を参考にしながら、見つけた資料をPDF化してはAIに読み込ませ、AIと「対話」をしつつ、論点の整理・推敲を行っていた。半年間、私はまるで機械のように一いや、実は機械的に一三つの研究会発表、ひとつの学会発表の原稿 (レジュメではなく論文形式)、そしてひとつの論文を完成させた。

これらの「業績」は、どちらと云えば、「社会科学」に分類される、分かりやすく「説明的」なものであり、「手際よくまとめたもの」になっていた。しかも、異なる分野

に関する内容にもかかわらず、AIとの協働によって短時間で生産されていた。言うまでもなく、AIに指示を出した私自身に「アイデア」がなければ、これらの「形」は生まれてこない。だが、形作ることがあまりに安易すぎたのではないか、という危惧も薄々と覚えていた。

そして、9月頃、漸く、この論文に本格的に取り掛かる段階に至った。その頃には、標準的な論文を作成するための生成AIの訓練が一通り済んでいて、「これぐらいの量の資料なら、これぐらいの時間で、これぐらいのレベルの文章が書ける」という目安も掴めていた。いつもの通り、PDF化したいくつもの資料を、Claudeにアップロードし、「対話」を始めた。Claudeはレビュー的なまとめを上手にやってくれる。英語資料の翻訳能力もずば抜けている。だが、どうしたことか。「対話」は、いつものようにうまくいかない。自分の心の底から、正体不明の「雑音」が聞こえてくるのだ。

もし、研究行為の中身が、ますます科研費申請のフォーマル言語のように変質したらどうなるのか。テキストの統計的パターンからトレンドをまとめ、結果的に何ひとつ改善されない「問題」を指摘し、考察し、分析し、明らかにしたところ、造語として新たな問題に転嫁し続けるという循環になればなるほど、研究は「AI的な作業」そのものになっていく。このような「進化」のプロセス自体は、もはや止められないだろう。むしろ、ヴィトゲンシュタインが述べたような、共同体的な身体性・経験性・社会性を帯びた「言語」そのものが、データ

ベースという別の共同体において、デジタル・数値化・数式化されつつあるのだ。この意味において、私とずっと「対話」をしてきたこれらの言語モデルは、確かな言語でありながら、本質的には非言語的な数理言語である。にもかかわらず、それらは人間以上に言語を操る言語として振る舞い、同時に「研究」という営み自体を非言語的な領域へと吸収していく装置と化している。興味深い現象ではあるが、私にはこのゲームをプレイし続ける必要があるのだろうか？

だが、さしあたりはまだやめられない。AIを研究対象とした以上、暫定的であれ何らかの結論を出さなければならないからだ。この義務感は、研究者、あるいは、論集の執筆者という社会的身分と、そこに組み込まれたルールからくるものであった。ただ、妥当な結論は本当にまったくわからない。論集の「価値を測ることをいかに考えるか」という主旨に関連付けて言えば、論文を書けば書くほど、研究の価値、言語の価値、そして人間の価値、それぞれの輪郭が、AIとの対話のなかで途轍もなく曖昧なものとなっていく。

2

2025年1月の末日に、この論文の最終稿を提出して以来、学術的な話題を避け、文章を書かない日々がしばらく続いていた。できるだけ、高度な言語的能力を要する作業や、その能力を拡張・補助する生成AIと距離を置いていた。春に、(いずれはAIに代替されるであろう)単純な書類整理の事務のバイトを見つけ、ホットな話題もなく、

最新の情報も追わず、シンプルで静かな生活を始めた。「果て」まで行ったからといって、いわゆる「燃え尽き症候群」になったわけではない。ただ、この論文を通じて自分は何を書きたかったのか、もっと言えば、自分は研究ライフにおいて、一体何を目標として書こうとしてきたのか、霧のかかったような視界不明な状態にあったのだ。振り返ることすら、怖い。

出版社から原稿の注釈確認と校正のスケジュールの連絡があった5月の連休明け、私は大阪の歯科医院で、この論文を引き受けてからずっと気になっていた右下の親知らずの抜歯を決めた。横向きに生えた厄介な歯だ。三度目の正直だった。東京の二箇所病院に予約をいれていたが、毎回なぜか怖くなってキャンセルしたのだ。ところが、7月の手術の当日になって、私はまた怖気づき、椅子の上でもう一度医者を確認した。

私：「先生、これは絶対抜かないといけませんか？」

医者：「じゃ、逆に聞きますが、抜かない今、シンさんはどんなことで困っているのですか？」

私：「食べ物がつまるし、疲れたら歯の全体が痛くなります。」

医者：「それらは抜歯によって全部解消しますよ。ほかに心配していることはありますか？」

私：「うん、出血と、痛みです。」

医者：「出血は処置できます。歯を抜く時は麻酔をかけますから、痛みは感じないはずですよ。抜歯後も痛み止めは処方しますよ。」

私：「えーと、どれくらい時間がかかりますか？東京の病院では1時間かかることもあるとか言われましたから。」

医者：「シンさんはどれくらいなら耐えられますか？」

私：「15分が限界です。」

医者：「それでは、15分以内で丁寧にやります。」

明らかに、医者は私をからかっていた。あるいは、子供のように私の恐怖心をあやしていた。仕方がないと死ぬ覚悟で目を閉じたが、5分も経たないうちに、「人生の宿題」は見事に片付けられていた。その日の夕方、麻酔が切れる前に痛み止めを飲むついでに、手鏡で歯茎にできた黒い血餅をじっと見つめながら、私は考え込んでしまった。

マクルーハンとは、鏡というメディアを前にしたナルシスの神話を引き合いに出し、テクノロジーによる身体の「拡張」は、同時にその部位の「麻痺」をもたらすと論じた。ナルシスは、水面に映る像が自分自身の拡張であることに気づかず、その完全な似姿に魅了され、感覚を失ったからだ。もしかしたら、私があこの半年間味わっていたドーパミンによる陶酔は、この「麻痺」であったかもしれない。私は、AIという鏡によって拡張された、恐ろしく効率的で流暢な「私の知性」の幻影に恋をしていた。

では、なぜそのような幻影を必要としたのだろうか。任期内に作り上げなければならない「業績数」という暗黙のプレッシャーはあった。経済学研究と異なり、法学研究では共著論文のスタイルがまだ少ないの

で、他の研究者という人間ではなく機械の手を借りる発想に至らざるを得なかった。所詮、経済も研究もAIバブル期にある今、研究対象や研究の方法論（ツール選択）がそこに帰結することに、罪悪感を覚える必要はないだろう。

問題は、おそらく恐怖心という問題の解決に使える時間を「1時間」ではなく、「15分が限界」と制限するところにある。つまり、恐怖に耐えることができないことへの恐怖だったのだ。言い換えれば、それは、社会科学的な「理性的分析」を断固遂行することと裏腹に、思考が躓くことによって生まれる「摩擦熱」ともいうべき、人文科学的（もしくは、人間的？）な「揺らぎ」への渴望を持つこと自体に対する恐れだった。だから、本来の思考が伴うはずの苦痛や遅延といった身体的感覚を「社会科学」というカテゴリーのフィルターを通じて、切断しようとしてきた。そして今、「麻痺（麻酔）」が切れかけ、切断されたはずの神経が痛み始めている。あるいは、研究の世界に充満している「耐えられない恐怖」を消そうとする欲望そのものへの恐れを、感知したのだ。

ところが、もし、耐えられないから効率化して逃げることに、適宜に麻酔を使い、恐怖を忘却しつつ前進して諦めることが、恐怖から目を逸らすための身振りであるとするならば、あえて抵抗の美德を提唱して耐えることも実は妄想の一側面にしかすぎないのではないだろうか。

3

論文の最後を、私はあたかも「人文科学への回帰の宣言」であるかのように締めくくった。けれども、私は決していわゆる伝統的なヒューマニズムの擁護者ではない。人間のなかの機械的な部分や、言語に潜む生成可能な規則、そして研究における「創造」ではない作業の部分の「正しさ」を、これまでの研究の経験によって知らされているからだ。まして、まさにこれまでさまざまなツールによって拡張された身体のまま生きていかなければならないAI時代においてこそ、もう回帰できるホーム（故郷）など存在しない。物理的・住民票上の移動によって「過去の場所へ帰る」ことは一見可能に見えるし、お隣さんと「昔のように」一杯飲むこともできるだろう。だが、その「過去」にアクセスするプロセス自体が、以前とは決定的に変容してしまっているのだ。

かつて、私がまだ「情報」をたんなる「意味」という意味としてしか認識していなかったとき、隣人と酒を酌み交わす行為は、その場の空気、身体の疲れ、共有された沈黙といったアナログな「情報の総体」だった。しかし、いまの自分の認識のレイヤーには、常によりデジタルな参照項が滑り込んでいる。目の前の対話の意味を検索可能なデータとして捉え、感情の機微さえも、（占星術的な？）パターンとして「翻訳」しようとしている自分がある。私は、周りの世界を「解像度」で記述する癖を覚えてしまった。私の周りの世界もまた、一緒に見た満月がきれいだったという事実よりも、

iPhoneのカメラなら、あの時の満月がこんなにきれいに撮れたか、という「性能」へと話題をシフトしていく。「あの時の満月」とは、9月に、低コストでありながらも、驚異的な性能を有するDeepSeekを生み出したAI超大国、中国で見た月のことだった。

満月を見たその日、会議通訳の身分で参加した歴史研究というもともと古典的な人文科学のジャンルに属する国際シンポジウムの中では、司法鑑定とAI技術を活用した画像マイニングの研究報告があった。その研究の目的は、寄付された上海フランス租界の写真の撮影者が実在した人物であるか、当該写真が偽造されたものか否か、そしていずれの写真がその人物によって撮影されたものを特定するというところだった。私はそこで、まるでミステリー小説を読むようなワクワク感を覚えた。物としての写真に対する司法鑑定とテキストとしての写真に対するAIの分析が、曖昧な過去の輪郭をくっきりと確定していくプロセスに、カタルシスさえ感じたのだ。

ところが、それと同時に、なんとも言えない喪失感もあった。自然科学や社会科学はともかく、肉眼でははっきりと見えなかった「過去」から確定的な事実を取り出せるようになった、この解像度が極限まで上がった人文科学の世界においても、少しずつ、「想像の余地」、すなわち、歴史に対する読み手の介入の可能性を縮小させているのではないか。真偽が判定され、撮影者が特定され、すべてが明白になったとき、その写真の向こう側にある無限の物語を夢

想するという「無駄なこと」も、否応なしに退場させられてしまう。要するに、「人文学の危機」は、実証の方法そのものではなく、実証で得た事実の後にさらに広がる無限の解釈の領域が、「研究の目的」の規定によって、見失われていくことなのではないか。しかし、この無限の解釈の領域を言語化するとき、私たちはいかなる言語を用いるべきか？

4

私は当初、「想像の果て」という言葉で、AIが描き出す完璧なシミュレーションの地平とその物理的な崩壊のことを意図しようとしていた。が、途中から、自分自身と学術研究のAI化の傾向に耐えられなくなり、すべてを効率とデータに委ねて思考停止に陥った地点のことを指してもいいことに気づいた。その瞬間、私は、ベンヤミンの「歴史の天使」が見つめていた「過去の廃墟」が、バウマン的な解釈のアンクルを通して「未来の廃墟」として眼前に立ち上がったかのように思え、戦慄をも覚えた。

もともと、ベンヤミンは、「引用のみで構成された」『パッセージ論』を通じ、言語の救済を試みていた。そこでは新聞、広告、文学、政治声明といった断片が、テーマごとに緩やかに配置されている。ベンヤミン自身の筆致は、解釈というよりも微妙な介入とでも呼ぶべきものであった。引用と引用の間に差し込まれた一言が、それまで不可視であった連関を不意に照らし出す。彼はこの方法を「文学的モンタージュ」(『パッセージ論』Na1,8)と呼んだ。

これに対して、AIの生成テキストを編集する私の行為は、一見すればこのモンタージュに似ている。ウェブ上の無数の断片から成る出力を、私が配置し、介入するからだ。しかし、両者の間には決定的な深淵がある。ベンヤミンが扱った1830年代のパリの案内書、ボードレルの詩、社会主義者の声明といった断片は、具体的な「時間」と「場所」を宿していた。それらは、十九世紀という「夢見る時代」の堆積物であり、廃墟であった。引用者ベンヤミンは、その廃墟のなかを「遊歩」しながら、断片と断片の間に潜む連関を発見していった。それは「覚醒の技法」でもあった。他方、AIの生成テキストには、「時間」がない。あるいは、「時間」が圧縮されて消滅している。データベースというゼロ次元の空間で、無数のテキストが統計的パターンへと還元され、「もっともらしさ」という確率によって再構成される。そこには、ベンヤミンが「パッセージ」に見いだした十九世紀パリの覚醒と夢、生と死、聖と俗の境界といった「敷居」が存在しない。

「敷居というものは、境界線とはっきり区別されねばならない。」(『パッセージ論』O2a,1)とベンヤミンは書いた。敷居とは変容と通過が生起する領域であり、対する境界は運動を停止させる限界にすぎない。敷居の経験、すなわち「パッセージ」の経験こそが経験の純粹な形態であるならば、そこでの貧困化は、経験する能力そのものの喪失を意味する。AIとの「対話」において、私は何を「通り抜けた」のだろうか。プロンプトを入力し、出力を受け取り、編集し、

また入力する。その循環のなかで、私は何かを「経験」していただけるか。あるいは、ただ「境界」のこちら側に立ったまま、「敷衍」を渡ることなく、「結果」だけを受け取っていただけであるかもしれない。思えば、「石と証（二）」で言及した「翻訳者の使命」の比喻も、ここで響いてくる。翻訳と原作の関係は、接線が円に束の間接触するようなものだとベンヤミンは言った。意味という無限に小さな点において、一瞬だけ触れ合い、そこから固有の軌道を描いていく。しかし、AIとの「対話」には、その「接点」すら存在しなかった気がする。データベースという次元の異なる空間では、「意味」は統計的パターンとしてしか現れない。そこには「原作の生」も「翻訳の生」もなく、ただ無限の組み合わせのゲームへと墮していく。

しかし、その戦慄を書き終えたあと、生成AIたちのベンチマーク競争のニュースを見て、奇妙な「覚醒」が訪れた。思考停止への抵抗すら放棄したとき、あらゆるロマンが退場した後の「呆気ない世界」も悪くないのではないか、ともがきながら思い至ったのである。それは、無知・学習・研究・信仰といったさまざまな意味づけがなされてきた、私の中の月が辿った満ち欠けの旅路にも似ている。確か、最初に月は、絵本に描かれたうさぎや仙女のやさしい象徴から始まり、やがて中国の古代の詩人たちの酒盃の底に沈む風雅な文字へと昇華した。そのあと、月はアポロが捉えた記念すべき人類の月面着陸写真に映ったクレーターの冷たい陰影に変身し、やがて、神秘を告げ

る占星術の予言へと書き換えられた。

けれども、あの9月の、何かを決定的に変えてしまうような「月食」を経て、月は死んだ。いや、徐々に、生まれ直していくのだ。今夜の私の網膜に映るそれは、もはや詩でも科学でもない。あらゆる物語と解説を脱ぎ捨てた、ただの・・・そう、ただの、白く滲んで、輪郭の定まらない、「光」にもならない、頼りない塊へと還元されるようになった。そして、この頼りない無垢な存在感こそが美しい。(つづく)

追記：本稿は2025年12月10日の「火曜会」にて発表した内容に一部加筆修正したものである。なお本稿は、シリーズのこれまでの回と異なり、ベンヤミン・マクルーハン・ヴィトゲンシュタイン等の著作への言及において、AIとの「対話」のなかで引用・参照の意味そのものが問い直されるという本稿のテーマ上の判断から、出典注を明示しない形をとっている。

(しん てんてん 求道者)

見当

当たるも八卦 当たらぬも八卦 (5)

佐藤 博昭

2 再び、のんきに「表現する」を考える

(1) “No expression, no life.” ?

(a) 自問自答

わたしたちはだれでも夫婦、親子、兄弟姉妹など家族との生活のなかで、また、仕事を含むいろいろな社会的関係のなかで、無言のままに、ときにはことばによる会話や体の一部または体全体を使ったしぐさ(ときに相手から「暴力」とよばれる)によって、先のことも考えずに、場合によっては先の見通しをたててなにかを表現しているといえます。

そんなわたしたちのなかには、「表現する」を生業とし専門におこなっているひと、それによって糊口をしのいでいるひとが世界中におり、ひとびとにときに無言のままに、また、ことばによる作品、音楽、絵画、彫刻などの作品を創作、表現し、あるいは、ダンス、舞踏、演技などのパフォーマンスを披露しています。

わたしは、ここではこれらの会話やしぐさ、創作や披露すべてを「表現する」に括っています。

また、わたしは、わたしたちにとって「表現する」とは、みずからを光源として発せ

※文中の傍線は引用文を含め別に断りない限り佐藤によります

られた意志や意図、それがあたかも光がとどくかの如くにわたしたちにとって薄明、無明の世界、ときになお闇深い自分自身に達し、そして、その光がどれほど淡く静かなものであれ、光がとどいた先になみかぜを起こさないことはないということだと、どこかで思っているのです。それでは、このわたしのオプティミスティックな思い、たとえば、わたし自身の光源はどのように成り立っているのか、という問題は置き去りにしたままだ、という思いはなにによって支えられているのか。

わたしたちにはその光を受容するのであれ拒絶するのであれ感応する感覚がいつのまにかそなわり、みずから感情を育み、とどいた光の濃淡、騒静にかかわりなくその感情をたかぶらせ、しらせさせ、ときに、ことばによって論理を組み立てながら自問自答をくりかえし生み育てているのにちがいない、というオプティミズにオプティミズムをかさねる、どうしようもないなとどこかでため息をついている、そんな井の中の蛙だよとつぶやき声がある、そんな世界に支えられているにちがいないのです。

わたしは「表現する」を生業としていません。ただ、表現されたことば、作品やし

ぐさの放つ光の濃淡を読み、聞き、みる側に身をおきながら、つぎのように感じ、考えます。さて、これらのことば、作品やしぐさを、なぜ、わたしが現に見聞きし感じて印象を形成するのか、その印象は、わたしにはときにはかれら作者やパフォーマーら表現者の意図の如何や意志の有無とはわかりなく思えることもあるのだが、と。

わたしは、また、創作者、制作者やパフォーマーであるとは、自作品なり自分のしぐさの最初の特別な読者や観客として、みずから提出した表現の「なぜ」を四六時中考えつづけているひとだと思えますし、かれらなりの答えは「表現」としてとっくにあるのだとも思えます。とはいえ、わたしにとっては、かれらの問いとこたえにはまだ追い付いても追い越してもいないとか、すでに解決済みであるとかが問題なのではありません。わたしはわたしの問いを抱いている、問いが生まれかかえることになった、これが問題です。

ところで、「作品の成立」の考え方について、天沢退二郎（1936～2023 以下、天沢）はいいます。

作品は書かれるだけでなく、読まれることによってはじめて成立する。作者は最初の読者のようにも見えるが、作者が自分の作品を読むことができない、というのも真実の冷厳な一側面である。

（天沢編『新編 宮沢賢治詩集』新潮文庫 1991年「解説」407—408ページ）

わたしには、天沢が、他者が読むまでは

「作品」ではない、あるいは、読まれてはじめて表現が成立し、作品だといっていると思えます。ところで、これまで、詩人は自作の最初の読者であり、パフォーマーは最初のパフォーマンスの観客だと思ってきたわたしは、天沢のこのことばにととまどい、わたしの考えとは相いれないのかと考えています。

天沢は、書かれただけのことばならば、だれも見ることができない深い海の底の、海底流に次々に消されてしまい砂粒にしかすぎないというのでしょうか。たしかに、海の底に堆積している砂粒にも、その事情、歴史はあるはずだとは想像できますが、その事情と歴史をきちんとわかることができるのは海底の砂粒を手にとり調べたひとだけだとはいええます。ということは、天沢がいうのは、そのような「わかる」という関係の成立についてのことなのか。あるいは、「作品」を読んでみればわかりますよ、あなたは、その作品とどこで出会っているのかを知ればいいということですよ、というのでしょうか。

さらに考えれば、天沢の問いは、「書くこと」にかかわるひとにとって必然的な問いなのではないのでしょうか。書くひとにとって、自ら生み出したことばが誰も知らない海底の砂粒や、だれも手が届かない夜空に光るわけでもない星ではたまらないな、ということでしょうか。

ともあれ、厳格に考えずとも、天沢のいう「作品」が「成立」するまでのあいだで、読む側は書く側の情緒を味わい、論理を考え、事実、すなわち、書かれたことば以外

のことを詮索するという「反則手」をいくらかでも犯すことができます。そして、現に犯しています。これがわたしにとって「読み」であり「鑑賞」であり「表現」です。作品の成立はさておき、これは読み手の「ありえない」余裕というべきでしょうか。

(b) 認識と行為

作者とその作品やパフォーマーとそのパフォーマンスについて、わたしが、「なぜ」と考えるときとは、かれらの「表現」が、たった一言であれ、自分にすでにとどいていると感じ、自ら口に出さずとも、そのように思え、その表現に感動し、心動いた、あるいはしらけたとそんなことを思っているとき、あるいは、感じたまま口に出すなどして自分を表現しているときといえます。そのとき、わたしはかれらの「表現」によってみずからの現実（リアリティ）を感じているといえます。

つまり、わたしは、このとき、たしかに他者の「表現」した結果や成果がわたしたちひとりひとりに当の他者の「表現」とは別の、わたしたち自身の「表現」を生んでおり、また、その自己表現によってみずから抱いた「なぜ」の思いがけないひろがりや深みが「他者の表現」に対して一層の興味を持ち続けるきっかけになることもある、と思います。これらは「読み手」であるゆえにもつ認識ともいえましょう。

さらに、わたしは、わたしたちは他者がみずから専門とする分野で「表現する」のに接している以上に、日常の会話やしぐさあるいは動作によって表現している他者と

接している、とっていいとも思いつつ、しかし、この「日常」で接している他者の表現には、専門分野で表現するひとからうけとった「なぜ」に対面するときと較べるまでもなく、輪郭がはっきりせず、むしろ一層ぼんやりしているといっているところがあるとも考えています。

わが身をふりかえっていえることですが、日常生活にあつて、わたしはさまざまなことを相手への「自制」やら「配慮」から、あるいは自分に起因するとは限らない要因に対する意識、たとえば、「禁忌」と思うことによって、口ごもり、ことばを信じることもできぬまま発語し、発語を控えあるいはその場をつくろい、遠ざかるなどのしぐさや行動をとることがあると思うからです。

また、わたしたちは、その日常のなかで、これらの自分の言動や態度に対する自己了解ばかりでなく、了解留保、拒絶や無視さえその場限りになれずに引きずってしまいます。

わたしは、自分を表現することに関わるこれらの日常の態度は、自分と自分以外あるいは社会との関係の現われであり、そんなことならだれしものが人知れずころのなかで自問自答しながら繰り返しているだと思えますし、この自問自答は自分を表現していることにほかならないと考えています。そして、わたしは、その自問自答にはみずからある行為をすることそれ自体の是非なり可否に関する自分の判断がすでに含まれていた(いる)に違いないとも考えます。

また、わたしは、その判断に至る過程ま

では、これまでの生活上での認識や経験の履歴、記憶が介在し、いまの自分とこれまでの自分を繋ぎ、認識を再確認し、記憶を蘇らせ、あるいは切断、認識や経験の記憶を破棄し、わたしたちは継続する「自己」を主張しますし、行動したからといってそこに到った自問自答の過程が消滅することはなく、むしろ、記憶としてそれまでの記憶のいくつか（数えられるものならば）が更新、上書きされ、いつでも、まず、「いまの自分」が継続している、と思うのです。

ところで、自分の内部での自分自身に関わる表現(自問自答)と「外部」への表現(行動、しぐさ、発言)と、ひとつながりの表現であると思えますが、このふたつの表現のあいだに、わたしには、おおげさですが、表現するひとのこころのなかのなにか見えない溝、隙間あるいは落差とっていいものがありそうに思えます。また、ありそうに思えることとは、視点をかえて考えれば「読むこと」と「書くこと」のあいだの時空の差異のことなのかもしれません。あるいは、更新されつつある「いまの自分」と更新されてしまった「それまでの自分」になってしまった自分とのあいだの差異への気づきがあるためなのかもしれません。

見当には見当違いがつきものです。見当違いを証することになるなら、それはそれ。

(2) 宮沢賢治「心象スケッチ 春と修羅」の序の冒頭について

ここでは、宮沢賢治(1896～1933 以下、賢治)の『心象スケッチ 春と修羅』の序(大正十三年一月廿日)の冒頭、第一連を引用し

て前述の溝とか隙間、落差を考えてみます。

わたくしといふ現象は
 仮定された有機交流電燈の
 ひとつの青い照明です
 (あらゆる透明な幽霊の複合体)
 風景やみんなといっしょに
 せはしくせはしく明滅しながら
 いかにもたしかにともりつづける
 因果交流電燈の
 ひとつの青い照明です
 (ひかりはたもち その電燈は失はれ)
 これらは二十二箇月の
 過去とかんずる方角から
 紙と鉍質インクをつらね
 (すべてわたくしと明滅し
 みんなが同時に感ずるもの)
 ここまでたもちつづけられた
 かげとひかりのひとくさりづつ
 そのとほりの心象スケッチです
 (新潮文庫版『新編 宮沢賢治詩集』より)

この詩片はわたしが読むことによって、たしかに、わたしには成立しているといえるのかどうか。

さて、賢治はこの序を、妹トシの死のとき(1922年11月)から「二十二箇月」後(1924年1月)に書いたのでしょうか。ちなみに、詩集『心象スケッチ 春と修羅』の出版は1924年4月です。

① まず、わたしは引用部の中ほどにあることば、(ひかりはたもち その電燈は失はれ)によって、その前後の詩句を分け、前を賢治の「想念(認識)」、後を賢治の「行動(説明)」とするくらいの差がある内容が

ならんでことばによって表現されていると
考えています。そして、わたしはこのこと
ばからなぜか、(ひかりはたもち その電燈は
失はれ)の前では、賢治のせかされている
ようなタッチを、そして、そのせい、明
晰さよりはあいまいさ(不分明さ)を感じ、
その後では一息も二息も入れているような
安堵の賢治を感じます。

②「わたくしといふ現象は」とはじまる
前半部は賢治の生と死に関する想念(認識)
です。トシを死の世界に送ることなどでき
ない賢治は、ここで、生と死をわかつもの、
生死ふたつともその底でささえるもの、
生と死の両方を受けいれることができる基
盤を探し出そうとしています。

賢治はその思索の主体を「仮定された有
機交流電燈の／ひとつの青い照明」とし、
それが「仮定」であるということ「因果
交流電燈の／ひとつの青い照明」というこ
とばによってあらわし根拠づけみずからに
認識させようとしています。そこにあらわ
れているのは現象すなわち「有機」と、そ
の深化であり「有機」を包み込む「因果」
とのコントラストです。

賢治は、二度「ひとつの青い照明」とい
うことばを用い、この照明は青いゆえに「み
えるもの」(みることができるもの)というこ
とができるが「仮定」(理論)だといひ、そ
のうえで、みえるもの(色)はみえないも
の(光)あるいは因果によってできている
(あらゆる透明な幽霊の複合体)と認識できる、
というのです。

わたしは、賢治が「わたしは幽霊として
みえるものでもあるといえる」を「青い」

というみえる色によって表現しようとして
いると思います。科学者賢治は、ひかり(太
陽光)がさまざまな色の波長をもつことを
虹の生成理由やプリズムなどの分光器での
スペクトルによって知っていました。

「青い」とは有機交流電燈、因果交流電
燈に共通してもたらされるものです。賢治
は、人の命のいとなみの意味を自然界のい
となみの意味にまで拡張して生と死を統一
しうるかのような視点を得るとともに、ひ
とりひとりがもつ毎日のリズム、そしてそ
の一生でおきる変化や乱れを交流回路、そ
の電流になぞらえたのでしょう。これら
は、賢治がトシに、その死の現実に、死を
無化しながらむしろ近づこうとする動機に
よる、ということだと思います。ところで、
賢治の「青い」とはどんな色のひかりなの
でしょうか。

(ひかりはたもち その電燈は失はれ)の
「失われ」とはトシの死の直截な表現です。
この括弧内の詩句は妹トシの死の認識を記
しているとともに、その死によって人の生
のいとなみそのものとしての可視的で現実
的な光源はなくなっても「青い照明」では
なく、「あらゆる幽霊の複合体」としてみ
えないもの、すなわち、ひかり(因果)と
して引き続きトシはここにいる、と賢治は
いうのだと思います。

だからこそ、その思いをトシが「見えな
くなった」あとも「心象スケッチ」を書き、
賢治はみえないひかりによってトシとつな
がっていると感じようとしてきたといえま
す。賢治にとって書くことはトシを含む「自
然」といっしょにこころの明滅、動揺を正

直に感じようとしていることなのです。「せはしくせはしく明滅し」とは賢治のころの動揺、その自覚している揺れ幅の大きさのこととわたしは解釈します。賢治はトシの死を悲しむ、「悼む」ころを表現しようとしているということが出来ます。

賢治は(ひかりはたもち その電燈は失はれ)の詩句の前までに、悼む(痛む)行為と気持ち、「悼む」を受け入れようとする、まるで幼児返りしていると思わせるような、いや、無機質なイメージを思わせることばを選び、さらに遡ろうとする自分自身の存在の希薄さあるいははかなさをことばで表してトシに近づこうとし、動揺のさなかで、ことばによってころを鎮めようともしているように思います。

③「これらは二十二箇月の」とはじまる後半部は、1922年(大正十一年)11月の妹トシの死を悼むころとそれ自体を引受けると決めた賢治がその心を持続していることを明かすことば、とわたしには思えます。悼むとはころもからだも痛むということです。そして、悼むとは、記憶すること自体さえ拒むころのきわだつリアリズムです。

賢治がたもちつづけたのは思い出の枠をつくりそこにそっくり入れてしまった思い出としてのトシではなく、トシを悼む、その死を悲しむ気持ちそのものです。

「誰かの死に折り合いがつけられないという心情のさなかにある者は皆、相手を悼みつづけている」(古川日出男 2024年6月28日付朝日新聞「文芸時評」より)のであり、賢治はそのひとりです。

さきに、わたしは自問自答と「外部」への表現のあいだに「なにか見えない溝、隙間あるいは落差といってもいいものがありそう」といいました。それは、序を述べる賢治についていえば、トシの死への冷厳な認識と悼みつづけるという自覚といえるものにつながっている詩作という行為とに関わります。

賢治はトシを悼むころをそのままに発現したともいえそうですが、そのころがことばに姿を変えるまえの賢治にはわたしにはみえない自問自答が織りなす「かげとひかり」があり、表現されたものがその全容(すべて)であるはずもないのであれば、賢治のころと賢治の表現との間の落差にひそむ「かげとひかり」こそが、賢治にとっての悼みそのものなのでしょう。しかし、それはおそらく、賢治本人にもわからないのではないのでしょうか。「わからなさ」(不分明さ)を帯びた詩句の並びからわたしはそんなことを思います。

そして、賢治にとって自問自答とそれについての「外部」への表現とのあいだにあるなにか見えない溝、「かげとひかり」のかげとは、もう、トシが賢治を表現できないという決定的な事実への賢治の抱く不達感なのではないか、などと思うのです。

④ここに引用したのは、ご存じの通り、序そのものの冒頭部だけです。引用部の後は繰り返される「説明」にわたしには思えここには引用しません。賢治にとってことばを連ねることは、一刻、ひかりのなかに溶け込むのではなく、いたたまれなさを抱えながらみずからひかりと化して因果とい

うらせんのなかで痛みを忘れ去ることができ
る鎮痛剤の如き作用を期待する方法（行為）
だったのかも知れません。

わたしがここで「鎮痛剤」というのは、「宮澤賢治はど～も好きになれない」と『宮澤賢治殺人事件』（太田出版 1997年 以下、『殺人事件』）を書きだした吉田司（1945～ 以下、吉田）が、その『殺人事件』のなかに、つぎのように書いているのを思い出したせいでしょう。

（略）ハッキリ声を大にしていうが、賢治は「エコロジー」ではなく「ミソギ」なのだ。

というわけで、読者よ、当～然賢治の文学は「汚れ（ケガレ）」嫌悪の「清浄」文学ということになる。その清浄文学の頂点に、あの有名な妹トシとの死別の歌「永訣の朝」がある。

（略）

そう、病巣（肺結核—引用者）で真っ黒に汚れた賢治は、ほろほろに汚れて無価値なものが清らかなものに浄化され聖化されてゆく、その神秘的で幻想的な清浄感覚（＝ミソギ感覚）がたまらなく好きなのだ。森の自然に「救済される感覚」と言い直しても良いかもしれない。自然を〈神〉と見立てた、一種の〈他力本願〉教である。

（『殺人事件』 135—136 ページ）

ここには吉田の「表現する」があります。吉田の言説をそのまま受け取ろうとすれば、わたしの「自問自答」の逡巡は吹き飛ばされてしまいます。この先、難癖をつけ

て耐えてみたいと思いますが。

吉田が『春と修羅』の序について触れている一文を読んでみます。

（略）賢治の中の高等遊民性（＝蓄音機とヒヤシンスまたは労働への嫌悪）が、花巻の封建性土壌の中では「生マ身デ生キテイル」ことができないので、圧殺されてしまうので、青い幽霊複合体（「ルビ」として「ゴースト・コングロマリット」—引用者）に変身するのである。

冒頭から〈おれは幽霊だ〉などと宣言して登場してきた近代詩集なんて、それまで一冊もなかった。そのブツ飛んだ、シュールな表現を本当に身体感覚で理解して小躍りしたのは、草野心平でも高村光太郎でもなく、たった一人、超現実主義への過渡期にあったダダイズム（破壊主義）の詩人・辻潤だけだったろうと。（以下、略）（『殺人事件』 49 ページ）

ことばも、そのことばを生み出す人間も深い暗闇から這い出てきた、そして、でてきてみれば暗闇が上塗りされるばかりの時間が過ぎていくなかで、虫が明かりを求め、植物が光を求めるように賢治の体内時計遺伝子がみずから「青い照明」たることを求めたのかもしれない。生身に打ち込まれた暗闇のなかであれ求めて進むこと、それは賢治がおのれの時間を固定し記録する、あるいはわたしたちの、誰もが悼みつつ迎える正直な行為です。賢治にとって科学、文学、そして宗教も、わけのわからなさのなかを進もうとするときの、それ自体不分明

たゆみない愛が、どのように人と人をつなげるのか、この小説（『別れを告げない』—引用者）を通して問いかけた かった。

インタビュー ガザやウクライナなど、いま世界各地では多くの人々が命を奪われています。このような世界で、文学や作家ができることは何だと考えますか。

ハン・ガン とても苦しい状況で希望を見つけない。漠然とした楽観をもつのは簡単だけど、うそにもなります。ぎりぎりの、か細い希望の方が本物だと感じます。

真っ暗な状況の中で希望を見いだすのは、ほとんど不可能と思えるほど想像力を必要とします。しかし人間は生きている限り、想像しないわけにはいきません。希望と文学には共有する点があります。文学ですることにもまた、粘り強く想像することです。

インタビュー 歴史と向き合うことにも、希望を見つけるヒントはあるでしょうか。

ハン・ガン 『別れを告げない』の主人公の一人は指を切断する事故に遭い、傷口を3分ごとに針で刺し血を流す施術を受けます（『別れを告げない』「第一部 2 糸」—引用者）。苦痛と神経の電流と生命が、すべてつながっている。歴史的な事件に向き合うことは、そんなつながりを持つとすることかもしれ

ません。

歴史的な事件を扱うことは、過去について語る方法を探り出し、現在について語るということです。歴史を見つめて問うことは、人間の本性について問うことでもある。記憶を抱きしめ、生命に向けて進む人間の姿と能力に、わたしはひかれます。

内容を検討する前に、ハン・ガンが一字一句この通りに語ったのかどうかはわからない、とはいっておきたいとわたしは思います。インタビュー記事は、たいがい、当事者の承諾を得ているとしても取材者側による編集という過程があったであろうと推測できるからです。

さて、ハン・ガンが抱いている自問、それは、たとえば、自分とはだれか、なんで生きるんだろう、という問いでもよい、それと表現の間にある「溝、隙間あるいは落差」については、その作品『別れを告げない』（しかも、その翻訳です）に触れて考えるしかありません。わたしが考えていることは、作者のリアルと、作者が語り、造形する「語り手」や「登場人物」というフィクションとの間の関係とでもいえるものかもしれませんが。日本語版『別れを告げない』のなかにつぎの文章があります。

（略）本はほぼ正確に五月中旬に刊行された。いうまでもなく、悪夢はその後も続いた。今ではむしろ疑問に思う。虐殺と拷問について書くと心を決めておきながら、苦痛はいつか振り切れるだろう、痕跡は簡単に消し去れるだろ

うと、私はなぜそんなにも純情に——厚かましく——思い込んでいたのだろうか？ (21 ページ)

ハン・ガンは「私はなぜそんなにも純情に——厚かましく——思い込んでいたのだろうか」と、その表現の根拠あるいは動機、方法をも明示ないし暗示しているとわたしには思えます。虐殺と拷問に関して「登場人物」あるいは「語り手」について書かれた苦痛と「作者」の現実の苦痛とは自ずと異なります。とはいえ、悪夢は単に「登場人物」キョンハの「悪い夢」ではなく、ハン・ガンにも「悪い夢」見があるのだとなぜか思えます。なぜだろうか。

もうひとつ、ハン・ガンに関して、自問と表現の関係を考えるため次の文章をここに引用します。

ハン・ガンは韓国語でノーベル賞受賞記念講演を行い、つぎのカッコ（「 」）内の訳文にあたることを語ったといます。

(略) 自身を執筆にかき立ててきた動力は、「世界はどうしてこんなに暴力的で苦しいのか」「同時に、世界はどうしてこんなに美しいのか」、「この二つの問いの間の緊張と内的な闘争」だったと話した。

(略) 「ずっと前に私は人間に対する根源的な信頼を失ったが、どうしたら世界を抱きしめることができるのか、その不可能な謎に向き合わなければ前に進めない」と気づき、取りかかったのが、光州事件をテーマとする「少年が来る」の執筆に向けた作業だった。

当初は、「現在が過去を助けることができるか」「生者が死者を救うことができるか」という問いが浮かんでいた。だが、次第にこうした問いは覆され、「過去が現在を助けている。死んだ者たちが生きている者を救っている」と感じるようになったという。

(略)『別れを告げない』を書いた時には、「私たちはどれだけ愛せるか。どこまでが限界か。どれだけ愛すれば私たちは人間のままでいられるか」という問いの中にいた。(以下、略)

(引用は、「ハン・ガンさん、ノーベル賞で講演「言語は私たちをつなぐ糸」」朝日新聞デジタルによる。2024年12月9日検索閲覧)

2024年12月10日付朝日新聞文化欄にもハン・ガンの受賞講演関連記事が掲載されました。わたしは、引用した前記文中傍線部に興味をおぼえます。ハン・ガンのノーベル賞受賞記念講演の訳文に関する情報は、手元にはこの抜粋だけです。

さて、ハン・ガンは自らの問い「現在が過去を助けることができるか」、「生者が死者を救うことができるか」について、それぞれ、「過去が現在を助けている」、「死んだ者たちが生きている者を救っている」が答えではないか、と感じている、といます。ハン・ガンはどこで何を見つめているのでしょうか。そして、それはハン・ガンの自問と表現の関係にどのようにかかわることなのでしょうか。

わたしは、ハン・ガンがみずから暮らしていた光州の事態を描くことによって、朝

鮮あるいは韓国の近・現代のひとびとの生活の成り立ちの深淵に否も応もなく向き合わなければならなくなった、その思索のなかからハン・ガンは、「過去が現在を助けている」、「死んだ者たちが生きている者を救っている」ということばを表現しえた、と思います。作品『別れを告げない』の読者のひとりであるわたしには、これらのことばに奇異感はありません。むしろ、訳語「別れを告げない」ということばの意味が引き付けられ結びつき受け入れやすい、といえます。

また、ハン・ガンは作品『別れを告げない』の「あとがき」(訳文)に「二〇一八年の年の瀬になってようやく続きを書き始めた」と明らかにしています。そして、わたしには、ハン・ガンが作品『別れを告げない』の執筆に2018年の年の瀬に至り再びとりかかったことの背後には、「朝鮮半島休戦体制」(南基正『基地国家の誕生 朝鮮戦争と日本・アメリカ』)にかかわる事情があったというメッセージが含まれているのではないか、ハン・ガンが、これまでもその時々韓政府と北朝鮮当局が繰り返してきた南北首脳会談、実務者会談開催とその頓挫に対する思い、キャンドル革命として総括される運動の一環である「キャンドル大抗争」に現れた韓国のひとびとの脈々たる民主化運動と民主主義の開放的な面を持つ成果へのある意志を表明しているのではないか、などとわたしは憶測もするものです。

とはいえ、朝鮮半島休戦体制、それに終止符を打ち、そのつぎの新しい段階へ向けて繰り返される政治的な動きには日本政府

を含む各国の思惑や利害がからまります。「朝鮮半島休戦体制」に利害を持ち深く関わってきたのは韓国国内の1945年8月の日本敗戦—光復解放直後から続いている守旧勢力と民主勢力とであるばかりか、それに限りません。その一筋縄ではいかぬ、陰に陽に続いている工作活動を含む争い、文在寅が検事総長に指名した尹錫悦が李在明を破り大統領に就任し、その尹錫悦とその妻らがいま李在明によって内乱罪等について追及されている現時点の韓国の政治状況²、情勢に疎い傍目には瞬きをした間に見失い、いっそう焦点など結ばぬことがらにも、第二次世界大戦後の世界を牛耳ってきたアメリカとそのアメリカが管理しようとしてきた東アジアの日本と韓国の政治勢力が蠢いてきたといえるのでしょう。

南基正(1964～)は、2018年当時の「朝鮮半島休戦体制」について前出の『基地国家の誕生』の中でつぎのように述べています。

板門店宣言の発表された二〇一八年四月二七日は朝鮮戦争後、朝鮮半島がもっとも休戦体制の解体に近づいた日であり、朝鮮半島に住む人々が最も確実に平和への希望を抱いた日である。(略) 周辺諸国も基本的に板門店宣言を歓迎していた。前年、戦争の危機が現実化した中、国民の危機感と疲労度が極限に達していたこと、そして戦争の再発が朝鮮半島周辺のどの国にとっても他人事ではない構造が背景があった。この時、東北アジアの指導者たちは、何としても戦争は避けなければな

らないとの思いを共有していた。しかしその思いには濃淡があった。

その思いが最も薄かったのは当時の安倍晋三首相である。(以下、略) (「補論 朝鮮半島休戦体制解体の中の「基地国家」日本」『基地国家の誕生』(東京堂出版 2023年) 所収 431 ページ)

そして、上記板門店宣言の後、その各方面からの期待のたかまりは2019年2月の北朝鮮・金正恩とアメリカ・トランプのハノイ会談、同年6月の板門店での南北・米の三者会談まで続きましたが、結局、なにもなかったが如く頓挫、雲散霧消しました。2025年9月には「1期目のトランプ政権が2019年初頭に海軍特殊部隊(SEALS)を北朝鮮に上陸させて通信傍受の機器を設置する秘密の作戦を試み、失敗していた、米紙ニューヨーク・タイムズが5日報じた」(2025年9月7日付朝日新聞 国際面14版による)との報道がありました。

さて、ハン・ガンは、さきの「子どもとお茶をのんで過ごします」のごとくことばを選んで外に向けて発言しようとする感覚を身につけてもいます。そのハン・ガンが、優位な立場に立とうとして明・暗闘を繰り返しているであろう、板門店の軍事境界線を跨ぎ、跨ぎ直す二人(文在寅、金正恩)のテレビ映像を見ても拍手をすることはなかったでしょう。ハン・ガンが見据えているのが「韓国の現状」であればあるだけ、ひとびとの抱える現在から目をそらさず、そのうえで、ハン・ガンはひとびととおなじく目配りしつつも一息つき自身のいだいてきたテーマ「愛」—不可能な謎—の

困難性をみずからとともにインソンとその母、キョンハラを造形しながら世界に対置してみたいとしてペンを取り直したと思ってもいい、そんなことをわたしは考えています。

(b) 作品『別れを告げない』—感想1

ア. 語り手として登場するキョンハ

作品『別れを告げない』(以下、本作品)の構成上、わたしが重要と思うことはつぎの通りです。

① キョンハ＝「私」が、まず、「語り手」であり、インソンは「彼女」と呼称されている、ということです。そして、その語りの時間的な「現実」は、キョンハが「インソンのメッセージをうけと」(27ページ以下、本作品からの引用については頁数のみを表記)り、指を切断し手術・入院しているインソンに面会した十二月下旬のある日の朝に始まり、インソンの頼みごとを聞いて済州島のインソンの自宅に向かう最中およびその自宅に着いてからの出来事の推移が描写される丸二日間(と思われる)とまとめることができます。つまり、作家ハン・ガンはこの時間のなかに、キョンハの体験、記憶、夢あるいは感覚、そこからの想像、そしてインソンにかかわることがらも、まず、キョンハによって、キョンハを通して語らせているとあっていい、ということです。

② ハン・ガンがキョンハに語らせる時間は、作者ハン・ガンの現実時間に近いものであり、本書にかかっている時期を示すことばを順次追って考察すれば、本作品中

のキョンハが語り存在する時間は2018年の年末のある日と推定されます。

たとえば、本作品の62ページから78ページにわたり描かれているところは、濟州島に着いたキョンハが、雪の中をバスに乗ってインソンの家に向かう最中、キョンハの記憶を語るという体裁をとっています。そこで語られているのは、つぎのようなことがらです。

i. キョンハが2000年ごろ聞いた18歳のインソンの家出の話、ii. インソンが母の面倒をみるために濟州島に戻った2010年ごろの話、iii. インソンが母から聞き記憶するインソンの母の13歳の時(1948年)の体験の話。キョンハがそれらを次々に語っているのです。漫然と読み進めていて、時間的な流れ(ストーリー)を見失いそうになりましたが、そんなふうにとまとめることができます。

一方、ハン・ガンは、本作品中の出来事の大まかな時期を読む者が見当をつけられるように的確に明示する工夫をも重ねていると思います。

③ わたしがキョンハの「語り」にこだわるのは、インソンが、ここでは、まず、キョンハによって語られることで存在するという構造なのではないのか、という思いがあるからですが、それがどういうことなのかについては、後で触れましょう。念のために「宿題1」としておきます。

このような方法によって、ハン・ガンはキョンハを通して「過去が現実を助けている」という自問自答の意識をはたらかそうとしているからなのかもしれません。

イ. インソンによる母—別れを告げない—の発見

ハン・ガンは、前出のインタビュー記事によれば「人間による虐殺の後には、必ず粘り強く哀悼する人々が生まれます。記憶し、闘争し、最後まで別れを拒否する、「別れを告げない」人々です。人間のたゆみない愛が、どのように人と人をつなげるのか、この小説を通して問いかけたかった。」といます。

本作品を読むと、「別れを告げない」人々のひとは、キョンハ(私)がインソンと会話しながら聞いている(インソンが語り続ける)話に登場するインソンの母 姜正心だとわかります。そして、本作品の後半に占めるインソンの母の存在感はたいへん大きく重たい。

彼女 正心は、父母、妹(姜正玉)を「濟州島四・三事件」と総称される経緯のなか、「討伐軍」に虐殺され、また、討伐軍に投降した兄(姜正勲)の消息を見失いました。しかし、彼女 正心は兄を放念するどころか手を尽くしてたずね続け閉山した「コバルト鉱山」の虐殺現場跡地(慶山)に辿りつきます。ただし、兄の生死は結局不明のままだった、として本作品では描かれています。

また、彼女 正心は、兄と交流があった川向うの集落にすんでいた人と結婚したと描かれます。二人のあいだに生まれた子がインソンです。彼(インソンの父)は「濟州島四・三事件」で逮捕され一五年にわたり拘束され続けたのち濟州島に帰ってきたあと、拷問で傷つけられたために患っている

精神と肉体の後遺症を負うたまま 1948 年生まれのその妹 恩英の消息を、彼女が殺害されたと思われる P の海岸に訪ねます。そして、当時からそのあたりに住んでいるひとに、海岸で虐殺が行われたとき、「もしや生まれたばかりの赤ん坊が泣くのを、聞かざったか」(210 ページ) と尋ねたと描かれます。

尋ねられたひとがいまのおのれの気持ちとともに当時のその場のことを回想しています。

はじめて会った人でしょう。うちの人が知りば大変でしょう。だのに私は魂が抜けたごとになって、また、答えてしまったよ。泣き声は聞いておらんが、赤ん坊を抱いて立っておった女たちは見たと。私は真実、見たからね。砂上に引いた線のきわに女が三人、赤ん坊を抱きしめて、ひっついて立っておって。四歳、七歳、行っても十歳ばかりの子供七人、八人、其処に集まり、女たちの方へ口を開くが、何ん話をしておるか、泣いておるんか、風が海の方へ吹きつけて、聞こえざったと。(210 ページ)

これは、1948 年「済州島四・三事件」に関する実際の日撃証言にもとづき、インソンの父母が抱えることになった現実の一場面としてハン・ガンが描いたものと思います。そして、それにとどまらないことに気づかされます。わたしたちが、いま生きているこの世界にあって、その日撃証人の立場にも被虐者の立場にもおかれている、という「現在」、その歴史性と構造をも描写

しているといえます。

ところで、本作品 66 ページに済州語に関する記述があります。本作品の訳者 斎藤真理子(1960～)は、前記の日撃証言の済州島のことばの訳出について「訳者あとがき」につきのように記します。

(略) ハン・ガンは、これらの会話文(済州語の語り—引用者)を書く際に、済州語をそのまま用いたら本土の読者に理解できないと考え、済州島出身者の知人と相談し、可読性を損なわず「中間地点に収まるように」配慮したそうだ。

語尾が短く独特のリズムを持ち、朝鮮語の古層が残っているともいわれる済州語の響きを生かして訳すにはどうすればよいか。どこかの地方語にそのまま置き換えることはしたくなかったが、標準語との距離を提示しつつ、叡智ある響きを表現したい。そのために力を借りるとしたら、済州島との共通点も多く、自分もかつて四年暮らした沖縄の言葉以外には思いつかなかった。(略)

それを実際に形にすることは難しかった。済州語・朝鮮語・沖縄語のルビを併用し、日本の特定の地域に属さない語りの文体を作り上げようと長期間努力したが、結果的に読みやすい文章を作ることができず、編集部意見に従い現在の形に調整した。

(320-321 ページ)

さて、ハン・ガンは、「……キョンハね」(170 ページ) という声を合図に、キョンハによつ

てではなくインソン自身によって、ときにインソンが制作した映像作品を介しながら、「母さんのこと、よくわかっていなかった。」(233 ページ) というインソン自身に母の兄探し、父の妹探しを語らせ始めます。そればかりではありません。そこでは、インソンが母との関係を「発見していく」過程としても語られています。そのあたりを気にしながら本作品から引用します。

① 結局、母さんは失敗したの。／遠くから聞こえてくるようなインソンの声が低くなる。／骨は見つからなかった、ただの一かけらも。(261 ページ)

② この世でいちばん弱い人が、私の母さんだと思っていたの。

インソンのかすれた声が静寂をくぐって聞こえてくる。

幻。

生きた抜け殻みたいな人だと思っていた。(263 ページ)

慶山の虐殺跡地で慶山遺族会の事務局長が、母に生存者が一人いたというはなしをした後の描写。

③ そのときから母さんの中で分裂が始まったのかもしれないの。(267 ページ)

また、ハン・ガンは、キョンハはインソンが、母の死後、慶山遺族会の会長がつぎのようにいっていたとインソンから聞かされた、と描きます。

④ 遺族会でいちばん情熱的なメンバーがうちの母さんだったって、濟州

島の誰一人としてそんなことを思いつきもしなかった一九六〇年にもう、慶山に行ってきた人なんですからって、言っていた。晋州への移送者名簿のコピーを大邱刑務所に要求することも、母さんが発案したんですって。(264 ページ)

わたしは、先に、ハン・ガンは本作品中の出来事の大まかな時期を読む者が見当をつけられるように的確に明示する工夫をも重ねている、といいました。ここで記されている「一九六〇年」にはさらに時期の明示だけでは済まない深い意味があるはずで、李承晩政権が倒れた(四・一九学生革命)あと、『増補 なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか 濟州島四・三事件の記憶と文学』(金石範・金時鐘 文京洙編 平凡社ライブラリー版 2015年。以下、『増補 記憶と文学』)の関連年表によれば、1960年5月には濟州大で「四・三事件真相究明同志会」が組織され、6月には韓国国会調査団が四・三遺族から聴取り調査に着手したのです。

四・一九革命の精神に基づき、被虐殺者及び被害者の実態調査を進めるものであり、被害者遺家族の皆さんは旧時代の恐怖を克服し、本会(慶北地区被虐殺者遺族会—引用者)の調査事業に積極的に協力されたい。(235—236 ページ)

しかし、これらの流れは翌1961年5月、朴正熙が主導する軍事クーデターにより弾圧・寸断されました。

その時分は軍事革命の世であったか

ら、時局のころの話は、誰も、口にもできずよ。(209 ページ)

韓国のひとたちにとって、あるいは、四・三事件被虐者遺族には、また、口を噤まざるをえない時間がすぐに始まったのです。

さて、母にははじめに取り戻しようのない喪失があったこと、母は人知れずその喪失と向き合ってきたことを知ったインソンの、母との格闘であり「別れを告げない」の発見でもある日々は母が「ほとんど一日じゅう眠ってたよ。満ち潮が長すぎる不思議な海みたい。砂洲が完全に水に沈んだ後、もう二度と潮が引かなくなった海みたい」(289 ページ) になって亡くなるまで続き、そして、こんどは、インソンがその母に「別れを告げない」ことによって、キョンハの提案「別れを告げない・プロジェクト」(174 ページ) と自分をつなげるのです。

ここに語られるインソンの認識と記憶は、もちろん、インソンのものとすべきであり、キョンハはここではすでに語り手ではなく「聞き手」です。しかし、本作品中では、インソンの語りの前にはキョンハの自意識がそれこそ弱々しいろうそくの炎のように揺らめきつづけているように思われます。その風前の灯火のごとき揺らめきが、インソンが語っている前に身をおくキョンハ自身が、語り手であるべき自分はだれが語るのを聞いているのかというハン・ガンの問いのありかを、そんな本作品のなかの「現実」との齟齬感をかすかに知らせているかのようです。

そして、キョンハは「現実」には病院のベッドに横たわっていて現に自分の眼の前

にはいるはずのないインソンの存在(姿)を認め、その「現実」のなかで、こんどはインソンがあれこれと指図し発言し、行動しているとキョンハは認識するのです。これについて、キョンハは自らに「亡者の幻想」(173 ページ) と問いかけ、インソンの存在につきのように「靈魂」(176 ページ) ということばをあてがいもしています。

カップから唇を離したインソンと目が合ったとき、私は思った。彼女のおなかの中にもこのお茶が広がっているのだろうか。インソンが靈魂となって会いに来たのだったら私は生きているはずだし、インソンが生きているのなら、私が靈魂となって会いに来たのだろうか。この熱さが私たち二人の体に同時に広がることありうるだろうか。(177 ページ)

もっとも、ひとは「源氏物語」の六条御息所の如き現世にこころ囚われた執念深き生霊(怨霊)もつくりだし、登場させもすることからすれば靈魂がすなわち死者とは限らない。

ところで、さきに、インソンはキョンハに語られることによって存在する、といただきましたが、ここでは、インソンが語ることによってキョンハが存在する、キョンハの地位が揺らぐとでもいえる立場の逆転という様相を呈し始めているように思えます。これはどういうことなのか、このことについても、先の宿題1同様、後で触れることにします。これを、念のため「宿題2」としておきます。

さて、インソンは、自分の母がその兄や

妹の生死にどれほど執着し、そのことで現に夢に悩まされ呻くがごとき声を出していたことを知りました。これは、被虐者の遺族の間でしか語られず、虐殺の事実が公に取り上げられることが困難な時間を経過してきたといえる済州島四・三事件を、決して忘れない、「別れを告げず」、「別れを告げられぬ」母がいるということをインソンが発見したということです。

また、インソンはその幼少期（1984年ごろ）に亡くなった父がインソンを連れ歩いてとった行動の意味をも理解したとき、父もまた、「別れを告げず」、「別れを告げられぬ」人々の一人であるという発見と理解にも至りました。そのとき、インソンはみずからその志を引き継がんとしてドキュメンタリー作品（韓国軍のベトナム戦争での残虐行為の被虐者へのインタビュー映像、満州で朝鮮独立軍に入っていた老女へのインタビュー映像）を手掛けてもみたのでしょう。しかし、インソンの企図はそれによって父母の生涯との間に脈絡をつけようなく頓挫します。そして、それ以降、つぎには自己語り—セルフ・インタビューという手法で「別れを告げない」父母に肉薄しようとするのです。「別れを告げない」のは生きている者だけではありません。地中に放り込まれ眠っていたものは掘りおこされて「別れを告げない」と舌もないままいうのです。そしてその声と音があると聞きえた者はまず瞠目し、慟哭するのです。

その人の話で次の映画を作ろうと思ったのは、そうやって年が明けたときだったの。名前はもちろん、性別も、

当時の年齢もわからない人。ちょっと細めの骨格で、小さいサイズのゴム靴をはいた、戦争（朝鮮戦争—引用者）勃発直後に済州島で予備検束されて銃殺された、千人あまりのうちの一人。

その人がもしも十代だったら、母さんとほぼ同い年でしょ。二人のその後を映画にしたらいいと思って、計画を立てたんだ。一人は毎日何十回も飛行機が離着陸する滑走路（済州空港—引用者）の下で震え、もう一人はぽつんと離れたこの家で布団の下に糸鋸を敷いて暮らした、そういう六十年について。（193ページ）

インソンは父母が済州島四・三事件の被虐者であるとともに「別れを告げない」人々であることを発見し理解したとき、みずから「別れを告げない」人々の一人となりえたというべきなのでしょう。

ウ. キョンハ—別れを告げたいひと—の悪夢、インソン—別れを告げないひと—の記憶

本作品の冒頭に書かれたキョンハの見た夢について、キョンハはその直前まで「もの書き」としてかかわっていた作品（小説）の題材とのかかわりを念頭におき、（光州民主抗争の）「犠牲者」を悼むというイメージで夢のなかの黒い木を墓標に見立て、インソンに「黒い木を植えるプロジェクト」としていったん話をします。それは、インソンの母が亡くなり済州島での葬儀にキョンハが訪れたとき（42—43ページ）のことであり、ストーリー上では2014年秋ごろと思

います。しかし、しばらくしてから、キョンハはその夢の解釈をつぎのように考え直します。

あれは虐殺された人々とその後の時間にまつわる夢ではなく、単なる個人的な予言だったのかもしれないと、そのとき初めて思った。水浸しの墓と沈黙する墓碑から構成されたあの場所は、この先に残されたわたしの人生を前倒しして語っていたのかもしれないと。
(11 ページ)

そして、キョンハは、「誤解していたかもしれない」としてインソンにプロジェクトの撤回を話します。このキョンハの気持ちの変化は、ひとつには、キョンハのつぎのように描かれる「個人的な」事情が反映されている生活のゆらぎに根拠があるにちがいません。

けれどもまだ、ぐっすりとは眠れなかった。
いまだにまともに食べられなかった。
いまだに、浅い息をしていた。
私から去った人たちが耐えられなかったやり方で生きている、今も。
(26 ページ)

「今も」とは、本作品の「現実」と同じ時間、つまり、キョンハがインソンからの携帯電話での呼びかけを受け取る時刻に近接するときのことです。キョンハは、「今も」死の強迫観念に苛まれているということでもあります。キョンハがその「今」に拘泥しているのは別な作品として取り上げた虐

殺者のことではなく自分自身のことであるという自己認識をあらわしています。

キョンハに生まれた「単に個人的な」という認識は、みずからの生活のありようと「前作」を描きえたこととの間のゆらぎなのかもしれません。その自分に対して「別れを告げよう」として告げられない、そんな孤独のなかにいる、「単に自己満足的な」ということばを冠したくなるような心情に囚われている、といえるのではないかとわたしは思います。

一方、インソンは、すでに母の行動とみずからの記憶をふりかえり「死にたい」と呟きつつ被虐者に対する「別れを告げない」という態度を、母から引き継ぐという意味でも決めていました。だから、キョンハの撤回の話聞いたとき、インソンは「とにかく私は続けているから」(49 ページ)と応えます。そして、インソンは「そういうことじゃないんだよインソン」(49 ページ)というキョンハの「個人的な」事情にかかわる予言という認識を、キョンハにとっての出発点あるいは転換点としては認めたのです。ここで描かれているキョンハとインソンの差、キョンハとインソンがそれぞれに負う孤独のベクトルの差異と交差が本作品のストーリーを動かす原動力といえるのかもしれません。

(c) 死と再生—感想2

ア. 雪中行だけではとどかないところ

キョンハにとって、インソンの家は、バスを降りることを選択し、その後、命懸けの、命を落としかける雪中行の果てにやっ

とたどり着くことができる場所と描かれています。

ハン・ガンがこのことで表現しようとしたのはなにか、どんな意味があるのだろうかと考えています。

ハン・ガンは第I部第5章「残光」(111～128ページ)の全部でこの雪中行のストーリーを描いています。そして、命懸けの雪中行に関してわたしには気になる記述がいくつかあります。

そのひとつは雪中行開始前、第4章「鳥」の中のつぎの描写です。

① やっとながった。インソン、と呼びかけると同時に私は耳をそば立てる。インソンのささやき声ではなく、緊迫した女性の声が聞こえる。

後でかけ直してください、後で。

あっという間に通話は終わってしまい、私は呆然と液晶画面を見つめる。看病人の声だったと思う。あの病室のものとは思えぬような騒ぎが、切羽詰まった声の後ろに聞こえた。

どういふ状況なのか想像がつかない。
(104ページ)

引用したのは、キョンハが、済州空港近くのバスターミナルビルから乗った島一周する高速バスを当初の目的地P（ピョンソと想定—引用者）では降りずにその先の大きな町・西帰浦までいこうかと迷いながらも、結局はPで降り、降りてはみたもののまだ迷いを引きずりながら病室で治療しているはずのインソンに雪でインソンの家までは行けそうにない、自分自身の体調も思わし

くないし、と伝えようと携帯で電話をした、その際の応答の描写です。

そして、電話の目的を果たせなかった直後、夕暮れ近く、インソンの家方面（中山間 細川里）へ行く路線バスが豪雪のなか現れます。キョンハはインソンが「どういふ状況なのか想像がつかない」まま、みずからは体調不良の予感や行先変更についての逡巡を払い落とせぬゆえに、誘われるかのようにこのバスに乗ります。あれこれ思いながらもキョンハは当初の予定通り、インソンの家にもっとも近い停留所（家までは徒歩で三〇分以上—107ページ）で下車します。

キョンハの逡巡の気持ちの底には、インソンの「とりあえず私は続けているから」ということばに明確に態度表明できず曖昧な根拠しかないと考えるプロジェクト提案、インソンがプロジェクトについて考えつづけて来たことが指切断の事故につながっているのではないか、という思いも含まれている(53ページ)にちがいません。

ともあれ、いまや、キョンハにとって、インソンの容態を知る術はどこにもありません。キョンハは、インソンの死を思わないでもなく、そんなはずはないだろうとも思いながらもインソンの死の予感を引きずりはじめます。

気になることのふたつめは、雪の中で立ち往生し、雪の中で「昏倒」してしまったあと（らしい）キョンハの意識についての描写です。

② 何を考えたら耐えられるだろう。
胸にめらめらと燃えさかる火がなかったら。

何としてでも帰りつき、抱きしめるべきあなたがいなかったら。(120ページ)

- ③ わからない。鳥たちがどうやって眠り、死ぬのかが。

残された光が消えるとき、命も一緒に絶えるのか。

生命は電流のように残り、夜が明けても流れていたりするのか。

(121ページ)

これらは、転換点にあるキョンハの孤独と、キョンハのインソンに対する、インソンの死に対する意識を表現しているのではないか、というのが、当面のわたしの考えです。わたしは前出の②、③をキョンハの声と判断し、キョンハがインソンの死の予感を語っているように受け取ります。であるからこそキョンハは、インソンは死んではいない、インソンはたしかに生きようとしているに違いないとも思うのです。

そして、ハン・ガンのいう「電流」はキョンハにつきのように雪の中からの脱出を促します。

- ④ でも、鳥がいる。

指先をつつく感覚がある。

かぼそい脈拍のように、鼓動するものがある。

途切れそうで途切れない、指先に流れ込んでくる電流がある。

(124ページ)

このあと、キョンハは再びインソンの家を目指し雪の中を月明かりのもと進みま

す。この行動の根拠は、キョンハのなかのインソンの存在感です。死に直面しているかもしれない鳥にはインソンの姿が重なります。第I部の題名「鳥」のイメージの根拠を、ここにもとめることは許されるだろうと思っています。「鳥」のことをかんがえたら耐えられるのか。たとえ、このあと、救出されるべき鳥の死が明らかになるのであれ。いや、だからこそ、というべきか。ここでは生と死がとなりあわせ、重なり合います。

ところで、ハン・ガンは本作品のなかで「電流」ということばを、つぎのようにも使っています。

- ⑤ 火が燃え移ったらあなたの手を握ろうと私は思った。雪の山を崩して這っていき、あなたの顔に積もった雪を拭こう。私の指を噛み切って血をあげよう。

けれどもあなたの手が触れなかったら、あなたは今、あなたのベッドで目を覚ましたところなのだろう。

またもや傷に針が刺されるあそこで。血と電流と一緒に流れるあの場所で。(299ページ)

「電流」ということばにこだわりますが、ここには「刺激する—刺激しない」、「流れる—流れない」という二面性を含む意味以上に、「つながる—つながらない」のうちの肯定的な面「つながる」に力点があるように思えます。⑤の前半は、幼い妹の死に瀕した状況にインソンの母のとった行動(228—229ページ)に感じ入ったキョンハの

インソンに対する「愛」の表明にかかわる描写です。

そして、気になることのみつつめとは、つぎのキョンハの認識に関する描写です。これは、わたしが思っている、生と死がずっととなりあわせであった、ということに結びついているのだと考えます。

⑥ (略) 水はいつまでも消えることなく循環するじゃないか。だったら、成長期のインソンに降りかかったその雪片が、今、私の顔に落ちてくる雪片と同じものでないはずはない。続けて、インソンのお母さんが見たという学校のグラウンドにいた人々のことが思い出されて、膝を抱えていた腕を私はほどく。感覚の鈍った鼻とまぶたから雪を拭き取る。彼らの顔に積もっていた雪と、今私の手に落ちてきた雪が、同じものでないはずはない。(119—120ページ)

ハン・ガンは、⑥の描写の後にも、繰り返し「循環」にかかわりつぎの通り描写しています。

⑦ 水だけでなく、風や海流も循環しているのではないか。この島だけでなく、ずっと前に遠いところで降った雪片たちも、あの雲の中で再び凝結することがあるのではないか。五歳の私がK市で初雪に向かって手を差し伸べ、三十歳の私がソウルの川沿いを自転車で走りながらにわか雨に濡れていたとき、七十年前にこの島の学校のグラウンドで何百人もの子供たち、女たち、

老人たちの顔が雪におおわれて見分けがつかなくなっていたとき、めんどりやひよこが翼を広げて羽ばたく鳥小屋に泥水が激しく押し寄せ、きらきら光る真鍮のポンプに雨粒が跳ね返ったとき、それらの水滴と砕け散る雪の結晶と血の滲んだ氷とが同じものでなかったはずが(「ない」などと訳語を補うべきか—引用者)、今、私の体に降りかかっている雪がそれらでないと、いえるはずがない。(122ページ)

キョンハは「現実」にはみえないが感じるなにかにせかされ、雪中ラッセルの果てにインソンの家の明かりを発見します。ハン・ガンは、キョンハに「個人的な」事情を超え、その先に「他者」をみすえる「体験」として雪中行という試練を与えたのかもしれませんが。インソン自身がキョンハとの間の「つながり」を求めるために、インソンが「とにかく私は続けているから」と声をかけ、みずからの体験を語るために。

本作品には、雪、雪片、結晶、水、氷などのことばがちりばめられています。そして、「天」から降りてくるこれら(自然)は「地」に至ればその形態にかかわりなく、人間とどのようにかかわろうともそれとは別個に天地の「循環」のなかで再生されている、歴史的、具体的でありながら非歴史的あるいは通時的、さらには超越的なものとして成立している、そのようなイメージで語られているように思います。

ここには、先に「電流」(④、⑤)でふれた「つながり」との関係をも想起させるものがあります。

もちろん、ここでの「つながり」とは天と地を結ぶ「自然現象」のことではありませんし、「つながり」という表現ではまだ概括的、観念的です。「現につながっている」というイメージを喚起するなにかが必要です。インソンの母が語る、その妹（姜正玉）の死、「解けないまま頬に残っている雪」にかかわることです。インソンの母にとって、この「解けない頬の雪」は死の象徴です。インソンは18歳のとき、母親の苦衷、煩悶の理由も知らずに、むしろその様子にいたたまれずに家出をしました。家出を知った母はインソンの頬にも解けない雪があるとイメージしました。母はインソンが死んだものと思い、そのころの痛みからインソンの面影に丁重に接する一暖かなお粥を供え悼む一のです。そして、わたしはこのインソンの母の態度を親子のあいだの「情」とだけ扱い済ませるのではなく、雪によって作動し蘇る体験（歴史）にもとづく「想像力」が加担し「母親」としてだけでなくひととしての世界を押し広げているのだというべきでしょう。

イ. インソンの、そしてキョンハの、死と再生

そろそろ、宿題1、宿題2を果たすことを考えなければなりません。

念のため、わたしが掲げた宿題1、宿題2をまとめ直すと、つぎの通りです。

宿題1. インソンがキョンハによって語られることで存在する構造—これはどういうことか。

宿題2. インソンが語ることでキョンハが存在する、キョンハの当初の地位が揺ら

ぎ立場の逆転という様相を呈し始める、これはどういうことか。

わたしは、宿題1、2をあわせて考えることができると思います。また、そのようにします。つまり、当初、わたしには、インソンがキョンハの語りのなかで存在すると思われたのですが、それがいつの間にか、インソンの語りによってキョンハが存在するという様相を呈してきたと思えてきたのはどうしてだろうか、ハン・ガンにはどのような意図があるのか、というまとめ方ができると考えます。

「いつの間にか」といいましたが、たとえば、つぎのような描写がその前兆といえます。

熱は伝わってこない。体の中のぬくもりのすべてが手から抜け出していったように、胸が震えていた。(169ページ)

家にいるはずのないインソンが登場するのは、キョンハが鳥「アマ」の死に充たされたタイミングです。

鳥の死はインソンの死の影でしょうか。インソンはそこで自分の生活史を語り、キョンハはその聞き役の立場に身をおきます。インソンはセルフ・インタビュー映像を、インソンが父母から聞いた話、父と共にした行動、インソンの母がインソンに知られることなく行動し蒐集した記録の存在とその内容などによって組み立てました。それらは、すべて、済州島四・三事件として現に語られている事態についての記憶、記録です。鳥の死は、また、父母たちの死の影でしょうか。

キョンハは、逡巡だらけの命懸けの雪中行の後に、このセルフ・インタビュー映像をはじめてみたときのことをふりかえります。そして、インソンの前二作（韓国軍のベトナム戦線での暴虐行為の追求、満州の朝鮮独立軍に身を投じた女性へのインタビュー）の外在的な社会告発的（啓蒙的）映像に目をくらまされたこと、また、インソンが取り組もうとする「問題」の自己内在性、その背景に考えが及ばなかったことに気づいたというべきなのでしょう。さらには、キョンハ自身のマンションでの死のイメージの悪夢と死への強迫観念が独りよがりな自己満足的、あるいは自己慰撫的といえるものであり、それを「個人的に」という意味であるとインソンにいった、と思ったりします。

キョンハの目の前に現れたインソンの抱える歴史とは、キョンハが描いたK市での虐殺行為における被虐者についての作品を通してキョンハ自身がいくばくかでも世界に接しえた、社会を表現しえたというキョンハの思いを突き放すものだったのではないかと思います。

ハン・ガンは、キョンハがかつてK市での虐殺行為についての資料を調査している最中に、四・三事件資料に閉じ込められていた証言に圧倒されながら「思い切ってスルーした」とつぎの通り表現しています。

低い塔のように積まれた本の背表紙を指先でたどって行ってインソンが取り出した、『細川里編』という副題の横に連番の12がついた資料集に見覚えがあった。国立図書館の開架閲覧室の書架にあったこのシリーズは、

二〇一二年の冬に初めて見た。K市に関する本を書くために国内外の関連事例を調べていたとき、この島での虐殺に関する口述証言が村別に収録されたこの資料集を、私は思い切ってスルーした。（202ページ）

ここには、キョンハが、物語の現実において、インソンの活動と自分の活動の質の差異を自覚しているとともに、自分では自分の道を進んでいたには違いないのだがと思う一方で、今にしてみれば何かが物足りなかったのかと思ってもいるとも思います。また、ここには、二つの事態を捉えつなぐハン・ガンの、より「内在性」をもとめる現実への関係意識、そのパラダイムの変換への自覚の影が差しているように思います。

さらに、インソンとキョンハのあいだには、ともに、一緒には、まだ、抱きあえない。そういうものが確かにある。だから、インソンは、くり返しになりますが「とにかく私は続けているから」というのです。

そして、ストーリーは、キョンハのインソンに対する認識の変化、まるでインソンが先導者であり、キョンハは追跡者（追従者）であるかのごとく展開するのです。キョンハとインソンの立場の変更には、ハン・ガンの観照と良心とが込められているのではないでしょう。

物語から考えれば、インソンは、すでに再生をくりかえし「別れを告げない」を実行してきた、しようとしてきた人物です。負傷したすえに命を落とすということがあったとしても、インソンは、インソン自

身が母たちを見いだしたように「別れを告げない」ひとがどこかに生まれる、生まれているという希望と覚悟をすでに抱いているひとともいえます。

一方、キョンハはどうでしょうか。

キョンハは、インソンとの間の距離を測りかねていました。あるいは、自分とインソンとの間の差異に気づきつつありました。唯一とも思えるような友人であるインソンを遺言書受取人にはっきりと選ばなかった、あるいは選ばなかったのはその証左に思えます。これに対して、インソンは、インソンにとって自分の、父母たちの分身であるかもしれない鳥「アマ」の生死をキョンハに託しました。わたしはそんなことを考えながら、すでにインソンにとってキョンハは「別れを告げない」であろうひとの候補者と意識されていたといえるのではないかと、キョンハ自身の意識は別にして、と思ひもします。

「別れを告げない」とは、たんに悼みつづけるということではありません。その悼みに向かうべきみずからの体験を明らかにしながらでなければはっきりとはつかめない、そこにはいくつかの諧調がある、そんな決してなにかひとつにまとめてはならないことばです。他者に押しつけるものではありませんし、押しつけることなどできません。

キョンハがインソンから「……ここで眠っちゃだめ」(298ページ)とささやかかれ、「大丈夫。私に火がある。」(298ページ)と応えるときとは「別れを告げない」ひとの自覚を持った、つながりの瞬間のことでは

ないかとも思っています。

そして、ハン・ガンはつぎの情景を通して、キョンハがこのことを理解したことを表現したのではないかと。

息を吸い込んで、私はマッチを擦った。火はつかなかった。もう一度擦るとマッチ棒が折れた。折れた軸を手探りで握りしめてまた擦ると、炎が起きた。心臓のように。脈打つ花のつぼみのように。世界でいちばん小さい鳥が羽ばたきするように。(299ページ)

もちろん、インソンとキョンハのありようというのは、ハン・ガンの視点、ハン・ガンの自問自答から生まれでたものです。それでは、ハン・ガンはインソンとキョンハに孤独を脱して生き続けること、「別れを告げない」の実践を通じて、「私たち」を回復することを希求しているといっているのでしょうか。

(d) 「愛についての小説であればよい」—感想3

わたしは、賢治について、〈心象スケッチ〉によって「別れを告げない」ひととしてみずから表現しようとしていたと思ひみなし、本作品名「別れを告げない」に反応してしまいました、といいました。そして、たしかに、賢治は「別れを告げない」ひとのひとりたらんとしたのだらうと、ここに至っても思います。

しかし、それと同時に、賢治は、ハン・ガンが描くインソンの母あるいはインソンという人物とは、少なくとも悼むこと背景、あるいはパースペクティブ(遠近法)がまったく異なると思えます。

ここに至るも、いまだに、わたしにはハンガンと賢治の自然観の差異をなかなか表現しきれません。賢治は森羅万象のすべてを「現存在性」に詰め込もうとしている、あるいは、「自然」を社会性、歴史性を包含する、より大きく広いものにとらえ、そのまえでは社会性も歴史性も等価であるともみようとしている、また、賢治にとってはそれ自体が「世のなか」だったのかもしれない、そんなふうにいってみたいと思います。賢治が、みずから捉えられ縛られている「世のなか」を渡り歩こうとして躓いた「石」をどう考えたのか、躓きの石は賢治によって宗教の高みにまで持ち上げられた、とでもいえそうなことがらのことです。

さて、ハン・ガンです。ハン・ガンは、本作品の「あとがき」で「(『少年が来た』の一引用者)次に何を書くのですか」と聞かれ、「愛についての小説であればよいのですが、と答えたことを思い出す。今の私の気持ちも同じだ。この本が、究極の愛についての小説であることを願う。」と応えたと書いています。わたしたちは本作品に関して「究極の愛」をどこに見出し、それについてどのように考えましょうか。

キョンハは、インソンが抱えようとする「村落共同体」の歴史、すなわち、単に国家権力やその暴力的な協力者が自分たちの肉親を虐殺したばかりでなく、同時に親類縁者がその虐殺者に加担しているという事実に向き合わなければならなかったということ、あるいは、権力側は済州島で海岸から5km以上離れた地域を「疎開地」とし、その地の住民に他地へ移れと先触れし、そ

の地域(中山間)内に留まるものを「アカ」およびその係累として「アカの血」を絶やせとジェノサイドに突っ走り七つほどの邑々が消滅したといわれていること、さらには、この事態に納得できないひとびとのなかにはハルラ山麓洞穴に身をひそめて生き残ることができたひとびとがいたこと、また、軍・警察関係の親類縁者、何らかの優遇措置を受け殺害対象からは外されて難を免れ生き延びたひとびともいたこと、などの事態の意味をどう理解できたのでしょうか。そして、四・三事件後、これらの「生存者」たちはどのように暮らせたのか、と考えたとき、わたしは、かろうじて生者間での話し合いによる「和解」ということばを思い出しました。

「和解」とは当事者間の妥協的な解決策です。当事者にとって忘れられないこと、忘れてしまってもいいことを取捨選択して、たがいに照らし合わせどこかで「べたなぎ」になるはずもないころのなかの波風の強弱、高低を受けいれようとする決断です。「妥協」とは「原理」と照らしてみたときに登場することといえますが、いったい誰がメートル法の「原器」のごとき「原理」をもちあわせているのかと考えれば、きっと、「和解」とは「絶対」を「相対」の渦のなかに巻きこんでみずから幾重にも見にくくしようということ。ここにも「不可能な謎」があります。傍から挟める口があったとして、はたしてどんなことばを吐けるのでしょうか。そんなことばや態度はあり得ないと思います。なにごとくも解消することのない「和解」なら「和解」

ではないともいえましょうか。インソンの母の眼中には「和解」などはなかった。

濟州島四・三事件については、事件後、「反共」を掲げる軍事クーデター政権が成り上がり続いたことから、事件を検証し、また明らかにしようという犠牲者遺族らのやむにやまれぬ動きは封殺されました。そして、1980年代後半の韓国民主化運動後に事件説明のさまざまな動きがやっと「国」主導でもできます。ふたたび『増補 記憶と文学』にあたると、関連年表(321ページ)によればつぎの記述があります。

1989年4月 韓国初の「第一回四・三追慕祭」開催、『済州新聞』「四・三の証言」連載開始、同年5月、済州四・三研究所創設、1990年6月、『済民日報』創刊、「四・三は語る」連載、1991年4月、遺族会「第一回四・三慰霊祭」

「和解」は、外圧なく、ひとびとがやっと口を開ける状況になってはじめて公的に語られたことではないか、と思いますが、ひとびと(インソンの母)はすでに「和解」が強いる苦さ以上のいたたまれなさを何度も味わいそのところを苛まれてきました…、大熊、双葉、浪江、富岡、飯館の人々、福島第一原発被災地。

金時鐘さん(1929～)は金石範さん(1925～)との対談で語っていることばに耳を傾けてみます。

(略) 四・三事件の場合、ナチスのホロコーストや先頃のコソヴォ紛争における民族浄化などと違って、占領した異民族による大量虐殺ではなく、米軍占領下であったにせよ、実際には同じ民

族同士の間で虐殺や暴行が行われたわけです。さらに悲劇的なことに、濟州島という孤島の共同体内部で暴力が暴力を生み、同じ村で、ひどい場合には、親戚や家族の内部にあっても、暴力が生まれています。

ですから「四・三特別法」(2000年1月、金大中大統領の下で制定、公布—引用者)までの(あるいはその後も続いている)島民たちの沈黙は、ただ単に韓国政府による抑圧のせいだけではなく、島民たちが、地域社会内部での暴力の記憶を抑圧し隠蔽して生きていかざるをえなかった側面もあると思うのです。四・三事件の真相究明は、そういう共同体内部の暴力の記憶を暴き出すことにもなり、濟州島社会の不和や対立の新しい火種にもなりかねない、という声もしばしば聞かれます。

私は、濟州島で「和解」という言葉を何度も聞きました。それは、ある意味では、四・三の問題解決に向けた濟州島での取り組みをつらぬく基本的な精神や姿勢の問題として語られているわけです。四・三の問題は、南北分断の集約としての意味を少なからずはらんでいます。その南北分断の問題解決の方向が、昨年六月(この対談は2001年—引用者)の南北首脳会談(2000年6月 金大中・金正日—引用者)によって示されたわけですが、そこでのキーワードもやはり「和解」ということでした。それは、四・三の問題解決にあたっても肝に銘じておくべきことだとは言え

ないでしょうか。(『増補 記憶と文学』
165—166 ページ)

「和解」とは当事者間で纏れてできてしまった糸玉をすっかりみごとに解きほぐすことができないままにたがいにその糸玉を抱きつづけていることなのです。なにかが消えもせぬまま不問に付されて。纏れた糸玉の存在を語る声もおぼつかないままに。

「歴史的な事件を扱うことは、過去について語る方法を探り出し、現在について語るということです。歴史を見つめて問うことは、人間の本性について問うことでもある。記憶を抱きしめ、生命に向けて進む人間の姿と能力に、わたしはひかれます。」と発言(前出 2024年5月28日付朝日新聞記事)したハン・ガンが「光州民主抗争」について語ろうとするに際し、「「ずっと前に私は人間に対する根源的な信頼を失ったが、どうしたら世界を抱きしめることができるのか、その不可能な謎に向き合わなければ先に進めない」と気づき、とりかかったのが、光州事件をテーマとする「少年が来る」の執筆に向けた作業だった。」とノーベル賞受賞講演で語ったといいます(前出朝日新聞デジタル)。

このハン・ガンの発言は、「和解」の困難さを否応なく知るひとりであるゆえに、事態を突き詰めようという勢いを感じさせます。「愛」はいわばまだその中身を知り得ないものの「仮称」でしょうか。

本作品のなかでインソンはキョンハに「とりあえず私は続けているから」(46ページ)³あるいはその類似のことばを発しています。これは、相手と距離をとりわかりあ

えず「別れを告げない」ながらも「愛を告げる」というニュアンスを含むことばに聞こえます。わたしはこの自分に対しては実践的な意味をもつことばを告げるインソンという人物の造形を次のハン・ガンの表現が表しているとも考えます。

自分の人生を自分で変えていくタイプの人たちがいる。他の人たちならまず思いつかない困難な選択をさっさと決めてしまい、その結果に最大限の責任を負う人たち。そのために後にどんな行路をたどろうと、もう周囲を驚かせない人たち。(30ページ)

これはキョンハが語っているというより、ハン・ガンがみずからの眼によって社会に見出したひとびとを表現している、いわば、ハン・ガンの肉声だといった方がよいと思います。

一方、ハン・ガンはキョンハという人物を造形します。キョンハはもちろんハン・ガンそのひとではありえませんが、実践的なインソンに対して、あえていえば、思弁的です。だから二人を結びつけるのには、まず、キョンハの雪中行がストーリーのバランス上、どうしても必要だった、つまり、キョンハがインソンに「つながる」第一歩という意味ですが。「つながる」とは相互的であり、きわめて実践的あるいは現実的な意味をいうことです。「つながる」には過去と現在の関係を探り、亡くなったひとと生きているひととの関係を見出し、語る「方法」が必要です。ハン・ガンが語る「愛」は、「つながる」ことへの根拠や意志を見

出すことの困難さと、それを見出したときに「つながる」がひとりの人間にかかわることであることから、現に「つながろう」、「つなげよう」との意志に変容することの困難、その狂おしさを語ろうとしているのでしょうか。それは、わたしたちの目の前にはどのようにもつながりえないひとびとの世界があり、それは気が遠くなるほど続いていることをも語ることです。「愛」—この不可能な謎にどのように向き合い続けるか。

注

1. a. わたしは、「お貸しする」という訳語に「新鮮な表現」との印象を受け、また、そのような印象を受けたこと自体にハン・ガンの社会にたいする意識とわたしのそれとのあいだに差異を感じています。

また、ハン・ガン著『すべての、白いものたちの』（河出文庫版 斎藤真理子訳 2023年 以下、「文庫版」なお韓国語原版は2016年 同改訂版2018年）を読み、文庫版の「作家の言葉」のなかに「(略)それが私の姉だということを、私の生と体を貸し与えることによってのみ、彼女をよみがえらせることができるのだと悟ったとき、私はこの本を書きはじめた」（文庫版178ページ）との一文をみいだしました。この「貸し与える」と訳出されたことばの韓国語は青柳優子さん（翻訳家 『金起林作品集1 新しい歌』編訳など）に教えていただきました。青柳優子さんによれば、対応する韓国語である〈빌려줌〉は（빌리다+주다→빌려주다の名詞形）で〈빌려주다〉は日本語の「貸す、貸してやる（あげる）」にあたる、よく使われる日常語、とのこと。「お貸しする」もおなじことば（語彙）だろうとわたしは思います。

また、平野啓一郎（1975～ ）による文庫版解説にいう「自己貸与」ということばも、この「お貸しする」—「貸し与える」に通じる語彙と思います。わたしはこの三つのことばにはそれぞれの訳出者、発言者の意識があらわれていて、「異なるニュア

ス」を醸し出しているが、これらはハン・ガンの「肉声」ではないとも思い、ハン・ガンの肉声にまで届きたいなどと思っています。

- b. ハン・ガンの肉声に届くとは「翻訳」にかかわることがらです。本作品の翻訳に関して青柳優子さんから紹介いただいた「ハン・ガンの語彙力」（キム・ジンウック 2024年10月29日付『嶺南日報』青柳優子訳）という記事（以下、本記事）の内容をここに記します。本記事の筆者キム・ジンウック氏は「韓国語の形容詞は多様な表現が非常に多いので、外国語に翻訳するときに韓国人が感じる感情をそのまま移すことは容易ではない」、また、「どんなに格好良く英語に訳しても、韓国人がこれらの形容詞から感じる情緒まで込めることはできないだろう」といいます。本記事で本作品に関して取り上げられていることばはつぎの二重下線部の通り、ふたつです。

- ① ちらちらと雪が降っていた。（本作品9ページの本文冒頭 第1行目の最初の語）

ちらちらにあたる韓国語の原語〈성근〉の意味は、「物の間があいている」、「関係が深くなくて気まずい」と本記事では説明されています。本作品を読みおえてみて、この冒頭の「僅か一語の意味」を教えられると、さらにこの語の読みのうえの意味を考えざるを得ません。つまり、ちらちらの意味をある空間の風景としてだけ考えることでは済まされなくなります。「雪の結晶がおたがいに見ず知らずのもののように距離をおきながら空から降りてきた」というイメージをもったとき、この雪の結晶は、時間性あるいは歴史的な具体性を帯び、登場人物たちの関係の喩となるのではないかと思えてくる、というようなことです。

ハン・ガンが本作品を通じて「人間のたゆみない愛が、どのように人と人をつなげるのか、問いかけたかった」（2024年5月28日付朝日新聞インタビュー）といった、その思いを、ハン・ガンは本作品の冒頭に、冒頭だからこそ置いたのだと考えてみたくなります。

それとともに、わたしは本文中(3)-(c)-ア-⑦に“「天」から降りてくるこれら（自然）は「地」に至ればその形態にかかわりなく、人間とどのようにかかわろうともそれとは別個に天地の「循環」のなかで再生されている、歴史的、具体的でありなが

「非歴史的あるいは通時的、さらには超越的なものとして成立している、そのようなイメージで語られているように思います。」と書きました。なお、「循環」という訳語の原語を青柳優子さんにお伺いしたところ、漢字語とのことでした。

そのうえで、雪の結晶を上記のごとくに喩として考えることは、自然のなかで懸命に一生を過ごすわたしたちの命の一瞬間の姿をとらえうるというだけではなく、そのわたしたちの社会的な関係性、すなわち、わたしたちひとりひとりがなんらかの「つながり」のなかに身をおいているということ、そして、そこには共生ということ、矛盾ということも内包しながら、とらえうるといふことだとも思います。また、循環はわたしたちの外部にも内部にも厳然とありながら、わたしたちはそれを、内面化をもしうる、してきたとして語られてきたことでもあります。

② 世界と私の間に涼やかな境界が生まれる（本作品 26 ページ）

涼やかなにあたる韓国語の原語<서슬한>には、「奥まったところに隠れている、静まりかえって寂しい」という意味がある、また、この原語は「美しく、寂しさを感じさせる形容詞」だと本記事にはあります。とはいえ、ここで、たとえ「涼やかな」が原語を十分に訳しきれてはいないことばだといわれたとしても、やんぬるかな、わたしにはその代替案をもちだす力はなく、「不達感にまつわる寂しさ」とでもいえるイメージを語るほかありません。

2. 白樂晴・李南周「特別対談 2025 年体制、いかにつくるべきか」（『創作と批評』2025 年夏号 日本語版 翻訳者 青柳純一・青柳優子）をご一読ください。（2025.9.22 検索確認）

<https://magazine.changbi.com/MCMUI/item/1278?lang=jp>

3. 加藤典洋（1948～2019）は『戦後を戦後以後、考える ●ノン・モラルからの出発とは何か』（岩波ブックレット NO.452 1998 年 以下、『戦後以後、考える』）の「はじめに」の冒頭に、つぎのように書いています。

今日は「世界を引き受けるとはどういうことか」という話をしようと思っています。（略）これまで世の中とか社会について考えてこなかった。そういう

一人の人間が世の中のこと、社会のことを考えるようになるとして、そこに起こっているのはどういうことだろう、という話をしてみたいのです。

わたしは、加藤のいう「世界を引き受ける」にインソンのことば「とりあえず私は続けているから」をなぞらえ、インソンはキョンハに対して「これから世界を引き受けていこうと思っているからね」といっているようだと思いはじめています。ハン・ガンが書いたインソンのこのことばは、あるいは、インソンみずからも体験した「自己愛」の破綻とそれに対する思索の果てに見出したキョンハへの「愛」のことばとして語られているのかもしれませんが。そして、わたしはハン・ガンの思索とことばは、幾人ものインソン及びキョンハとして表象したひとびと、つまり、インソン以外のインソン、キョンハ以外のキョンハに及んでいるにちがいないと思ってもいます。

記憶の継承、つながりに関して、「バトンをつなぐ」という表現があります。この表現の問題点は、バトンはつながれるものという前提のもとで語られ、あるときは、バトンはつながっているということをも主張するための根拠とされてきたにすぎません。しかし、問題は、だれがなにをつなごうとし、なぜつなごうとするのか、また、なにをつなごうとせず、なぜつなごうとしないのか、とわたしは思います。「バトン」は既成のかたちあるものではありません。加藤典洋が先の講演のなかでつぎの通り述べています。

「戦争体験をどう伝えるか」——これは戦争体験というバトンをいま、もっている人の問いです。でも、もし戦争体験の“継承”が問題なのなら、その問いは、もう「どう伝えるか」ではなく、「どう受けとるか」とならなくてはダメなんじゃないだろうか。なぜなら、戦争を体験した人、伝えようという人はだんだん死んでいく。三〇年もたったらもうほとんどいなくなっているに違いない。「一粒の麦もし死なずば一粒のままにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」というコトバもある。いまバトンをもっている人はそれを手渡そうとするのではなく、そのバトンをいったん地面においたほうがいい。「戦後は一度死んだほうがいい」というのは、その

意味です。いったんこのバトンが地面に置かれたら、受けとる人間はそれを受けとる理由を自分で見つけなくてはいけないし、自分に必要な人間が、自分のイニシアティブで、そのバトンを拾い上げることになる。そういう「イニシアティブのバトン・タッチ」がなければ、この“継承”は、縮小再生産にしかないんじゃないだろうか。（『戦後以後、考える』3-4ページ）

加藤が「戦後は一度死んだ方がいい」と刺激的なことばで語ったことを、いま、それとして論じることがわたしにはできません。ただ、加藤が「戦後以後」という表現をするには理由があるとは思っています。ここでは「戦後」とは「戦争体験」者が敗戦後に向き合うことになった自意識、すなわち、「戦後」という意識のことでもあり、「戦争体験」をもちえないものにとって「戦後」を考えるとどういうことなのか、という問いもあるのではないかと妄想しています。

なお、話が横っ飛びしますが、加藤をめぐる論考に関し、川副博嗣（1999～）による「社会問題と自己の関係—加藤典洋をめぐる—」（京都大学総合人間学部 文化環境学系 学位論文 2024年1月18日提出）をあげておきます。つぎのアドレスで無料公開中（2025.8.31 検索確認）。

https://note.com/hirobiro_note/n/n489b2978bbf8
わたしはこの論考を『加藤典洋とは何者だったか？』（編集グループSURE 2025年）で知りました。

余白に

1. 上記の長々しい文章の大部分は、ハン・ガン『別れを告げない』の一感想、いわば第一印象です。

そして、このようなわたしの「感想」を補うためにさえ、まだ、まだ、探り歩かなければならないたくさんの方がいらっしゃいます。

『別れを告げない』に、ハン・ガンがインソンに脱「伝説」の、石を脱ぎ捨てて躍り出た女性の運命を語らせる場面があります（219-220ページ）。以下、そのなかの一節です。わたしは、ここでもハン・ガンはインソンとキョンハの関係について語っていると印象を受けました。

石になった足を引きずって何歩か上る。しかしま

た何度か振り向く、今度はふくらはぎまで石になる。重い両足を引きずって女はさらに坂を上る。峠を越えたら生き残れる。そこで振り向きさえしなければ。けれども必ず顔をめぐらすのだ。膝の上まで石になったらもう、なすすべはない。すべての家とすべての木の上に満ちた水が引くまでそこに立っている。骨盤と心臓と肩が石になるまで。見開いた目も石の一部になって、もう血走ることがなくなるまで。日と月が何千回、何万回と過ぎていく間、雨雪を浴びつづける。何を見たから？ そこに何があったから、何度も振り向いたのだろう。

石になっただけで、死んだわけじゃないんですよね？ （略）

そのとき、まだ死んでなかったかもしれないでしょ。だからあれはつまり……石でできた抜け殻みたいなものですね。 （略）

殻を脱ぎ捨てて、女は去ったんだ！

インソンの、「まだ死んでなかったかも」ということばから、なぜだか、オスカー・ワイルド（1854～1900）の『幸福な王子』の魂の話など思い出します。そして、それよりも、わたしは、ハン・ガンの描く人間に感じる「儚さ」、そのようにみえるがそれに拮抗し上回ろうとする人間の強さのようなものを描こうとするのが、ハン・ガンの何によるのか、あるいは、読み手側であるわたしが負うべきおのれの「感覚」に起因するのかなと思います。そして、このわたしの疑問は、ハン・ガン自身の体験している「歴史時間」とそこから紡ぎ出された「社会」や「歴史」への視点、それらをめぐり発されたことばをくぐらずには解決の糸口を見いだせない、そんなことをわたしは自分が淡い夢の中にいるのかもしれないと思いながら考えています。

目のまえの奇岩をみて、人間の抜け殻だという話は、これまで聞いたことがあるようなないような。ひとが石になり石に神性が宿るといような話はいくつかありましよう。あるいは、人間のために道普請をしていた鬼神が朝日ののぼるまで仕事をし、朝の光を浴びて石になったといような話とか。あるいは、六地藏などはその石の神性にもつながる系統のはなしなのか。そうだ、柳田国男には『石神問答』があった。

シャクジン。シャグジ。サグジ。サゴジ。オシャ

モジサマ。シャグジ—道祖神—地蔵尊。

2. 「石」を考えていたとき、FMラジオでエストニアのシンガー・ソングライター、マリ・カルクン (MARI・KALKUN) の「Kui Kivid Olid Veel Pehmed (When the Stones Were Still Soft)」(アルバム「STORIES OF STONIA」2023年)という曲を紹介していました。曲名は「石がまだやわらかかったころ」と訳せます。言われれば、地球時間において、また人間ひとりの一生の時間においてもそんな時期はあってよいと思い、また、ありました。“石っこ賢さん”とあだ名されていた宮沢賢治もそんなことを考えていたのか。

賢治がみずからの詩に曲をつけた「イギリス海岸の歌」のなかの、よく知られているつぎのことば。

Tertiary the younger tertiary the younger

Tertiary the younger mud-stone

なみはあをざめ 支流はそそぎ

たしかにここは修羅のなぎさ

(引用は、『校本宮沢賢治全集 第六巻』654ページによる)

2025年11月25日

(さとう ひろあき 見当見習)

乾坤眼に入って新なり、獄中の秋水

馬淵浩二『幸徳秋水』を読む

川村 邦光

私には力量なく、ここで批評の域に達しないだろうと考え、言い訳になるが、馬淵の『幸徳秋水』（ミネルヴァ書房、2025年）を媒介にして、日々思っている事を綴ろうと思う。多くは独り言めいたものになるだろうが、了承していただきたい。

まずは師弟関係である。師匠の中江兆民から受け継いだ事、「長く影響するのは基本的な態度、あるいは生きる姿勢」、それがすぐさま発揮されるのではなく、それなりの歳月を経る中で血肉化されていくのだろう。だが、兆民の「楽天的なれ」という教えには背くことになる。ペシミスティックではないにしても、病弱という脆弱な身体的状態のせい、自らを追いつめていく性急さが濃厚にあった。堺利彦は『楽天囚人』と題した獄中記を著わしたように、運動で楽天的を心掛けていた。

秋水は師匠の兆民に幾度か背いているが、これは「功名心」のゆえであろうか、師を乗り越える、また時代の先陣を切ろうとする進取性、ラディカリズムとも言えるのだろうか。秋水が幾分でも楽天的になるのは、処刑の前であろうか。死を思い、自然の流れに身を委ねるという心構えを述べている。だが、それは強い死でしかなかったのだ。兆民の晩年、またその死後には、『兆民先生』を書くなど、恩義を尽くし、唯物論者としてその思想を受け継いでいる。

私は師匠として挙げる人がいないわけではないが、あまりというか、ほとんど師匠だとは思っていない。幾度も酒を飲み交わし、話をしているが、どうも何を話し、どんな議論をしたのか、とんと覚えていない。不肖の弟子といえ、それまでだが、『歎異抄』の「親鸞は弟子一人ももたずさふらふ」という言葉を口にしてきたため、師匠とは思わずにいたのだろう。同行同朋という姿勢、それを教えられたのだとすれば、師匠という事になるのだろう。

平民社という場、『平民新聞』（週刊・日刊）というメディア、それを担った同志達との関係、秋水はどのように位置していただろうか。兆民も同志ではあろうが、やはり師であり、先生であった。同志としては、堺利彦をはじめとする、平民社の面々である。

当時の社会主義者達、また主義者全般は、家父長制的な男性支配、ホモソーシャルな関係が濃厚であった感は否めない。『荒畑寒村』を書いた後、ミネルヴァ書房のPR誌『究』（No. 143、2023年）に載せた「社会主義者と写真」を誰も読んでいないだろうから、あげておこう。

主義者の集合写真

荒畑寒村をはじめとし、幸徳秋水、堺利彦、大杉栄などの社会主義者はかなりの写真を残

している。一九〇一年創立の社会民主党発起人の記念写真では、左から安部磯雄、秋水、片山潜が前列に椅子に坐り、河上清、木下尚江、西川光二郎が後列で立つ。二列に並列した構図である。後列中央の木下、あるいは前列中央の秋水が中心になっていると言えるかもしれないが、平等な同志的關係を表象していよう。

一九〇八年、金曜講演会の屋上演説事件で処罰され出獄した後、堺が中央に立ち、山川均と大杉が左右に椅子に坐って記念写真を撮っている。堺を頂点とした三角形の構図になっている。これは父親を頂点に左右に母親と子供を配置する、西洋の家父長制家族写真と同じ構図である。堺を家父長、山川・大杉を子供となぞらせることができる。

ホモソーシャリティと家父長制

社会主義者たちはなけなしの金を捻出して、写真撮影をしている。西洋のモダン文化の享受であるが、明日をも知れない身だとする緊張した意識のもと、同志としての結合を永続的に記念して、反権力の主義者としての痕跡を刻印しておきたいとする切なる願望があろう。結社・団体の設立、集会、入出獄などの送迎の際の撮影が多い。

それにしても際立って男ばかりだ。平民社関連の写真には女性が見えるのも少なくはない。とはいえ、女性は排除されないまでも、あくまでも従属した下働きにすぎない。男だけの麗しい濃密な同志的な結合、ホモソーシャリティが主義者の集合写真には圧倒的に充満している。そこにはまた、指導・服従という師弟關係が貫かれ、特にポリシェヴィキの体質と言おうか、第二次共産党以降ではコミンテルンと支部との關係のように、垂直的な権威主義の家父長制が濃厚に支配し続けていた。それは今年創立百年を迎える共産党も無縁ではないだろう。

自由結合のアナキスト

平民社から分岐したアナキスト大杉たちの集合写真にはこうした傾向があまりなく、水平的な關係を志向していたようだ。一九二一年、第二次『労働運動』が創刊された頃、左から近藤憲二、竹内一郎、岩佐作太郎、高津正道、野枝、大杉、近藤栄蔵の順で並列した写真を撮っている。アナキストはポリシェヴィキと異なって、個々人の自立を重視し、脱中心的・自由結合的で、権威主義的な家父長制の組織を作ろうとしなかった。

子供好きの大杉と野枝、娘たちとの家族写真も多く残されている。一九一六年の日蔭茶屋事件以降、大杉は野枝に身も心も頼り切っていたためか、大杉の家族写真は西洋風の三角形の構図ではなく、おおよそ並列した構図で、開放性がある。大杉、また野枝はアナキズムを心身ともに体現していたと言えよう。

写真は単なる過去の残影ではない。表情やポーズ、衣装、構図には当時の意識とそれを具現した実践、すなわちイデオロギーがリアルに表象されており、貴重な歴史資料として発掘し読解することが求められよう。

「社会主義者と写真」であげた、1898年の社会民主党創立の記念写真をあらためて見ると、洋装が前列、和装は後列になっているが、これは写真師の美的感覚による注文だろうか。保守と革新の区別だろうか。若い河上と西川が左右両端に立ち、次に若い秋水が前列中央、その次に若く同年の安部が前列左端、木下が後列中央、最年長の片山が前列右端といった配置、一応長幼の序であり、儒教的スタイルと言える。後列中央に立つ木下に着目すると、秋水と片山の3人で三角形をなしている。ここから家父長制的スタイルを読み取る事ができる。幹事は片山と木下、木下を立てているようである。実質的にリーダーシップを取ったのは秋水、秋水を除いた5名がクリスチャンであり、非クリスチャンの秋水を牽制しつつ、抱き込もうとしているのだろうか。後に、片山と西川とは路線対立するにいたる。社会民主党創立後、すぐ加わった堺とは終生の盟友になる。

1904年の週刊『平民新聞』一周年の記念写真は縦にした菱形の構図である。平等の関係の配置と言えそうだが、頂点に堺、その下左に秋水、右に西川、その下に石川三四郎、長幼の序といった配置である。さらに、秋水、堺、西川の3人で三角形の構図をなっており、堺が家父長的存在として頂点に位置し、両脇に子息的存在として秋水と西川が控え、下に年少の石川が椅子に坐っているという、近代家父長制型でもある。

1907年頃撮影の日本社会党員の記念写真。12名がおおよそ二列に並んでいる。前列中央の椅子に坐った秋水、右端に堺、後列では秋水の左脇に西川、右脇に大杉栄である。秋水が顔と視線をやや左に向けているのに対して、他はやや右に向けている。孤高をかこっていると言えなくもない秋水であろう。同志に飽き足りない何かを抱えて、先鋭化していく事になるろう。

秋水は前年に帰国し、「世界革命の潮流」と題して舌鋒鋭く演説した。日刊『平民新聞』が刊行され、秋水は第一面に「宣言」を載せる。秋水が堺に代わり、ヘゲモニーを握ってリーダーシップを取るようになったのだろうか。第2回党大会で直接行動派の秋水が議会政策派の田添銑二と論争し、熱烈に支持された。記念写真の配列はこの状況を象徴していよう。秋水はすぐれて党派的だった。ここで党派的という事は教条的、閉鎖的ではなく、尖鋭であり、ラディカルであり、権威的なものに絶えず挑み、挫折・敗北に屈しなかったという事である。

秋水は文筆・言論の人だという事になるろうか。直接行動・ゼネストを唱えながらも、状況をうかがって待機し、確かに労働運動を目指しはしなかった。社会主義・革命理論を展開するでもなく、実践的でもなかった。著述やアジテーションを通じて、状況を開示し、行動を促した。理論的演出家というところか。それが秋水の政治実践だったのだろうか。運動といういわば演劇の舞台を設定した。その間にコスモロジカルな、時には孤絶した境地の、あるいは忸怩たる想いを吐露した漢詩を挿入して、ドラマティックにしている。それは生のモンタージュという方法と言えよう。そして、捏造による死刑判決を、天命を全うできない、あるいはこれが天命だと、宿命、もしくは必然として受け入れたように、自ら書いている。「陳弁書」は裁判において無効だったが、秋水の畢竟の思想を表明したものとして、大杉や石川啄木などに受け継がれていっ

た。

無政府共産主義（アナキスト・コミニズム）という思想に徹しようとしたが、それは体系化、あるいは教条化されることなく、未完だった。とはいえ、無政府共産主義とはそのようなものとして捉えられ、運動として展開されるものと考えられていたかもしれない。思考の運動体が無政府共産主義という思想なのだろう。それゆえ、演説、執筆、翻訳、新聞の刊行という作業からすると、実践の人だと言えなくもない。政治行動などはその一部なのだろう。

それにしても、一粒の麦、たりえた事は確かだろう。石川啄木は秋水の「陳弁書」を書き写し、詩作ばかりではなく、行動においても大きな転換に遭遇した。堺などの社会主義者達の幾人かは冬の時代に雌伏し、それを打破しようとして蠢き始めた、大杉栄と寒村が突出していく。1920年代に入り、一方では共産党の創設、他方ではアナキスト達の労働組合の形成。大杉はその死ばかりでなく、女性関係でも、秋水と酷似した末路を辿って、あらためて秋水と繋がる記憶を強めて潜行させていったのだろう。いふなれば、大杉の中に、あるいは大杉とともに、秋水も生きている。

秋水は悲運・悲劇の人だったろうか。当然そうなのだろうが、もう少し生き延びていたならどうだったろうか。秋水は堺宛の手紙（1910年11月10日付）に「獄中絶吟」と題された漢詩を贈っている。「昨非皆在我／何怨楚囚身／才拙唯任命／途窮未禱神／死生長夜夢／栄辱太虚塵／一笑幽窓底／乾坤入眼新」〔昨の非は皆我に在り／何ぞ楚囚の身を怨まん／才拙くして唯命に任かす／途窮すれど未だ神に禱らず／死生は長夜の夢／栄辱は太虚の塵／一笑す幽窓の底／乾坤眼に入って新なり〕。

私はある時期から漢詩がどういう訳か好きになった。大袈裟な表現でありながらも、歯切れのいい、しみじみとした情感を籠めた表現だからだろうか。「乾坤眼に入って新なり」、秋水の眼に世界は新たにどのように映ったのか、無念の境地が浮んでくる。

確実な死期が迫り、「死刑の前」を書き始めるが、未完になった。「冤枉の歴史」は「歴史の特色の一」だと冤罪について述べ、死に臨む所感を記す。

「私は必しも強〔い〕て死を急ぐ者ではない、生きられるだけは生きて、内には生を楽しみ、生を味はひ、外には世益を図るのが当然だと思ふ、左りとて又た苟くも生を貪らんとする心もない、病死と横死と刑死とを問はず、死すべきの一たび来らば、十分の安心と満足とを以て之に就きたいと思ふ。／今や即ち其時である、是れ私の運命である。」

こうした文から、「すべてを運命と観ずる東洋的な諦めの境地」（塩田庄兵衛「解説」塩田編『幸徳秋水の日記と書簡』未来社、1954年）が指摘される。理不尽にも強いられた死である。東洋的諦念と言え、何とはなく解った気にさせられるが、幾重にも織り込まれた情感や感慨を解きほぐしてみるべきだろう。志を持続させようと、淡々と説き続けようとしていた秋水である。殺すなら、殺してみろと意気込んでいたかもしれない。

だが、朝早く、刑吏が迎えにきた際にはうろたえ慌てた事だろう。書きかけの「死刑の前」

の原稿に未練があっただろう。監房から処刑場への短い道、刑場でのわずかな時、絞首の綱を掛けられた後から落とされる寸時、どのような想いが去来したのだろうか。元素に還ると言いながらも、死してもなお、闘争を継続するとする意志、それ以外にありえないだろう。秋水の場合、特殊な状況だろうが、凡人は死期が迫っても緊張感もなく、だらけながら日々の煩わしさに囚われて、ふと気づけば、取る物も取りあえず、冥土への道を歩んでいるのだろう。

本書では、章末に秋水の漢詩を配して、秋水の提起し運動し続けた状況を重層的に構成している。それは各章の状況の中断と連続という流れを統合し、めりはりのある構成にしていよう。秋水の漢詩は自分の生の補足でも、修辞や虚飾でもなく、状況の表象として、読まれ発見されるべきものなのだろう。私は『MFE』5号に「秋水と監獄の自由」と題した文を載せたが、これはその補足のようなものになってしまった。本書から、過去の遺物を掘り起こして、未発の契機を現在の中に位置づけて批評する「故人史」のようなものを構想していたのであったが、果たせなかった。

遅ればせながら、栗原康の『幸徳秋水：無政府主義宣言』（夜光社、2024年）を読んでみた。おもしろく、時には刺激する駄弁が擬態語も用いて、無声映画の弁士あるいは軍談語りの講談師さながら頻発している。ついつい乗せられて読み進めてしまう。遊び呆けていた駄目な秋水が書かれている。志士仁人とは飲む・買うの人でもあった。男の志士仁人は多かれ少なかれ皆そうだった。

秋水の心情を大いに想像して、あるいは妄想して言動を描き、自ら合いの手を入れて、めり張りを付けていくところに、臨場感を溢れさせる情趣を生み出しているのだろう。さらに、体言止めや呼びかけなど、文のスタイルによってスピード感を増している。読ませる。だが、『大杉栄伝：永遠のアナキズム』（夜光社、2013年）と比べて、冗漫な感じは否めない。特に後半、大逆事件前あたりから、勢いのいい言葉はあるものの、弛緩した調子になっている。

内山愚堂が管野すがに「ダイナマイトならもっているぜ」などという所、「ちなみにこの会話、官憲の資料によるものなので、真偽のほどはわからない」と記している。学術書の体裁をとっていなくとも、「官憲の資料」はできるだけ吟味して批判的に用いるべきだろう。検事「放談、が面白いからといって、「真偽のほどはわからない」ものをそのまま使うのは、権力に加担する事になりかねない。

秋水は死刑を絶頂にして、直ちに終幕を迎える。全体がそこで劇的に断ち切られてしまう。後がないのだ。だが、当然、秋水でも誰でも、その後がある。秋水の死後、いわば故人史、もしくは故人物語が記され、語られていくだろう。死せる秋水が暗殺を志向する同志を走らせたが、そればかりではなく、大杉をはじめとしてその影響を受けて継承した者や批判した者もいよう。秋水の思想・実践の行方に関して、読者へ向けて、言葉を書き留めておく事が求められよう。

天皇制国家の捏造した大逆事件の犠牲者、秋水だけでは、あまりにも天皇制、国家権力の強

固な絶対性を過大評価して強調しすぎてしまう。当時のマスメディアはそのように権力の片棒を担ぎ、天皇制の神聖性を見事に崇高化して浸透させ、人々を束縛するイデオロギーを形成し流布していった。秋水などの1920年代あたりまでの社会主義者は天皇制廃止を重要視していない。革命が成れば、自ずと消えていくだろうといった程度である。

馬淵は「死後もなお継続する大逆事件の呪縛から秋水を解き放つてもよいのではないだろうか」と提起する。大逆事件=天皇制イデオロギーなのである。それを国家もマスメディアも教育し、秋水たちの肉体を媒介にして、人々の心身に浸透させた。そこには秋水の思想・実践が欠落している。サンフランシスコ大震災の時に、眼で見て感激し確信した、無政府共産制（アナルコ・コミニズム）がそれであろう。

天皇制イデオロギーは強権の恐怖政治と自己犠牲の精神を醸成させていった。それは教育勅語や戊申詔書によってばかりではない。絶対主義の天皇制打倒を掲げた、日本共産党の32年テーゼもそれである。戦後の左翼や右翼、リベラリストや文化人・知識人、研究者も、天皇制なるものを後生大事に堅持して自らを縛ってきた。排他と自己満足の心性が培われていった。天皇制国家・天皇制ファシズムという妄想に囚われすぎたとしか言いようがない。無政府共産制イデオロギーは非常時に突発した心性にすぎないのではなく、その基盤として潜在している未定型の心性でもあろう。天皇制イデオロギーとは相容れず、もはや別次元に超越して、それを無視し無効にしていく思想・実践として構想されよう。

実際のところ、無政府共産制にしても、社会主義や、共産主義にしても、一つの固定された理念型があるわけではない。教条主義になる必要はない。時代状況や各自の理解・経験において多様かつ流動的・可塑的であろう。すなわち、歴史的状況の中でどのように思考・実践され展開され、その運動の勢いの志向する地平、もしくは未発の可能性を探し求める事に意義があろう。

どうもまとまりのない事を書き連ねてきたようだ。最後に蛇足を述べておこう。ある新聞紙の書評に次のように記されていた。「この本書の読解を読むとき、私はそのようなく人間>の生と、シベリアにおけるシャマンの生との類似性を、またそのようなく人間>の経験を記す詩の言葉と、神話との類似性を思わずにおれない。神話において主体となるのは人ではなく自然であり、神々であり、宇宙である。その中でなす術もなく生き死にする個々人の生は、ただいつとき授けられた贈与、あるいは受苦としてある」。

この<人間>について、これだけの引用では解りにくいだが、シベリア抑留者が労働の合間のわずかなひと時に流れる川のほとりにうづくまる時、その姿勢は権力から強られる一切の「条件」を放棄し、社会的存在とは異なる<人間>となり、「権力の軛くびきを逃れる「自由」が束の間顕れる」という風に描かれる。

シベリア抑留者はひと時であれ、「自由」になれたのか、絶えずロシア軍兵士や同じ抑留者に監視され、死を余儀なくされる日常が続いていたであろう。とはいえ、書評の対象である詩

人の著書から引用される「直接に人間としてうづくまる場所」をかりうじて見出せたかもしれない。そこで確認できたのは「<人間であった>」という事であり、<人間>それ自体ではない。現在と過去との深々とした亀裂が刻み込まれている。

そうした「<人間>の生」にシベリア・シャーマンの生や「神話」との類似性を指摘している。この詩人はシャーマンと同一視され、その「詩の言葉」が「神話」と似ているとされる。この「神話」で主体となるのが、人ではなく、自然、宇宙、神々だとされる。融通無碍な類比、解釈だ。スピリチュアルなのだろうか、記紀神話、天皇制神話の解説を聞かされているかのようである。この詩人がこんな融通無碍な「神話」と似た「詩の言葉」を書いたとはとうてい思えない。

そして、この「神話」の中で、「なす術もなく生き死にする個々人の生は、ただいつとき授けられた贈与、あるいは受苦としてある」とまとめられている。確かに神話では人が神々の操り人形として、生死を左右される。だが、シベリア抑留者は監視・支配される生を必死に生き長らえようとした一方で、途絶された者もいた。また、横もしくは縦に一緒に並んだ者たちと語り続け、<人間であった>をあらためて噛み締めた事だろう。決して「いつとき授けられた贈与、あるいは受苦」ではありえない。悟り済ましたかのように、運命を天に任せるとか、宿命だと従容として死に就くとか言って、苦楽をいつ時に凝縮させる事もできないだろう。

誰でも具体性に満ちた個々人の生の途上にある。生は「いつとき授けられた贈与」ではなく、それなりに長く続く。「受苦」はたやすく消えず永続する。それは天皇制神話を基底とする社会構造の中で処刑された、秋水も同じである。シャーマンや神話といった表象の中に<人間であった>事は溶解も解消もされない。現在において、必死に形象化した歴史的過去として<人間であった>事が浮き彫りにされている。

秋水は絶筆の「死刑の前」で「死刑は常に恥辱・罪悪に伴へりと断言し得るであらう歟、否な、死刑の意味せる恥辱・罪悪は、其の有せる光栄若くば冤枉よりも多してふことすらも、断言し得るであらう歟」（『幸徳秋水全集』第六巻）と記しつつ、死の間際で「悶え神、のように、もがき続けていたが、権力によって生を断ち切られた。神話から排除され、途上で抹殺された生である。あの詩人の言う「直接に人間としてうづくまる場所」を、歴史の記憶として形成し存続させなければならないのであろう。

（かわむら くにみつ 文筆業）

三里塚と与饒名（永丘） 智太郎の事

新垣讓『地図から消えた「沖縄農場」』から

川村 邦光

新垣讓『地図から消えた「沖縄農場」：空港建設で潰された千葉県三里塚の開拓村』（論創社、2025年）を読んだ。三里塚闘争では、開拓農家が反対同盟から早くに離脱して、条件派になったといった事を聞いたことがあった。『壊死する風景：三里塚農民の生とことば』（増補版、のら社、1971年）で知ったのだろうか。それでも、三里塚に「沖縄農場」があった事は知らなかった。三里塚と沖縄が思いがけない形で繋がっていた。

この沖縄農場は久米島出身、浄土真宗本願寺派僧侶の与世盛智郎を中心にして、三里塚の下総御料牧場の払い下げによって、1946年に創設された。それには45年に設立された財団法人沖縄協会と沖縄人連盟が関わっている。前者の理事に永丘智太郎、後者の会長に伊波普猷、副会長に永丘がなっている。与世盛は旧知の敗戦当時、内務省管理局の嘱託職員だった永丘の協力を得て、共に宮内省や農林省、千葉県庁と交渉しながら、御料牧場の払い下げ運動を推進して、沖縄協会の永丘宛に払い下げの通達が届いた。

それからほぼ20年、66年に新空港建設地として三里塚が頭ごなしに決定された。直ちに三里塚・芝山連合空港反対同盟が結成され、反対闘争が始まる事になる。それは沖縄農場の入植20周年記念アルバム作成の時でもあった。開拓地として狙い撃ちされた沖縄農場では初め反対一色だったが、一転して、条件賛成派になった。借金まみれの農業からの離脱、農業を後継する若者の不在、農林省などの「シルクコンビナート構想」の養蚕事業の中止による挫折が、その要因としてあげられている。沖縄農場の中で、青年行動隊として唯一人闘争を続行したのが、島寛征である。

新垣は話者不明の言葉を援用して、71年に東峰十字路附近で機動隊員が死亡した事、新左翼系の闘争が先鋭化していった事を三里塚闘争の衰退した要因としている。だが、新左翼系党派・ノンセクトとの共闘があったからこそ、闘争が混迷しつつも持続していったのではないか。新空港建設の生け贄とされたのが、本州内の沖縄だった。それは著者が述べているように、現在でもずっと続いている。暗澹として気が滅入るようだが、私にとっては50年以上も前の蒙が一部ではあれ、開かされたような感じである。

沖縄協会の理事、沖縄人連盟の副会長として名の出てくる永丘智太郎（1891-1960年）、1938年、^{よへな}饒平名から永丘に改姓した。この永丘姓は祖父の家名に復帰したとの事である。饒平名智太郎という名には思い当たる節があった。1922年に創設された第一次日本共産党との関わりで出てくる。23年の日本共産党員一斉検挙の直前、『改造』の編集部員の饒平名は中央委員になっ

ている。関東大震災の際、饒平名宅に保管されていた党関係文書は焼失した。

戒厳令下、山川均の指導のもとで、饒平名は共産党第3回大会で総務幹事・常任委員に選出され、いわば党のトップに立っている。翌24年、山川を中心にした意見により、解党するにいたる。私の書いた『荒畑寒村』で饒平名の名の出てくるのはここまでである。同じ沖縄出身の徳田球一と密接な繋がりがあるだろうと思ったが追究しなかった。そこで、饒平名の名を眼にして少し驚いたわけである。

新垣は『沖縄大百科事典』の記事を出しているが、共産党での活動については記されていない。新垣は永丘・饒平名の遺族を探して話を聞く。1919年、改造社に勤務、改造社社長はかつて沖縄の小学校教員だった事があり、その時の校長が永丘・饒平名の父だった。『改造』では、インド、ロシア、満洲、シベリアなどを訪れ、記事にしている。26年、永丘・饒平名は出版社「世界社」を設立し、月刊誌『世界』創刊。

24年の共産党解党から26年の共産党再建の間、何をしていたのだろうか。第二次共産党には加わらなかったのか。『世界』には、青野李吉をはじめとするプロレタリア運動系、佐藤春夫、尾崎士郎、小川未明、芥川龍之介などが執筆した。『プロレタリア芸術教程』『ソヴェート学生の日記』『性の躍動』『恋愛と新道徳』などを執筆・出版。『世界』は長く続かなかったようだ。

28年、永丘家が首里の安國寺住職に託される事になり、弟の智敬が務めている。沖縄戦で智敬は沖縄第62師団・特設警備隊223中隊の隊長となる。牛島第32司令官が南部へ逃げた後、安國寺を拠点にした永丘隊は置き去りにされた。識名のガマで戦うも凄まじい砲撃に晒され、安國寺のガマに移動したが、火炎放射器などに攻撃され、永丘隊は壊滅状態になり、残存者数名で南部に向かい、智敬は糸満の山城のガマで自決した。

永丘・饒平名は37年から拓務省の嘱託職員となり、朝鮮や満洲の移民の入植状況などを調査し、拓務省直営の拓殖奨励館主事、南洋団体連合会会長、大日本拓殖学会理事などになり、海外植民地の労働事情や小作問題などを調査した。1930年代前半あたりに、いわば転向していたのだろう。45年3月、朝鮮研究所創立のため、内務省管理局の嘱託職員になっている。永丘・饒平名の著書として、『比律賓に於ける政策の変遷』『極東ロシア植民物語』『蘭印に於けるオランダの政策』『極東の計画と民族』。

『極東の計画と民族』の序文には「私の眼につくものは「民族」であった。祖国を失った「民族」のいとほしい姿であった。でもかれらは起上がっていた。新しい祖国愛を認識することによって、かれら自身を活かして行こうとする希望と努力を見て、私は感極まるものがあった。／「民族」にも使命がある！と知り得た私の喜びと、これら「民族」の将来を暗示する若干の観察とを茲に纏めておいた」と記す。永丘・饒平名のテーマの一つが民族問題であった。それは沖縄を被支配民族の植民地として認識し、その解放・独立に向けて運動するためだったのだろう。

奈良の図書館に饒平名智太郎著として『沖縄』（三一新書、1956年）、編著に『望郷：農民の風土記・手記』（高木重吉・菊池虎彦・饒平名編、三光社、1957年）があった。前者の著者略歴では、改造

社にいた頃、モスクワ特派員になっていた。戦後、引揚者団体全連の副委員長、沖縄協会理事長、現在、沖縄問題調査会主宰とある。先に挙げた著書の他に『ガンデーと真理の把持』（改造社）がある。後者では、肩書きが沖縄問題調査会会長、中表紙の副題は「南千島・小笠原諸島・琉球」。この琉球篇に饒平名「沖縄よ！何処へ」、伊波南哲「民謡の島、八重山」、島袋栄一「村の今昔（越来村）」、「沖縄からの訴え（伊江島・伊佐浜からの書簡）」。ここには阿波根昌鴻の手紙が2通収められている。

沖縄農場が生まれた46年、『沖縄民族読本』（自由沖縄社）を出す。以下、その序文。

「中年期から私の脳裏にはぐくまれた念願は、民族問題の研究である。印度独立、支那革命、朝鮮及び比島の独立問題、ソ連の東洋民族政策等は、私が最も情熱を捧げた研究テーマであった。／私が、かかるテーマに心ひかれると云うのも、結局は私が琉球に生まれ弱小民族の悲しみを身に沁みて感得したからにはほかならない。私は琉球を愛するが故に、偏狭なる親日主義者とはなり得なかった。私は自らの創意になる評論雑誌に、「世界」という名を冠した位であるから、もとより理念的には世界主義者である。日本の封建主義文化を超克し、世界主義精神を把持する者である。」

「沖縄民族の独立と自治を目指す」永丘・饒平名、日共の民族解放路線とは相容れなかった、あるいは距離を取っていたらう。46年、沖縄協会に払い下げの通達が届いた頃、永丘・饒平名は沖縄への復帰運動にも取り組んでいる。沖縄人連盟はGHQに陳情し、帰還事業が始まり、46年8月から12月までの間に14万人を超える人達が帰還した。

新垣は国会図書館で永丘の『沖縄タイムス』連載記事「難民のころ」(1961年1月11日から18日)を見つけている。永丘・饒平名の絶筆だろう。「郷土を失って帰ろうにも帰れない沖縄の難民を、沖縄協会においてあっせん入植させたいから、特別の詮議で許可を乞う」旨の陳情書をしたためた事、永丘・饒平名自身が夫婦で沖縄農場に入植した事などが記されている。永丘・饒平名自身はほとんど農作業をしなかったが、沖縄農場で農業をしていると書いている。新垣によると、永丘・饒平名の家族が沖縄農場を離れたのが55年、永丘・饒平名は沖縄人を朝鮮人とともに「難民」と規定し、その生活の場を求めて、官庁に入り込んで交渉しつつ、沖縄を遠望していたのだろう。

沖縄と三里塚、どちらにも闘争という字が付く。沖縄は一応1945年から、三里塚は66年7月10日から、いずれも継続中だと言えるかも知れない。以下、二つの闘争について、恥ずかしながら、備忘録風に私が関わった範囲で述べておこう。

沖縄闘争は大学に入った年の70年からである。4・28、これは仙台での二度目のデモであった。教養学部のある川内から青葉通りを下り、一番丁に出て、本部・学部のある片平というコース。そして、片平から一番丁を通過して、勾当台公園まで。これが仙台の一般的な街頭デモコース。この4・28か、その前に学生大会で無期限ストライキが決まったのではなかろうか。70年安保粉砕や沖縄闘争勝利、三里塚闘争勝利などといったスローガンが掲げられていた事だろう。

私はその少し前に45L 2（45年入学文学部2組）の学生委員になっていた。桜の木の下でクラス会が催され、そこで立候補して決まったはずである。私はその際に何か闘争めいた事について話しただろう。後に一緒にデモや遊びをした同級生二人と出会ったのもその時だろう。

沖縄闘争、それは単なるスローガンだけだったにすぎない。すべてにそう言えるが、身近な闘争課題にはならなかった。沖縄まで行って、何かする、現地闘争をするといった発想は全くなかった。基地、それもヴェトナム戦争での米軍出撃基地といった考えしかなかった。この沖縄闘争、返還粉碎とか奪還とか、あとは何だったか忘れたが、スローガン、闘争方針をめぐって、71年頃にはセクト間の共闘が分裂し、内ゲバにまで発展する事になる。後に気づいたが、60年安保闘争の際、沖縄ではアイゼンハワー大統領の訪沖に対して、13000のデモ隊が米海兵隊と対峙して乱闘にいたっている。

三里塚闘争、私はあるセクトの現闘という事で、二度、三里塚に行った。合わせて、4週間ほどだったような気がする。当時、生活費に極めて事欠いていた事も一つの理由である。1回目は大木よね宅強制執行、2回目は駒井野の強制執行の時、いずれも9月だったと思っていたが違うようだ。1回目が71年の7月、2度目が9月の駒井野と大木よね宅の件の時だった。

三里塚に行く際、逮捕されるだろうと、たいしてないのだが、所持物を教養部生用の明善寮に住む友人に預けた。桜の樹が棟の間にあり、春には桜の花びらが部屋に舞ってくる風雅な木造二階建ての寮である。だが、二階から小便の雨が降ってくる。三里塚からは二度とも逮捕されずに無事帰ってきた。民青支配の明善寮に仮寮生という事で、留年して学部生になるまで、寮費を一切払わずに1年半以上住み続けた。貧すれば鈍するという次第で、極めて杜撰な生活ぶりだったが、ありがたかったと今でも思っている。

仙台から東北本線の夜行に乗り、上野で降りたのだろう。キセル、または薩摩守（忠度：ただのり）である。そして、成田まで京成か国鉄の電車に乗り、バスで三里塚へ。バスの窓から草原を眺めていた。そこから記憶にないが、誰かが迎えに来たのではなかろうか。到着地は白檜。まだ団結小屋ができていなかったため、農家に宿泊した。

少年行動隊の中学生の息子がいた。やや大きな農業経営であり、援農をした。私以外に、2人くらいいたはずである。ピーナッツ畑だろうか、かなり広く畝の長い畑の草むしりをした。こういう豊かな土地があるから、反対闘争を続ける事ができるのだろうと思ったものである。夜明け前、牛乳を入れた大きな缶を道路まで運んだ。あと何をしていたのかは忘れていた。三食食べ、夜には風呂に入り、酒でも飲んだのだろう。

9月26日、夜明け前、隊伍を組んで、大清水へ向かう。その途中で、飯場を火炎瓶で燃やした。それから、100人はいなかったと思うが、機動隊と対峙し、竹槍で突撃し、機動隊を打ち破った。これは初めての事だった。どこへ向かっていたのかは解らないが、歩いていると、青年行動隊の車が通りかかり、荷台に山ほど積んでいた、西瓜を数個置いていってくれた。皆で西瓜を割って食べた。それは極めておいしかった。こういう事は鮮やかに覚えている。

『戦旗』(261・2号合併、1971年8月1日付)には、7月の闘争が報じられている。どういうわけか、この一部だけが手元に残っている。この『戦旗』によると、7月25日から28日まで、現地闘争があった。この記事が少し長いが引いてみよう。

26日、午前2時、放送塔より機動隊、装甲車、放水車を先頭に二千名が千葉を出発、数十分後に到着するであろうと放送。全員起床、隊列を整え戦闘態勢に入る。我が部隊は、大清水に通ずる道路をただちにバリケードをつくり阻止戦を築き上げる。その間約20分、きびんな動作と軍隊的指導と規律は十二分に生かされたのである。3時半、バリケードは火をふき、一層強固となる。すでに大清水では機動隊との攻防ははじまっており戦闘は開始された。大清水の戦闘と我々のもえ上がるバリケードに恐怖した機動隊は進入を断念。迂回路をとるため退却。4時には1、2番地の反対側から、その数三千の機動隊で作戦を開始。我がAIF-叛軍は、突撃のとき来たと判断し、単独で(キ)〔機動隊の事：川村注〕の壁に突撃を開始。どの党派、どの部隊も姿をみせず、動こうとはしない。しかし約十分諸党派も動きだし全域にわたって投石戦がはげしくなる。(キ)は数十メートル後退。次に放水車が登場。やむなく我々も後退。(中略)さて公団につづく公園付近で苦戦している京学連、労学連の部隊を援助すべく部隊を移動。我々は攻勢にでてくるキを十五分の攻防のうちに突破、追いちらしたのである。(キ)はタテや武器をすててにげちったのであった。(中略)放送塔は落ち、逮捕者約三百名、負傷者約八百名。

紙面には4葉の写真が載せられている。キャプションは「上から農民放送塔と死守部隊の上げた同盟旗。7・25闘争を前に最後の決起集会。燃え上がるバリを前に武装デモ。機動隊と対峙・我がAIF軍団百名の機動隊突破し粉碎する瞬間」。AIFは反帝戦線の事、どこの党派も「軍団」と言えるほどのものではないが、他党派に比べて、AIFは圧倒的に動員数が少なかった。

そして、「同志諸君！よみがえった共産主義者同盟—反帝戦線は以上の闘いを展開し、終始激闘の先頭に立ったのである。(中略)すぐれて三里塚闘争に課せられた党的任務は、八派の分解にするどくせまり、なにがなんでも蜂起をめざす単一非合法党建設を大胆に遂行すべき実践的闘いであったのである。／それは蜂起、臨時革命政府樹立へとつきすすむべき政治、組織、思想的な基準を具体的な武装闘争の推進によってうちたてていくことである」、これが総括のようなものである。「武装」といっても、プラスチックの割れやすいヘルメット、竹槍、石、鋏の柄、火炎瓶であり、縄文・弥生時代程度で、銅剣・鉄剣・馬の古墳時代にはほど遠かったのだ。

2度目は、白柁の完成した団結小屋に泊まった。どのような経路で行ったのかも、どのくらいいたのかも忘れていた。小屋内は人で溢れていたようだ。2週間ほどいたような気がしていたが、1週間程度だったかもしれない。

9月16日、駒井野鉄塔の攻防である。あまりよく覚えていないのだが、やはり朝早くから

動いていたのだろう。前と同じ、100人位の隊列だったろうか。鍬の柄を背負い、先端を斜めに切った竹槍を手にしていただろう。駒井野で機動隊を攻撃する際には、まずモロトフカクテルを投げ、竹槍で突っ込んでいく。この時は楯を構えた機動隊が楯を開けて開き、先頭から数列が引き込まれ、負けて終わった。30名位拘引・逮捕されたのだろうか。

それから、駒井野砦の前で陣を張った機動隊と対峙した集団に加わった。合戦といった雰囲気だった。青社同解放派の人から火炎瓶を受け取り、機動隊の隊列に向かって走り、火炎瓶を投げた。そして、引き返す際、ヘリから落とされた催涙弾が地上で破裂し、眼に催涙弾の粉末が入った。眼が開けられなくなって、立ち止まっていたが、誰に手を引かれて、救援所というか、テントを張った簡易な野戦病院めいた所に連れて行かれて、ホウ酸水で眼を洗うと、見えるようになった。それからセクトの隊列に戻ったが、もはや10人ほどしか残っていなかった。

機動隊が攻めてきたため、藪の方に向かって逃げた。その途中、なんと古賀信夫さんたちと会った。宮城女子大の教員、ルカーチの美学研究者で東北大に非常勤講師として来ていて、留年した年に授業を受けた。ほとんど出席しなかったが、単位が浮いた。古賀さんは縁のあった日中連帯に加わっていて、女学生3人ほど一緒だった。実に互いに驚き極まる邂逅であった。どこまで一緒だったろうか。藪中に逃げる前、深く長い溝になっている所には、大量動員した第四インターの赤ヘルや中核派の白ヘルが割られた物も混じって、^{つわもの}兵どもが夢の跡、風に、無惨に夥しく残されていた。

それからどうしたのだろう、夕暮れ近くになり、鉄塔が倒され、数名の死者が出たといった事が伝えられた。何かしなければいけないという想いが出てきたが、こんな少数で何らできる事はないと思いながら、原っぱもしくは道路をうろついていた。ついで、機動隊員が3名殺されたという報が入ってきた。喚声を挙げただろうか。疲れていて、それどころではなかったかもしれない。しばらくうろついて小屋に帰ったのだろう。

その4日後、大木よね宅が突如として強制執行に見舞われた。この時、私は畑仕事を手伝っていた。これが知らされると、地下足袋を履いた野良仕事スタイルで駆けつけると、強制執行は終わっていた。ちなみに、私の記憶では、この大木よね宅強制執行が駒井野鉄塔攻防の前だったと思っていたがそうではなかった。

三里塚から仙台に帰ると、分派闘争が起こった。烽火派と赤報(RG)派に分裂。関西系と神奈川系の分派という事だったろうか。仙台では、前者の東北大医学部系と後者の東北学院大系の分裂という事になるろうか。私はどちらからも誘われなかったというか、無視されたのだった。ただ東北学院大系には知り合いがいて、今は動かなくていいと言われ、宙ぶらりんの状態になり、このセクトとは無縁になった。何だか情けない事だったが、`みんなどこへいった、といった状況がしばらく続いた。数多くの遺漏があろうが、こんなところである。

新垣の著書は三里塚闘争の隠れた遺産を浮き彫りにしている。三里塚と沖縄との忘れ去られた繋がりを知らされた。反対派／条件派といった、国家権力が描いた分断と排除の構図を解き

ほぐし、連繋・連帯の方途を模索する契機を提供する、すぐれてクリティカルな「幽霊アーカイヴ」のひとつとなろう。

(かわむら くにみつ 文筆業)

MFEの対話

MFEは、書くことと読むことの連なりを大切にしたいと思っています。書くことは読むことにつながり、読むことが思索や対話を生み、もうひとつの（あるいはいくつかの）書くことへとつながる。こうした行為の連なりから、新しい場が立ち現われてくるのではないのでしょうか。連なりを作る回路のひとつとして、「MFEの対話」のページを始めます。平たく言えば読者のページ。どなたであれ、過去号の文章たち（あるいはその著者たち）へのメッセージを編集委員会 (mfe.editor@gmail.com) にお寄せください。それがまた、新たな場の起点とならんことを。

川村 邦光

老いの小文（2）

街路を歩いていると、金木犀の匂いが漂ってきます。いい日、旅立ちではないが、ふとどこかへ行きたくなります。「旅人とわが名呼ばれん初しぐれ」、1687年（貞享四）10月末、松尾芭蕉が関西へと旅立ってまとめられた、紀行文『笈の小文』の初めの方に出て来る句です。陰暦の10月末、今では11月末か12月初めの頃、初時雨の寒々とした時です。私はどこかへ旅立つ予定は全くなく、近間をぶらつくだけです。

10月28日、奈良地裁で山上徹也さんの裁判が始まりましたが、私はある診療所に行きました。この診療所は山上さんがかつて住んでいた所のすぐ近くにあり、山上さんが行っていたかもしれません。また、近くにある眼科診療所には来ていたと、その医者が語っていました。大阪拘置所から奈良地裁まで、山上さんは車で護送されます。この往復が山上さんの旅でしょうが、恐らく外を見ることができないのではない

でしょうか（2026年1月21日、奈良地裁で無期懲役の判決が出ました）。

発酵・熟成 さて『MFE』6号、今号もぶ厚い、暇に任せて、独りで呟きながら、読みつつ書いていくことにしよう。特集「ひとの話を聞いて書くことについて」、話を聞く、書くという行為が繋がるのは、やはり特定の世界での事でしょう。ジャーナリズムやアカデミズムの世界は公開を目指し、警察・公安・検察の世界は秘匿を固守するというところでしょうか。そういった物のアーカイヴ、後者はきちんと整理・保存・管理されているだろうが、公開される段になると、肝心な所が黒塗りされます。前者は少し公開・保存され、大半は消えていくだろう。私もまだ持っているが、録音テープは劣化していくだけでしょうし、それを起こした記録は埋もれ散逸していきま

す。古川岳志「ひとの話を聞いただけで終わってしまった話」、身につまされる話です。30歳前後の頃ですから、40年以上も前、

青森県の岩木山北麓のやや山に入った赤倉という霊場で、巫女さんのお堂に泊まり込んでいた事がありました。一つは菊之道神道教社、教主は須藤法信（フジ）、もう一つは赤倉山金剛寺、堂守は田辺照蓮（イト）。前者には夏と初冬、後者には夏、3年ほどにわたって世話になりました。どちらのお堂でも、巫女さんの仕事を少し手伝ったり、訪れた信者と山中の霊場に登ったりし、話を聞く事がありました。録音はしませんでした。当時、調査めいたものに縁遠くなった気がさし、山中のゆったりとした何気ない生活に意義を見出していたようです。

この頃、私は満期退学という事で大学を去り、予備校に就職していました。仕事はやや忙しかったのですが、余裕めいたものができ、テープ起しをして、あらためて巫女の世界へ向き合いました。対象があり、当事者から得た資料や文献が集まっても、どのような視点から論じていくかがむずかしい。誰も目を付けていないテーマなどほとんどなく、その隙間を見つけ、一定の視点から考えるしかなさそうです。時が経てば、聞いた話も発酵し熟成しているかもしれません。

記憶と語り 語る現在はこれまでの生活の中で蓄積され編成された記憶に裏打ちされていよう。まずはそういう物として聞かざるをえない／読まざるをえない、そこから対話やら、解釈やらが始まるのだろう。

「記憶の汚染」、子供も大人も変わらないのであり、大人のほうがより「汚染」されているのではないのでしょうか。本当の事があり、汚染を取り除けば、本当の事が現わ

れると信じている実証主義的な人がいるのだろう。いかにも実証的に成果を出しているらしい発達心理学者といった人、徒労で暇だれではないのでしょうか。私なら、記憶の錯綜性・重層性と言いたいが、一定の時の経過した状況において、話す／書くには少なからずその手間に違いがあろうが、話し手／書き手は瞬時に、時には時間をかけて、選択・捨象・隠蔽し、拡張させながら、再編して流動的に表現するのだろうし、それを聞き手／読み手は同じようにして捉えて対応するのだろうと私は思っています。

「その時語られた沈黙を含む子どもの話には、それが語られた当時の社会的・文化的な文脈の中で再構成された記憶が反映されており、歴史性や社会性を帯びたものが含まれている」(p.27)ということになるだろうが、聞く（読む）前提としての「記憶に対する信頼」、この信頼という言葉、あまりに一般化しすぎだと私には思われます。この信頼は崩れたり、裏切られたりする事もあるだろうし、それはそれでよしとし、仕方がないでしょう。子供であれ大人であれ、信頼はひとまずおいておき、話された／書かれた事をそれ（事象自体）として受け止めて、聞く事／読む事を今ここでしているのではないのでしょうか。自分／相手との（対自／対他関係での）駆け引き（もしくはずるさ）が話や表現には絶えずつきまとい、そこにおもしろさもつまらなさもあるでしょう。

フィクションの帯びるリアリティ 『肉体の門』のうちで、見たのは鈴木清順監督・野川由美子主演のものだけです。初めの

シーン、あったようだが、やはり忘れていたようです。1970年前半、『けんかえれじい』をはじめとし、鈴木清順の映画は人気がありました。『けんかえれじい』の後半では、喜多方中学校と会津中学校の生徒が喧嘩します。終わりのシーンはカフェーの女給が野川由美子、客として北一輝めいた人物を登場させ、2・26事件が起こった事を匂わせ、主人公の喜六が東京へ行くんだと叫び、「昭和維新の歌」が流されます。

今では何でもエヴィデンスはあるのかと居丈高に叫ばれ、ファクトなる物があげつらわれています。エヴィデンスの発明／捏造、「なかったこと」にされる物、隠蔽される物が多くなっているようです。これも実証主義的専制体制でしょう。話し／書く事は事実を生み出し、蓄積されて、アーカイヴを形成することも期待されるでしょう。フィクションも歴史的状況の中でリアリティを獲得していくでしょう。火油！

声とこえの狭間で 私の育った地では、`おし、`啞者の事を`うっち、`と呼んでいました。どのような言葉が語源なのか、`おし、`から`うっち、`に訛ったのかどうかは解りません。私の家の近くに`うっち、`が住んでいました。私よりも10歳は年上の女性、赤ん坊の子守りをしながら、近くの子供達を引き連れて、薬師堂の境内で遊んでいました。小学校に入る前は私も加わっていました。耳は聞こえ、話す際には「う、う、う」とだけ言い、皆何とはなく、言っている事、言おうとしている事を少しは理解できていたようです。愛嬌のある人で、いつも笑顔を絶やしません。あらためて思い返すに、

「こえ」との出会いだったのでしょうか。

この女性が小中学校に行ったのかどうかは解りません。いわゆる知恵遅れだったのかも解りません。`うっち、`という言葉は差別用語です。私もこの女性を他の餓鬼と同じように、`うっち、`と呼んでいました。それでもにこやかに「う、う」と笑顔で応えていました。「こえ」が、身振りとともに、言葉にならない声が発せられていたわけです。それを私ら餓鬼達は声として受け止めて、共に遊んでいたのでしょうか。

「う、う」という呻き声のような声も、一つの言葉として成り立っていたわけです。その一方で、言葉なき言葉「こえ」でもあり、日常の暮らしの中で言葉にならない「こえ」として、喜びと悲しみ、またその狭間にある声をごく当たり前に、もしくは必死に発して、自分の側に引き寄せ、他と繋がっていく世界を生み出す媒体だったのでしょうか。「う、う」という声は、他の動きへと感染させ誘導する、パフォーマンスな言葉だったのでしょうか。

吉本隆明の『言語にとって美とはなにか』（勁草書房、1965年）を思い出しました。1970年代のいつ頃か、回りくどい迂遠な議論だと思い、きっちり読めませんでした。とはいえ、何となくすごく納得した所がありました。「う」について述べた所です。

「たとえば狩獵人が、ある日はじめて海岸に迷いでて、ひろびろと青い海をみたとする。人間の意識が現実的反射の段階にあったとしたら、海が視覚に反映したときある叫びを<う>なら<う>と発するはずである。また、さわりの段階にあるとすれ

ば、海が視覚に映ったとき意識はあるさわりをおぼえ<う>なら<う>という有節音を発するだろう。このとき<う>という有節音は海を視覚的に反映したことにたいする反映的な指示音声であるが、この指示音声のなかに意識のさわりがこめられることになる。また狩猟人が自己表出のできる意識を獲取しているとすれば<>という有節音は自己表出として発せられて、眼前の海を直接的にではなく象徴的（記号的）に指示することになる。このとき、<>という有節音は言語としての条件を完全にそなえることになる。」

「有節音声自己表出として発せられるようになったとき、いかえれば言語としての条件をもつようになったとき、言語は現実的な対象の一義的（eindeutig）な関係をもたなくなった。たとえば、原始人が海をみて、自己表出として<>と叫ぶとき、<う>という有節音声は、いま眼のまえにみている海であるとともに、また他のどこかの海をも類概念として抽出していることになる。そのために、はたたいに眼の前にある海は<>ということばでは具体的にとらえつくせなくなり、ひろびろとしているさまを<の原>なら<うのはら>といわざるをえなくなった。これは<蒼き海の前>といっても、もっと具体化して<さざなみのたつ蒼き海の前>といっても、眼のまえの海のすべてをつくすことができないのである。この過程をどれだけふんでも、視覚にうつる眼のまえの海のすべてを言語はまるごとあらわすことができない。／しかし、自己表出性をもつことによって有節音声は

べつの特長をも獲取した。海を眼のまえにおいて<の原>という有節音声を発しても、また、住居の洞穴にいながら<の原>という有節音声を発しても、おなじように、現実にくくつもある海を類概念として包括することができることであった。これは、音声が発する現実の反射的音声という現実的反映との一義的な結びつきを徐々にながい時間をかけてはなれてゆく過程で、手にいれた特性であった。」（傍点略、以下同様）

吉本が言葉の発声について述べた所です。吉本はこれを述べる前に、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』を引いています。『ドイツ・イデオロギー』は1930年に三木清訳、1936年に唯物論研究会訳、吉本はこの訳本を使用しています。

「『精神』は元来物質に『憑かれ』てあるといふ呪はれたる運命を担つてある。現に今、物質は、運動する空気層として、音といふ形をとつて、要するに言語の形をとつて現はれる。言語は意識とその起源の時を同うする。——言語とは他人にとつても私自身にとつても存在するところの実践的な現実的な意識であり、また、意識と同じく、他人との交通の欲望及び必要から発生したものである。一個の関係が存在するといふ場合、それは私にとつて存在する。ところが動物は何物に対しても『関係』しないし、一体、関係といふものを持たないのである。（中略）故に意識は、元来一種の社会的産物であり、そしてこのことは、一般に人間が存在する限り変らない。言ふまでもなく意識は最初は、最も手近な感性的な環境に

就いての意識にすぎず、意識化しつつある個人の外部に横はる他人や事物とのごく局限された関連の意識たるにすぎない。それは同時に自然に就いての意識である。」

私はかつて古在由重訳（岩波文庫、1956年）で読んだが、吉本の引用部分を見ると、極めて読みにくい訳文です。これは省き、『新編輯版ドイツ・イデオロギー』（廣松渉編訳、小林昌人補訳、岩波文庫、2002年）の該当する部分をあげてみます。

「「精神」はそもそも初めから／物質に「取り憑かれて」いるという呪いを負っており、ここでは物質は運動する空気層、音、要するに言語という形で現われる。言語は意識と同一年である。——言語は、実践的な、他の人間たちにとっても実存する、それゆえに私自身とってもまた最初に実存する現実的な意識である。そして言語は、意識と同様、＜交通から＞他の人間たちとの交通に対する欲求と必要から、初めて生じる。意識はこうして、そもそもの初めからすでに、一つの社会的な生産物であり、いやしくも人間たちが実存する限り、そうであり続ける。意識は、もちろん当初は、単に最も身近な感性的環境についての意識であり、自らを意識し始めた個人の外部に存在する他の人びと・事物との、局限された関連の意識である。それは同時に自然＜について＞の意識である。」

先の唯物論研究会訳の方が解りやすい感じですが。「う」という声が意識的に発声されるなら、それは＜＞という言葉になり、眼前の海を指すばかりではなく、その眼前の事象を捉えきれなくなる一方で、海とい

う抽象的概念も指す事になり、他の人との会話・関係も可能になるという事でしょう。言語も意識も「他人との交通の欲望及び必要から発生したものである」、多分、洞窟壁画の動物に見られるように、原始人は動物も他人として表象して話しかけたり祈願したりしていたのであろうし、それは飼い猫や犬と一緒に暮らしている現代人も同じだろう。

「う、う」は海へと展開する原初の言葉だった。あの「うっち、の女性は原初の言葉とともに原初の時を生き続けていた、こう思うと、何やら光明のような物が射してくるとともに、何だか切なくなってきました。それだけではなく、あの女性にとって「う、う」は単なる呻き声ではなく、意識して表出された言葉だったのであり、その女性を中心に、この「う、う」を媒介にし、他の動きへと感染させ誘導する、遊びの場が生まれていたと思ひ当たります。

子供達の短い言葉や手振り・身振り、身体の触れ合い、歓声、騒ぎ声、身体の動きといった、身体の協同した運動体のような集まりを体験していたのではないかと思ひ返すとともに、それは現在にいたるまでどこかに生きていたのだろうかと思ひあぐねます。だが、こうした記憶が甦ってくるころからすると、単に幼少年期に時たま現われた、孤島におけるような時空間ではなかったとは思っています。

この孤島では島国から離れて、好き勝手に遊ぶ事ができ、海原からたっぷり滋養を授けられながら、知らず知らずの内に島国に対峙し、それを批判する位置に浮んでい

るかもしれません。そして、こうした孤島が集まるなら、群島になって連繋し連帯することができるかもしれません。今さらながら、こうした事を思い巡らしています。

学会や研究会、修論などの発表会などで、コメンテーターが専門外なのですがといった前置きをして、コメントをするのをよく耳にしました。お前の言う専門って何なんだと茶々を入れたくなりました。こういう人は謙遜した風を装いながら、何らかの専門家であるという特権的な自意識、また矜持を持っているのでしょう。専門に閉じ籠らないで、こうした場に出て来るのはいい事かもしれませんが、こうした手合いは互いの批判的な応答を予め遮断し、責任逃れの駄弁をしているにすぎないようです。

こうした専門を格調高いと思い込んでいる人は大概傲慢で、狭い料簡しかなく、他の者の批判を決して受け付けようとしません。中井正一が「思想的危機における芸術ならびにその動向」で述べている事とぴったり合います。学問・大学批判が50年以上も前にありました。反体制・反権力闘争の中で、学内のみならず社会でも、文化的・政治的に知・知性の貧困が鋭く問われました。

そうした文化的・政治的な闘争主体として、全共闘は議論する中から現われ、闘争にはほとんど敗北しながらも、運動としては低潮ではあれ、しみじみと継続していったと思います。私自身、大学という制度に追随して、紆余曲折、右往左往、右顧左眄しつつ、その成果のような物の影響、もしくは恩恵を受けてやってきた／やってこれ

たような気がします。

大学闘争後、大学に残った人達の組織した宗教社会学研究会は、既成学会批判を踏まえた議論の場として貴重で、少なからぬ恩義を感じています。かつての全共闘・新左翼運動については、「高橋和巳、`わが解体、の途上にて」(『文化／批評』夏季臨時増刊号、2018年)、『荒畑寒村』(ミネルヴァ書房、2022年)で、私なりの総括の一端を書いたつもりです。

小特集「知と集団をめぐって」の3人の文を読んで、かつての新左翼諸党派はかなり旧態依然で、教条的かつ排他的でしたが、「集団性」、共闘・連帯という視点から全共闘については考えてみたいと思いました。李さんの言う、軍産学複合体／協力団は韓国ばかりではなく、日本でも世界中でも推進されていよう。閉塞と活況が同時進行しているという事態なのでしょう。いわゆる理系・文系を問わず、各大学、および大学内の分断化が勢いよく進行しているでしょう。

かつてのように大学は社会的不適合者のアジールだなんて牧歌的に言うてはいられない、切迫した情況、そうした中で大学内外に孤島を、そして群島を築く事が知の集団性を創出していく方途かもしれません。ある書名を真似るなら、`アクティヴィズムの知／知のアクティヴィズム、を追求する事が今日的テーマなのかもしれない。それはさらなる大学批判闘争がどこかの孤島で兆しているのかもしれません。

退行的ナショナリズムと自縄自縛の世界けっこうスーパーに行っているのですが、

ベースフード社の物や日清「完全めし」を見かけた事はありませんでした。売っていないかもしれませんが、値段が高そうだから、買う事はないでしょう。こんな物を買って食べている人がどれほどいるのでしょうか。

面白いのは二木謙三、「食物を「完全」なかたちで摂取できるか否かという基準」に基づいて、栄養価もあるだろうが、「すべて天然通りでなくてはならぬ」と片意地を張っている所が、何ともほほえましい。生もの主義、科学的復古主義、自然回帰主義とでも言うのでしょうか。排他主義の余りに倒錯的世界に浸って自己充足していたのでしょうか。この人、体重はどれくらいか、何歳くらいまで生きたのでしょうか。

数値に物を言わせる科学的実証主義がどこでも趨勢を占めるとともに、民族主義、ナショナリズム、日本精神主義に閉塞した世界、排他的に固執しているようで、窮屈な自縄自縛の世界が心地よいのでしょうか。外国人嫌悪の広がる一方で、カリフォルニア米はうまいと言われる昨今、米の退行的ナショナリズムは今でも健在なのでしょうか。イタリア映画『苦い米』、かつてイタリアでも米を作っていると知って、少なからず驚きました。

私たちは日々どんな物を食べているのでしょうか。60年くらい前にはとんでもない物を食べていました。発ガン性物質とされるチクロやサッカリンをはじめとする人工甘味料・化学調味料、現在では食卓からほとんど消えている味の素はどうだったのでしょうか。

真黄色の沢庵、黄色や緑、桃色のアイスキャンデー、かき氷・氷水での苺の赤、レモンの黄色、メロンの緑、色とりどりの粉末ジュースなど、合成着色料を添加して染め上げられた、目にも鮮やかな彩り豊かな食べ物が溢れていました。

企業の責任は問われなかったようですが、テレビ・コマーシャルにも感化され、唇や舌を赤や黄色などに染めながら、そういう物に私なんかは嬉々としてどっぷりと浸っていました。水俣病なども含めて、これがいわゆる高度経済成長、資本主義リアリズムの所産だったのです。現在はどうか、化学的作物／有機的作物による貧者／富者の二極化といった事態が進行中といったところでしょうか。

次号特集 文学散歩

時には「読みながら歩く」「歩きながら読む」ことが、誰にでも必要かもしれません。町のあちこちに大切に設置されている二宮尊徳像からも分かるように、「歩きながら読書する」習慣はスマホ時代で始まったものではなく、かつては健全な行為とされていました。

MFEの編集が行われている京都には、祇園精舎の鐘から檸檬の香りが漂う丸善京都本店まで、時代を越えて実に多くの文学の聖地が存在します。名作の舞台や作家の人生と深く結びついた地域を巡礼しながら、架空の物語と実生活の関わりやギャップを思考することが、文学への理解と日常への満足の双方を充足することにつながります。

場所と文章はセットです。どこで読んだかによって、文章の意味合いや受け取り方が変わることは、誰しも経験したことがあるのではないのでしょうか。あるいは、文字の渦の中でしか生きられない私たちにとっては、ほんの少しでもページから目を離し、体を前に動かして歩み出すことが、文章に対するスタンスや考え方を整理するチャンスにもなります。文学散歩の哲学の原点は、おそらくこのあたりにあるでしょう。

こうした考えを踏まえ、今回のMFE特集のテーマを「文学散歩」としたい。野田宇太郎の懐かしい舞台巡りのような典型的な文学散歩はもちろん、「文学」と「散歩」の関係をさまざまな視点からとらえた文章を、幅広く募集します。普段文学からかけ離れている（ように見える）研究をされている方々も、このMFEからの招待をきっかけに、一度文学へ寄ってみませんか？そこにはきっと、紙から飛び出すような新鮮な展望が待っています。（ニコラス・ランブレクト）



때로는 '읽으면서 걷고' '걸으면서 읽는' 것이 누구에게나 필요할지 모릅니다. 동네 여기저기에 소중하게 세워져 있는 니노미야 손토쿠 상에서 알 수 있듯 '걸으면서 독서하는' 습관은 스마트폰 시대에 시작된 것이 아니라 과거에는 건전한 행위라 여겨졌습니다.

MFE가 편집되는 교토에는 기온정사의 종소리부터 레몬향이 풍기는 마루젠 교토 본점까지 시대를 초월해 실로 많은 문학의 성지가 존재합니다. 명작의 무대나 작가의 인생과 깊이 관련된 지역을 순례하면서 가공의 이야기와 실생활의 관계나 겉에 대해 사고하는 것은 문학 이해와 일상의 만족 둘 다를 충족하는 것으로 이어집니다.

장소와 글은 세트입니다. 어디서 읽느냐에 따라 글의 의미나 받아들이는 방식이 바뀌는 것을 누구나 경험한 적이 있지 않을까요. 어쩌면 문학의 소용돌이 속에서만 살 수 있는 우리에게 아주 잠깐이라도 페이지에서 눈을 떼고 몸을 앞으로 움직여 걸어 나가는 것이 글에 대한 입장이나 사고를 정리할 기회일지도 모릅니다. 문학 산책의 철학이 있다면 그 원점은 아마 여기에 있겠지요.

이러한 생각에서 이번 MFE 특집의 테마를 < 문학 산책 > 으로 하고자 합니다. 노다 우타로 식의 전형적인 문학 산책은 물론, '문학' 과 '산책' 의 관계를 다양한 관점에서 바라본 글을 폭넓게 모집합니다. 평소 문학과는 동떨어져 있는 (것처럼 보이는) 연구를 하시는 분들도 이번 MFE 의 초대를 계기로 문학에 한 번 들여보지 않으시겠습니까? 거기에는 분명 종이에서 뛰쳐나올 듯한 신선한 전망이 기다리고 있을 겁니다. (니콜라스 렘브레트)



편집후기

◆ 2월 하순, 덴리대학 ‘3기 모임’이 열려서 다녀왔다. 고고학 전공 3학년이던 예전 학생들 21명 중 12명이 참석했다. 다들 이미 쉰 전후다. 그런 것치고는 익숙한 얼굴뿐이라 30년쯤 전과 달라지지 않았다. 여기에는 꽤 놀랐다. 더 놀랍게는 어느 여성에게는 딸과 아들이 있고 그 딸에게 두 아이가 있어 즉 손주가 둘이나 있었다. 1994년 이 학년에서 민속학 실습으로 시코쿠 순례를 시작해 이 여성도 포함해 여성 10명, 남성 5명이 참가했다. 한여름 더운 시기에 걸거나 전차나 버스를 타거나 했고 내가 덴리대를 그만둔 97년 여름에 기원이 끝났다.

나는 37년 전에 덴리대에 취직하기 위해 나라에 이사했다. 서쪽으로, 말하자면 서방정도를 목표로 썸얼까. 새 학과를 창설한다는 이유로 불려왔다. 당시 센다이 시에 있는 문리학원 강사를 하느라 바빴다. 그래서 가능하면 빨리 채용해 달라고 말했더니 곧장 채용해 주었다. 실로 감사한 일이었다. 1989년 3월 말 당시 화물 취급을 받던 고양이 고타로를 데리고 이타미 공항으로 날았다.

덴리대, 1년째, 수업 없음. 2년째, 종교학과 한 과목을 도왔다. 고고학 민속학 전공으로는 문부성에서 인가를 받지 못한다는 이유로 가나세키 선생이 민속학을 빼도 되느냐고 물어서 간사이는 고고학이니까 꼭 빼 달라고 즉각 대답했다. 3년째, 종교학과 두 과목을 도왔다. 역사문화학과가 간신히 인가를 받았다. 고고학 전공 정원 20명인 곳에 234명의 지원자, 27명 합격. 92년 4년째, 1학년을 맞이했다(93년도는 545명의 지원자, 94년도는 434명의 지원자, 이 이후로도 내가 있는 동안에는 400명을 넘는 지원자가 있었다). 교원은 고고학 6명, 민속학 2명이라는 지나치게 많은 정도의 수였다. 현재 세 명이 세상을 떠났다.

95년도, 민속학 관련 졸업논문은 2명이었고 내가 담당한 것은 1명. 나는 97년 9월까지 덴리대에 있었는데 실로 한가하고 여유가 있었다. 도서관의 충실한 여성잡지에는 도움을 받았다. 덴리교의 오야사마 나카야마 미키 교주에게 크게 감사한다. 또 민속학 실습으로 한 시코쿠 순례도 그렇지만 뛰어나고 좋은 학생들뿐이었다. 다들 지금까지 밥 벌이를 하며 잘 살아왔으리라. 좋은 일이다. 다음 ‘3기 모임’은 2030년이다. 나는 살아있을까 하는 생각이 들고 말았다.

3월에 간행된 어느 주간지에 “어쩌면 이 나라 사람들 중에서 가장 ‘차별’ 받는 것이 아키히코 여왕 등 황족 일지도 모른다”라는 문장이 있었다. 따옴표를 붙인 차별, 호적이 없고 일본에서는 혼자 걸어도 다닐 수 없다는 등의 이유를 들고 있었다. 세금을 내지 않는다는 것은 듣지 않았다. 이 아키히코 씨는 영국에 유학했는데 그때 비용은 아마 내정비(内廷費) 즉 세금으로 충당했을 것이다. 이것은 ‘차별’인가?

차별 체계의 정점에 위치한 혹은 국민이라는 것을 초월한 특권계급일 것이다. 이 황족은 공무라는 명목으로 해외에도 어디든지 여행할 수 있다. 돈 걱정은 전혀 없다. 생활은 세금으로 보증된다. 확실히 이것은 일본국 헌법이나 황실전범, 황실경제법에 기초한 차별이다. 다만 피차별자를 만들어내는 차별이다. 과거에 시라토 산페이 『카무이전』이나 『닌자 무예첩』을 읽곤 했다. 정점에 천황·황족, 가장 밑바닥에 부락민이라는 차별 체제, 이것은 지금도 음으로 양으로 존속하고 있다.

앞서의 필자는 ‘차별’이라는 말로 기묘한 차별을 영리한 척 혹은 냉소적으로 지적하고 득의양양해 하고 있지만, 천황·황족을 자명시하며 천황제라는 차별 체제를 용인하고 있는 것에 지나지 않는다. 이런 말이 리버럴로 받아들여지고 있는 것이리라. 싫은 세상이다. 사호 강에 늘어선 벚나무에 꽃이 피기 시작했다. 다시금, 혹은 몇 번이라도 심기일전하라는 것일까. (光)

◆아침 드라마 주제가 아니지만 “나날이 세계가 나 빠진다”. 하지만 나빠진다는 것은 세계정세를 논하는 말로 표현되는 것이 아니고 또 그 진위가 중요하지도 않다. 이 가사는 “기분 탓인가 그렇지 않아” 하고 이어진다. 세계에 대한 스스로의 감지와 관련된 이 의문과 단정이 보여주는 것은 세계지도 앞에 둔 설명이 아니라 자신이 살아가는 매일의 일상이 모르는 사이에 그 저류에서 이미 크게 바뀐 것은 아닌가 하는 기분 나쁜 감각이고, 그 감각을 지우려고 하는 억지 부인이며, 오늘 보고 있는 풍경이 내일은 다른 것이 되어 있지는 않을까 하는 두려움이다.

하지만 지금에 이르는 이 세계가 결코 무조건적으로 긍정되어야 하는 것이 아니라면 지금 요청되는 것은 기존 질서가 형태를 잃고 소진되는 불확실한 영역에서 미래를 개시하는 작업이다. 아무리 무서워도 그 출발점을 정면에서 받아들이는 일이다. 그리고 묻도록 하자. 갱신되는 사망자의 수가 눈앞에 들이닥치는 매일 속에서 나의 말은 이 미래를 개시하는 작업과 어떻게

관계 맺을 수 있을까 하고. 교토에서는 매주 토요일에 제노사이드를 규탄하는 데모가 계속되고 있다. 나도 종종 참가하지만 이 말의 작업은 데모의 구호로 대체할 수 있는 것이 아니다. 굳이 말하자면 몸을 노상으로 가져가는 것이 일단은 중요할지도 모른다.

그것은 우리라는 주어와 관련된다. 이번 호에 수록된 후쿠오카 히로아키 씨의 글을 꼭 읽어주기 바란다. 바로 지금, 쓰는 것, 읽는 것으로 무엇을 할 수 있는가를 생각하게 하는 글이다. 이 물음을 둘러싸고 장을 마련하고 싶다. 또 바로 이 물음을 떠맡는 데에 『MFE = 다 초점확장』의 활동이 있다고 생각한다. 모일 수 있는 장을 준비하겠습니다.(雷)

◆점성술에 대한 관심이 끊이지 않는다. 직접적으로는 오디오북으로 듣는 이시이 유카리의 『점성술적 사고』가 재미있어서 작년 말부터 오늘까지 몇 번씩 반복해서 듣고 있기 때문인데, 애초에 경마 팬인 내게 과거 데이터의 축적에서 일종의 경향성을 이끌어내어 그 선에 따라 미래의 현실을 끌어당기고자 하는 영위가 이미 일상 속에 녹아들어 있기 때문이기도 할 것이다. 경마의 경우 도박으로서 미래의 결과를 내다보려 하는 셈인데 개최 시기와 코스 종류, 말 자신의 전력이나 혈통의 특성, 담당하는 훈련사의 방침이나 말에 타는 기수의 실력 등 점성술과 다르지 않게 참조항은 방대해진다. 그러한 데이터베이스를 참조하면서 도출되는 ‘경향’에는 가령 작은 고쿠라 경마장의 단거리에서는 최단 거리를 달릴 수 있는 안쪽 트랙의 말이 유리하다고 수긍하기 쉬운 합리적 설명을 붙일 수 있는 것부터 이 레이스에서는 왜인지 가타카나 네 글자 이름의 말이 잘 달린다는 등 논리적으로는 전혀 설명할 수 없는 것까지 다양하다. 추론을 거듭해서 논리적인 설명을 이끌어내는 전자 같은 행위를 예상이나 분석이라 부르고 그렇지 않은 후자의 경우를 오컬트나 어노말리라 부르는 현실에 우리는 살고 있다.

여기까지 쓰고 나서 이번 호에 투고된 글의 테마 중 하나인 AI는 점성술이나 경마 예상과 뭐가 다를까 궁금해지기 시작했다. 우리는 정보산업이 축적한 방대한 데이터를 바탕으로 더 개인화된 점성술이나 예상을 향유할 수 있는가? 아니면 그것과는 질적으로 전혀 다른 사태에 직면하려고 하는가? AI는 올해의 더비 결과를 맞힐 수 있을까? 혹은 마권은 빛나가고 점은 배반당하기 마련이라면 AI가 그려내는 현실에는 어떠한 성질의 결함이 있고 오컬트나 어노말리가 내미는 세계에는 어떠한 가치가 부여되는가? 물음은 끝이 없다.

유발 노아 하라리 『넥서스』는 AI와 인간사회의 접점과 단면을 탐구하는 두꺼운 책임은 분명한데 여기에 이르러서도 종교나 신앙 문제가 뿌리 깊이 관통하고 있는 모습을 읽어낼 수 있다. 컴퓨터 네트워크가 만들어내는 현실은 유례가 없는 강도로 우리가 믿어 왔던 것을 뒤흔든다. 그런 미래를 어떻게 살아가면 좋은가? 이 한없는 물음에 대해서는 타블릿에서 눈을 떼고 이번 호 「돌과 증」의 결말에서 보여주듯 달의 아름다움에 눈을 빼앗기면서 생각하는 시간이 필요할지 모르겠다.(西)

◆웃지 못할 이야기지만 지금도 가끔 ‘글 잘 쓰는 법’ 같은 종류의 책을 읽을 때가 있다. 띠지에 있는 “글이 써지지 않아 고민하는 당신에게” 같은 선전문구를 별로 믿지는 않지만 일단 금방 읽을 수 있고 밀쳐야 본전이라는 생각도 있기 때문일 것이다. 근래도 자기 전에 킨들로 그런 종류의 쓰기 책을 조금씩 읽었는데 어제 다 읽고 나서 너무나 감회가 없었던 나머지 뒤적여 보니 한 군데 줄을 그은 곳조차 없어서 놀랐다. 다 읽고 나면 반드시 그전보다 ‘쓸 수 있는 당신’이 되어 있을 거라더니. 편집후기에도 뭘 써야 할지 몰라 고민하고 있었던 차라 지금 화젯거리로 쓰고 있다는 점에서는 도움이 되었을 수도.

MFE와 같은 잡지나 책을 읽다 보면 꽤 종종 다들 참 잘 쓰는구나 싶을 때가 있다. 반면 아직도 나는 읽는 것과 쓰는 것 사이를 어떻게 연결하면 좋을지를 모르는 것 같고, 그 상태에서 그저 도락처럼 읽고만 있고 싶어지기도 한다. 남들이 쓴 책을 읽는 것이 현실도피가 될 때도 있다(현실과 진지하게 마주하는 글을 읽으면서 이렇게 느낀다는 게 죄송하지만). 시간이 조금 더 걸릴 뿐 번역도 나름대로 의미 있는 일인 것처럼 보이면서도 다른 것을 하지 않아도 된다는 점에서는 마음 편한 일이다. 아직 읽을 게 너무 많다, 공부해야지, 뭐 이런 생각을 하는 것이 좀 위안이 되는 요즘이다.(明)

◆학생의 레포트를 읽고 위화감이 들어서 “이건 AI로 썼는가?” 하고 AI로 확인하고 감점한다. 나는 대체 무엇을 하고 있는 걸까 생각하면서. 2년쯤 전부터 이런 일이 일어나기 시작했지만 그것도 급격히 과거의 이야기가 되고 있다. AI에게 완전히 맡겼음을 금방 알 수 있는 글과도 여전히 드문드문 마주치지만 요즘은 자력으로 쓰려고는 하면서도 사고 프로세스에 AI를 끼우고 있구나 여겨지는 것이 늘어난(아니, 거의 그렇게 되어 버린 듯한) 느낌이 든다. 근무하는 곳 전

임교원의 말에 따르면 작년이 ‘학생 AI 원년’으로 졸업논문의 질이 단번에 바뀌었다고 한다. 시간강사로 레포트나 감상문을 읽을 뿐인 나도 확실히 그렇게 느껴진다. 일정량의 깔끔하게 정돈된 글이 모이게 되었다. 의무적으로 써야 하고 평가의 대상이 되는 대학 레포트라면 그나마 이해가 되지만 쓰고 싶은 것을 쓰고 있을 터인 블로그 글 같은 데에도 깔끔하게 정리된 AI 냄새가 나는 것이 급증하고 있다. 뿐만 아니라 AI가 산출해 낸 대량의 글을 AI에게 요약하게 하고 이해한 것 같은 기분이 되는 경우도 늘었다. 인간은 대체 무엇을 하고 있는 걸까? 6년 전 MFE는 ‘쓰고·읽는’ 연결을 만드는 것을 목표로 시작되었지만 지금은 그 무렵에는 상상도 못했던 ‘읽기·쓰기’의 위기를 맞이하고 있는지도 모른다. 묘하게 정돈된 글만 넘치는 시대이기 때문에 더욱, 거칠어도 반드시 쓰고 싶다는 의욕에 추동되어 쓰인 글을 읽고 싶다고 강하게 생각한다. (이번 호는 특집을 엮지 않았습니다. 여러 가지 아이디어가 있었지만 마감까지 정리가 되지 않아 정기 간행을 우선하여 ‘빠고 가기로 하자’는 결론이 나왔습니다. 다음호에서는 특집이 부활됩니다. 특집기획도 늘 모집 중입니다. 거친 안이어도 상관없습니다. 꼭 제안해 주세요.) (古)

◆이번 호에 게재된 강희대 씨의 글에 압도당했다. 읽는 것과 쓰는 것, 이야기하는 것 그리고 살아가는 것이 어떤 식으로 이어지고 서로 반향하는가. 그것들의 10년에 걸친 중층적인 관계 속에서 연구라는 영위와 가족에게 일어난 사건이 서로를 조명하며 새로운 의미를 띤다. 그런 과정이 선명하게 그려져 있다고 생각했다. 『MFE』라는 장이 이러한 말을 낳는 계기가 될 수 있다는 것은 내게는 하나의 희망이다. (N)

MFE 간행을 위한 기부 안내

지금까지 MFE에서는 편집·번역 작업을 해주시는 분들께 약소한 사례금을 지급해 왔습니다. 이는 한 독지가가 기부를 해주신 덕분입니다. 하지만 독지가의 기부만으로는 MFE 간행이 조금 불안한 것도 사실입니다. 그런 관계로 여러분께 MFE를 지속적으로 간행하기 위한 기부를 부탁드립니다.

기부를 하고 싶으신 분은 편집위원회 (mfe.editor@gmail.com)에 연락해 주시면 입금 계좌번호를 알려 드리겠습니다. 부디 잘 부탁드립니다. (光)

編集後記

◆二月下旬、天理大学の「三期の会」が催され、行って来た。考古学専攻の三年目の元学生二二名の内一二名が参集した。皆、もはや五〇歳前後である。それにしても馴染みのある顔ばかりで、三〇年ほど前と変わっていない。これにはかなり驚かされた。さらに驚いた事には、ある女性には娘と息子、その娘に二人の子供、つまり孫が二人もいた。一九九四年のこの学年から民俗学実習として四国遍路を始め、この女性も含めて、女性一〇名、男性五名が参加した。真夏の暑い時期に歩いたり、電車やバスに乗ったりして、私が天理大を辞める、九七年夏、満願となった。

私は三七年前、天理大に就職するために、奈良に引越してきた。西へ、いわば西方浄土を目指した事になるのか。新学科を創設するという事で呼ばれた。当時、仙台市にある文理予備校の講師をしていて忙しかった。そのため、できれば早く採用してほしいと言った所、すぐ採用してくれた。実にありがたい事だった。一九八九年三月末、当時貨物扱いだった猫の小太郎を連れて、伊丹空港へと飛んだ。

天理大、一年目、授業なし。二年目、宗教学科の一コマを手伝う。考古学民俗学専攻では文部省で認可されないとの事で、金関先生から民俗学を取ってもいいかと尋ねられ、関西は考古学だから、ぜひ取ってくださいと即座に返事。三年目、宗教学科の二コマを手伝う。歴史文化学科がようやく認可された。考古学専攻定員二〇人の所へ二三四名の志願者、二七名合格。九二年の四年目、一回生を迎える（九三年度は五四五名の志願者、九四年度は四三四名の志願者、これ以降も、私がいる間は四〇〇名を超える志願者だった）。教員は考古学六名、民俗学二名という多すぎるくらい教員である。現在、三名が鬼籍に入っている。

九五年度、民俗学関連の卒論は二名で、私が担当したのは一名。私は九七年の九月まで天理大にいたが、実に暇で、余裕があった。図書館の充実した女性雑誌には世話になった。天理教の親様・中山みき教祖に大いに感謝している。また、民俗学実習での四国遍路もそうだが、いい優れた学生ばかり

であった。皆、これまで食い扶持を稼いで、まともに生きてきたのだろう。いい事だ。次回の「三期の会」は二〇三〇年である。私は生きていられるかと思ってしまう。

三月刊行のある週刊誌に「もしかしたら、この国の人間でもっとも「差別」されているのが彬子女王ら皇族かもしれない」という文があった。鍵括弧付きの差別、戸籍がない、日本では一人で歩けないなどといった理由があげられている。税金を取られないという事はあげられていない。この彬子さんは英国に留学したが、その際の費用は恐らく内廷費、つまり税金でまかなわれたのだろう。これは「差別」なのか。

差別体系の頂点に位置する、あるいは国民なるものを超越した、特権階級というものだろう。この皇族は公務という名目で海外でもどこでも旅行できる。金銭の心配は全くない。生活は税金によって保証されている。確かにこれは日本国憲法や皇室典範、皇室経済法に基づく差別だ。ただし被差別者を生み出す差別である。かつて白土三平の『カムイ伝』や『忍者武芸帖』を読んだものである。頂点に天皇・皇族、最底辺に部落民という差別体制、これは今でも陰に陽に存続している。

先の筆者は「差別」によって奇妙な差別を賢しらに、もしくはシニカルに指摘して得意がっているが、天皇・皇族を自明視し、天皇制という差別体制を容認しているにすぎない。こういう物言いがリベラルとして受け入れられているのである。嫌な世間だ。佐保川の桜並木は花が咲き始めた。あらためて、あるいは幾度でも心機一転という事になるか。（光）

◆朝ドラの歌ではないが、「日に日に世界が悪くなる」。だが悪くなるというのは、世界情勢を論じる言葉で示されることではなく、またその真偽が重要なわけではない。この歌詞は、「気のせいかな、そうじゃない」と続く。世界に対する自らの感知にかかわるこの疑問と断定が示しているのは、世界地図をまえた講釈ではなく、自分が生きる毎日の日常が、知らず知らずのうちにその底流で、すでに大きく変わっているのではないかという嫌な感覚であり、その感覚を打ち消そうとする無理な否認であり、今日見ている景色が、明日には全く別のものになっているのではないかという怖れである。

だがしかし、今に至るこの世界が決して無条件に肯定されるべきではないならば、今求められているのは、既存の秩序が形を失い消滅する不確かな領域から未来を開始する作業だ。いかに怖くても、その出発点を正面から受け入れることだ。そして問うてみよう。更新される死者の数が突き付けられる毎日の中で、私の言葉は、この未来を開始する作業にどうかかわることができのだろうか、と。京都では、毎週土曜日にジェノサイドを糾弾するデモが続いている。私もしばしば参加するが、この言葉の作業は、デモのコールに代替されるわけではない。あえていえば、体を路上にもっていくことが、まずは重要なかもしれない。

それは、私たちという主語にかかわることだ。本号所収の福岡弘彬さんの文章をぜひ読んでいただきたい。まさしく今、書くこと、読むことで何をなすことができるのかを考えさせられる文章だ。この問いをめぐって場を持ちたいと考えている。またこの問いを引き受けるところにこそ、「MFEⅡ多焦点拡張」の活動があると思う。集まる場を準備します。（富）

◆星占いへの興味が尽きない。直接的にはオーディオブックで聞いている石井ゆかりの『星占いの思考』がおもしろく、昨年末から今日まで何度もリピートして聞いてしまっているためだが、そもそも競馬ファンの自分にとって、過去のデータの集積からある種の傾向を導きだし、その線に沿って未来の現実を手繰り寄せようとする営みが、既に日常のなかにとけ込んでいるためでもあるだろう。競馬の場合、賭け事として未来の結果を見通そうとするわけであるが、開催時期とコースの種類、馬自身の戦歴や血統の特性、携わる調教師の方針やまたがる騎手の巧拙など、星占いに違わず参照項は膨大となる。そうしたデータベースを参照しながら導きだされる「傾向」には、例えば小回りの小倉競馬場の短距離では、最短距離を走れる内枠の馬が有利であると、納得しやすい合理的な説明をつけられるものもあれば、このレースに関してはなぜかカタカナ四文字の名前の馬がよく走るなどと、論理的には全く説明がつかないものまで様々だ。推論を積み重ねて論理的な説明を導く前者のような行為を予想や分析と呼び、そうではない後者の事象をオカルトとかアノマリーと呼

ぶ現実に、私たちは生きています。

ここまで書いてみて、今号に寄せられた文章のテーマの一つでもあるAIは、星占いや競馬予想と何がちがうのだろうかと気になってきた。私たちは、情報産業が集積した膨大なデータをもとに、より個人化された占いや予想を享受できるようになりつつあるのか。それとも、これとは質的に全く異なる事態に直面しようとしているのか。AIは今年のダービーの結果を言い当てることができるのだろうか。あるいは、馬券は外れ、占いは裏切られるものだとするならば、AIが描き出す現実にはどのような性質の欠陥があり、オカルトやアノマリーが差し示す世界にはどのような価値が与えられるのか。問いは尽きない。

ユヴァル・ノア・ハラリ『NEXUS 情報の人類史 下』AI革命』は、AIと人間社会の接点と断面を探る浩瀚な書物であるには違いないが、ここに至っても宗教や信仰の問題が根深く通底している様を読みとることができ。コンピュータネットワークによって生み出された現実は、かつてない強度で私たちが信じてきたものに揺さぶりをかけてくる。そうした未来をどのように生きていけばいいのか。この際限ない問いに対しては、タブレットから目を離し、今号「石と証」の結末で示されるように、月の美しさに見惚れながら考える時間が必要なかもしれない。(西)

◆学生のレポートを読んで違和感を抱き「これはAIで書いたものか」とAIで確認して減点する。自分はいったい何をやらされているのだろう、と思いつつ。2年位前からこういうことが起き始めたが、それも急激に過去の話になりつつある。AIに丸投げしたことがすぐ分かる文章にも相変わらずポツポツ出くわすが、最近では、自力で書くこととはしながらも思考のプロセスにAIを頼ましているだろうと思われるものが増えた(というよりほとんどそうになっているような)気がするのだ。勤務先の専任教員の方によると去年が「学生AI元年」で、卒論の質が一気に変わったのだそう。非常勤でレポートや感想文を読んでいるだけの自分も確かにそんな気がする。一定量のきれいに整った文章が出そうようになった。義務的に書かされ、評価の対象になる大学のレポート

トならまだ分かるが、書きたいものを書いているはずのブログの文章なんかにも、きれいに整理された、AIの匂いのするものが急増している。さらには、AIによって生み出された大量の文章をAIに要約させ、分かった気になる、などということも増えた。人間はいったい何をやらされているのだろう。6年前、MFEは「書く・読む」つながりを作ることを目指して立ち上がったが、今、その頃には想像もしていなかった「読む・書く」の危機を迎えているのかもしれない。妙に整った文章ばかり溢れる時代だからこそ、粗削りでも、どうしても書きたい、という意欲に突き動かされて生み出された文章が読みたい、と強く思う。(今号は特集を立てませんでした。いろんなアイデアがありつつも、締め切りまでに調整がつかず、定期刊行を優先し「無しでいこう」となりました。次号は、特集が復活します。特集企画も、常に募集中です。粗削りな案でかまいません。ぜひご提案ください。)(古)

◆今号掲載の姜喜代さんの文章には圧倒されてしまった。読むことと書くこと、話すこと、そして生きることがどんなふうに繋がり、響き合っているか。それらの十年にわたる重層的な関係の中で、研究という営みと家族に起こった出来事が互いを照らし合い、新たな意味を帯びていく。そうしたプロセスが鮮やかに描き出されているように思った。『MFE』という場がこうした言葉を生むきっかけになりうるというのは、僕にとってはひとつの希望である。(N)

MFE 刊行のための寄付呼びかけ

これまでMFEでは編集・翻訳をやっていた方に些少の礼金を送ってきました。それはある篤志家の寄付によるものです。だが、篤志家の寄付だけではMFEの刊行が心もとないことは言うまでもありません。そこで、皆さんにMFEの刊行継続のために、寄付を募ることになった次第です。

寄付をされてもいいと思っている方は編集委員会(mfe.editor@gmail.com)に申し出てください。追って振込みの口座番号をお知らせします。よろしくお願ひします。(光)

MFE 編集委員会

安里陽子 五十嵐恵邦 石山祥子 姜文姬
近藤有希子 申知瑛 沈正明 竹原明理 車承棋
全成坤 鄭柚鎮 永岡崇 成定洋子 西川和樹
福岡弘彬 謝花直美 ニコラス・ランブレクト
富山一郎 古川岳志 川村邦光 奥田のぞみ
安岡健一 平野克弥 酒井朋子 廣岡浄進
北村毅 沈雅亭

(順不同)

MFE 第7号

多焦点拡張 / 다초점 확장

2026年5月23日 発行

編集・発行 MFE 編集委員会

E-MAIL: mfe.editor@gmail.com

URL: <http://doshisha-aor.net/mfe/>

<https://sites.google.com/view/webmfe/>